エトフE-10

樞密顧問官陸軍中將正二位勳一等

子爵鳥尾公墓誌

公諱敬高號得庵幼稱百太郎中村氏考諱敬義妣德田氏世住長門藩弘化四年丁未十二月五日生于萩少孤年十九爲奇兵隊長變姓名自謂鳥尾小彌太明治元年戊辰之役爲官軍先鋒有功四年任陸軍少將叙從五位兼兵學頭九年昇中將兼大輔丁丑之役參軍長樹殊功叙勳二等賜年金十二年任近衛都督十七年列華族授子爵二十一年任樞密顧問官叙正三位二十二年叙勳一等賜瑞寶章二十三年任貴族院議員二十八年再入樞府三十二年叙從二位三十五年賜旭日大綬章三十八年四月十三日特旨叙正二位翌十四日薨享年五十有九自撰法號曰光念院得庵敬高居士娶十八日荼毘以遺命葬于播磨國加古川光念寺先君嘉側配鹽谷氏生一男一女男光拳祀女廣適侍從日野西資博公爲人風貌雄峻明悟若神負經國之奇才拯濟民之偉略論議正議凜乎不可犯夙以王道爲己任闡大義明名分以維持天下風教嘗建壽塔于京都高臺寺一得庵自作之銘曰

一夷石　二掇土　落々層々般若臺
千眼開來觀不得　由爲引子喙青苔

谷口元次郎

文章

東京帝國大學圖書之印

谷口氏文章

光彩

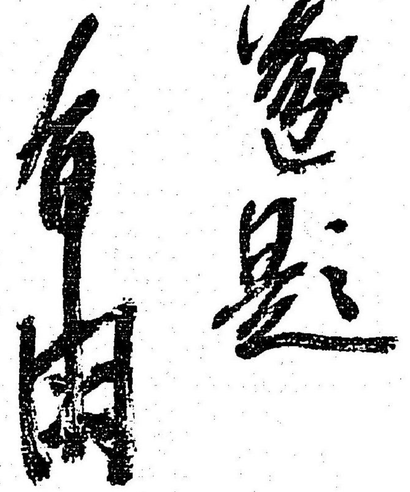
明治辛亥孟春

後學 得菴居士題

得庵全書叙

豫爲出地雷。漸也是風堆。若截活機了。乾坤亦死灰。此余所寄得庵居士。居士弱冠起身於隊伍。當維新征討。祕韜奇略。前無勁敵。天下既傳烏將軍之名。夙嗜文字。悟禪機。閑暇則與洪川獨園默雷峨山諸老。塵談終日。或入伊豆山莊。寓洛東小庵。伍茶博以論泉味。似與世相忘。而其心未嘗不在皇室也。奮則豫。靜亦漸。所自任如此矣。動接時宜。則唱政黨。剏教社。結法會。作學舍。昧者瞑眩。不能

福慈居



窺之。或疑千變萬轉。無所定規。何知其心未嘗不在一民心正風俗也。發爲文章。縱横無礙。時々與中村敬宇輩。錬磨切磋。不拘法處。迺有眞諦。上保護

皇室。下安定民心。如風如雷。活機飛動。煥焉永明矣。嗚呼居士薨。既七年。令嫡光君與義故門生謀。合刻遺稿。名曰得庵全書。川合士德專力校正。士德於居士。可謂有終始。余辱知論志。亦數十年。死灰屢燃。風雷相感。追思之情何竭。今也雄偉容貌。不可復接。壯快說話。不得聽之。士德能收之于一帙。煥焉愈美。使余有對坐笑談之想。幸矣。而不獨余幸也。凡有志國家者。細心讀之。則

皇室可保。民心可定。迺可得窺知耳。讀者其莫忽諸。

明治四十四年一月

藤澤南岳撰

081.8 To558t

得庵全書目次

文體

智德發達論……一
老婆心說 凡十一篇
人權論……二二
言說論……二九
眞妄辯……三七
世相說……四八
告少年文……五五
方便解……六一
無益論……六六
眞如解……七三
破邪顯正……七六

081.8
To558t

国立国会
28. 7. -1
図書館

299111

不思議辯……七八
斷常二見論……八七
護國叢談 凡三篇……九八
明道協會要領解說……一〇〇
和敬議……一三一
國勢考……一三八
佛道本一論 一名法供養 共六卷
同卷之一……一六四
同卷之二……一九五
同卷之三……二二七
同卷之四……二六三
同卷之五……二九四
同卷之六……三二六
廣長舌 凡六篇

教育原論……三六四
儒道大意……三六八
三道國教論 一名緣起心辯……三八〇
護法報國論……三八七
現在の國家……四〇三
加藤弘之の道德法律論を駁す……四一六
忠魂義魂 凡四篇
國家本論……四三一
事物相關論……四四五
國家實體論……四五三
臣の友垣……四九七
時事談 凡四篇
第一編 先憂論……五一九
第二編 果國勢因論上……五四一

第三編 因勢果論下……五六四
第四編 述懷論……五八九
玉椿……六二五
兒戀草……六六六
以心傳……七一五
神武太平策……七八三
續太平策……八〇一
茶道條規……八一六
尺牘三通
養生論……八二四
王道論……八二七
幻術論……八四七
序跋二篇
佛教演說序……八五五

歌卷跋……八五六

言文體

眞正哲學無神論
同卷一……八五八
同卷二……八九七
同卷三……九三二
東洋哲學意見……九七四
地價修正法案反對演說……九八六
禪林消息……一〇一五
人道要論……一〇三八
得庵一夕話……一〇八七
惠の露……一一〇〇
道德辯……一一二二

漢文體

王法論……一一四五
正法眼藏……一一七五
統一學……一一九三
教學指歸……一二〇六

韻文體

洋行日記……一二二九
得庵詩文……一二六六
雄山集……一三一一
連歌……一三一八
花園日誌……一三二四
遺芳……一三五〇
以上

得庵全書凡例

第一則　本年四月は、先師鳥尾得庵大居士の七年忌辰に丁る。是に於て令嗣光君、尊考一生の述作を編纂合刻して、子孫に貽し、併せて義故門生に頒ち、以て尊考の精神を不朽に傳へむとせらる。孝の至りなり。清丸讃嘆の餘り、老病不肖の身を忘れて、之が編纂校正に從事し、以て此の書を結了す。師恩の萬一を報い奉らむとなり。

第二則　先師、明三世を洞し、智十方を空ず。是を以て其の所見、時流と相容れず。轗軻不遇中、恆に大義名分を明かにするを以て任とし、經天緯地の業を建つるを以て務とせらる。是れ此の任務、時に感じて筆に發するときは、時文となり、人に對して口に發するときは、言論となり、理致神に入るときは、漢文となり、風流情に鍾るときは、詩歌連俳となり。縱横自在、發するとして光焰を放たざるは無し。今其の時に感じて筆に發する者を、名づけて時文體とし、人に對して口に發する者を、名づけて言文體とし、理致神に入る者を、名づけて漢文體とし、風流情に鍾る者を、名づけて韻文體とし、此の四體を以て、全書を類纂す、其の錯雜混淆を避けむとなり。

第三則　全書類纂の順序は、時文體を第一とし、言文體を第二とし、漢文體を第三とし、韻文體を第四とす。而して各文體中の編次は、一に述作の年月に順ふ。而して其の述作年月の如きは、年表を卷尾に收めて之を明示す。

第四則　先師、天資磊落、人の爲に講演せられし者、乞ひに應じて起稿せられし者、都て稿本を筐裡に留められず。而して其の舊きものは、三十餘年の昔に屬す。是を以て原稿の收拾、寔に艱めり。中に就て智德發達論の如きは、明治八九年の著にて、即ち二十九歳三十歳間の作なりとぞ。今之を迎へて開卷第一とす。

第五則　次なる老婆心說十一篇は、居士林の請ひに應じて、講述せられし者。切々の情懇々の辯、以て其の名詮自稱を看るべし。

第六則　次なる明道協會要領解說、及び和敬議は、時弊を拯はむとて組織せられたる明道協會に於て、提唱せられしを、會員等が筆記せし者。又國勢考は、當時此の擧が、要路の物議を惹きし故、自己の胸襟を、當路者某氏に披瀝せられし者。今此の三篇を併せて、護國叢談と名づけしは、彼此相待ちて、先師が護法護國の精神を發揮すればなり。

第七則　次なる佛道本論は、前四卷を著はして、評を行誡上人に乞はれしに、經禪の間、端無く一場の葛藤を生ず。是に於て後二卷を著はして、以て太平を謳歌せらる。是に因て前の四卷に、其の禪風の法界を蕩掃して、一物を存せざるを視。後の二卷に、其の學力の智海を測了して、微細を遺さゞるを視るべし。

第八則　次なる教育原論以下六篇は、清丸が創立したる大道社、及び其の他の囑に應じて、講演せられし者。今之を一括して、廣長舌と名づけしは、老婆心說の前例に傚へるなり。

第九則　次なる國家本論以下四篇は、先師が躬づから團結せられし保守黨中正派本部に於て、天下に叱咤唱導せられし者。畢世の精神、凛乎として此の中に磅礴す。輯めて忠魂義魄と題する所以なり。

第十則　次なる書目中に就て、以心傳一卷は、全く師資授受の訓戒にして、著述に非ず。故に先師は、之を以て圖外不出と定められき。されど此の全書は、先師の精神を、子孫門生に傳へむ爲めの合刻なれば、今謹て之を收む。讀者草々に看過すること勿れ。

第十一則　尺牘は、清丸に與へられし者の中に於て、最も精神の溢るゝ者三通を撰出し、序跋は僅かに邦文二篇を收む。其の漢文の如きは、別に得庵詩文に存す。

第十二則　地價修正法案反對演說は、二十六年度帝國議會に、貴族院に於て演說せられし

者。又得庵一夕話は、日本新聞記者の乞に因りて、教育の大要を打話せられし者。但し前なる者は既に校閲を經、後なる者は、未だ校閲を經ざる者とぞ。

第十三則　花園日誌は、先師が熱海別邸に於ける、養痾中の日記なり。今之を抄略せしは、他の著作と、平衡を取らしめむとてなり。

第十四則　先師國風を好まる、佳什極めて多し。只其の詠草を留められざりし爲め、今之を尋ぬるに由なし。其の中連歌は、家扶寺島大造氏の嚢中の物を收め、短歌は、令嬢日野西廣子刀自に寄せられし消息中に存する者及びものれ清丸に賜ひし尺牘の端に錄せらるゝ者、僅かに十八首を集め、之を遺芳と題して、卷末に收む。最後に掲げし俳句は、病中の口占にて、終に末期の一句となれる者。之を以て本書の獲麟とす。

第十五則　本書編纂中、令姪三輪清吉君の援助を受くること多々、茲に厚情を鳴謝す。唯清丸の不肖、加ふるに病餘の孤身を以て承當し、半歳にして業を卒ふ、誤謬定めて多からむ、恐懼少からず。

明治四十四年三月十四日

編者　川合清丸識

得庵全書

先考得庵先生遺著

男鳥尾光合版

時文體

智德發達論

老婆子曰く、智なる者は、一心明達の眞相にして。德なる者は、人々所有の福利なり。儒家には、之を指して明德と云ひ。或は德性と云ふ。佛家には、之を名づけて智慧と云ひ。又妙明と云ふ。歐學者、又智識有德等の名稱を作す。其の言說名字に於ては、互に異同ありと雖も。之を要するに、其の物體たる、一心元明の達識に外ならず。故に苟も各家名言の異同に就て、之が是非優劣を爭ふ如きは、彼此の陋見。俱に遼東の豕を、誇耀するに過ぎざるのみ。

然れば則ち。妙明も獨り佛家の所有に非ず。德性明德も、敢て儒家の專らにす

る所に非ず。智識有德、豈に唯歐學者流の私有物ならむや。苟も横目縱行の一類に在ては、是れ即ち各自固有する所の心寶なる者にして。之を聖凡不二の光明と名づくるも、更に不可なきなり。

是故に、概して之を論ずる時は、彼此學流の異同に由て、互に其の論理を支牾すべしと雖も。畢竟人々の心性を離れざる、心相の名義なる時は。其の是と不是との如きは、單に論趣の如何に歸著し。而して彼の智德の眞相に於ては、無始從來、聖と凡とを問はず。佛儒と歐人とを論ぜず。毫も變異有ること無かるべし。

今老婆子の說明する所は、名に由て實を求むるの學派に非ず。其の智德は、人々固有の心相なりとして、之を心性學の論理に歸し。將た此の智德を發達すべき因緣を、簡單に論究し。聊か以て國家の文明を助け。人々固有の心寶をして、世間に發輝せしめんと欲す。古語に言はずや、如切如磋如琢如磨と。獨り今日に在て、智德を琢磨するの道なしと云ふべけむや。凡そ國家の文明を促がし、其の人民の智德を、發達せしめむと欲せば。將た如何なる物體を以て、之が筌蹄となすや。世の說をなす者皆曰く、法制の至善、即ち其の物なりと。余思ふに、法度制

令なる者は、本と人民の智德に發源し來れる者にして。其の國家文明の程度に應じ、以て一國社會の幸福を全うするの具なるが故に。是れ則ち、文明途上の衛兵にして、彼の智德發達の障碍を、防禦する者と謂はゞ、則ち可なり。未だ之を以て、文明の先導にして、智德を發達するの筌蹄とは、斷言すべからず。曰く、然らば則ち、敎育の方法を以て、之が筌蹄と名づけむか。余又以爲らく、敎育其の宜しきを得ざれば、必ず文明を退歩せしめ。彼の智德の種子を將て、五里霧中に播植し。永く其の光輝を消殺するが故に。之を筌蹄と云ふは、固より不可なきに似たりと雖も。單に此の物を以て、智德を、發達する的實の具と爲すに足らず。請ふ試みに之を明さむ。爰に一師有り、其の弟子をして、智德を發達せしめむと欲せば。如何なる物體を以て、之を誘導せむか。意ふに必ず自己の意見に吻合したる、古今人民の智德より發顯せる言論を掲げて。其の精神の灌注する所と、智德沛充の端倪とを、指示するに過ぎざるべし。蓋し其の師の精神智德なる者も、必ず其の筌蹄を、古今人民の言論より得たる者なればなり。然らば則ち、彼の敎育家なる者は、廣く筌蹄を傳ふるの門戸にして。我が智德の滋養は、却て之を古今人民

の智德より發顯せし言論に得ること、恰も金剛石を以て、金剛石を磨し。之が光耀を發生せしむるが如し。余故に曰く、文學なる者は古今人民の智德に顯はれ。以て後進後生の智德を、練磨發達するの筌蹄なりと。

今夫れ人の食味は、一日も缺くべからざる者たりと雖も。其の食味の用たる、必ずしも飢を禦ぐが爲めに求むるにも非ざるべし。蓋し食味の至要は、性命を保ち、身體を養ひ、其の健康を永續し、恒久安穩ならしむるに在るのみ。故に智德有るの國手名醫は、必ず自他の爲めに、其の食品を分析實驗し、之が養分を察し、之が毒分を論じ、敢て其の味の甘酸と、其の鹽梅の美惡とを以て先とせず。必ず其の藥毒の功驗と、滋養の如何とを、究むるを要とす。今若し文學を以て、社會人々の智德を、發達滋養するの筌蹄と爲す時は、實に是れ人類の食品に於けると一般にして。其の智德の命脈は、即ち今古人民の言論如何に在りと謂はざるべからず。然れば則ち、國家の文明、人民の智德をして、未來に隆盛ならしめむと欲するの君子は。必ず一世の文學好尚に著目し、其の言論の位置を審かにし、人情の淵源に溯り、文運の轉變如何を觀察し、養毒二分の多寡を調劑し。以て後進後生をして、誤て口腹の爲めに、其の身體を害せしむるが如く。徒らに高尚絶妙の理論を以て、一世を煽惑し。現未の人民をして、其の智德を損害せしむること有る勿れ。實に文學を視ること、恰も名醫の食品を實驗論究すると一般の觀をなすは、文明論家の大法とも云ふべし。

是故に、苟も文明人民の智德上に就て、之が論理を竭し。國步未來の隆替に、觀相を下し、之が因果を詳にせむと欲する時は。必ず其の當時に行はるゝ輿論の好尚に着眼し、其の學派の源流餘脈を尋繹し、其の智德を滋養すべき質分を認めて、後ち、始めて其の因果の如何を明言すべし。是れ之を思議國勢の法則となす。請ふ更に後章に於て、逐一之が規矩準繩の大綱を掲げ。以て人々智德發達の筌蹄に供し、併せて國家將來の文運に籌算を下さしめむと欲す。

夫れ學は智識に發し、智識は思議に生ず。而して其の思議なる者は、比例知に根柢する者なり。蓋し人心は靈妙にして、五官の覺識を具し、情欲の歸向する所なるが故に。みづから主として、取捨嫌愛を起し。其の利するに取りて、害するに捨て。其の樂むに愛して、苦しむに嫌ふ。畢竟人心の思議を生ずるは、自己の生

活福利を營み、安全を保たむと欲するの一點に、起源する者なれば。一世の好尚に背馳するの言論は、假令ひ智德養成の學と雖も。其の民心に乖戻すること。恰も堅氷を以て、夏蟲に向ふが如し。是故に、學びて一世の尊榮を來たすこと能はず。言うて、一人の喜ぶ者無き學流は。假令ひ世の文明を促がし、自他の智德を發揮すべき滋養分を蓄藏すと雖も。徒らに埋沒に屬して、遂に人間に流通せざるなり。如何となれば、偶々人有りて己れが一身の智德に於ては、其の筌蹄を、彼の學に資りたるも。終に相續の道なきのみならず、一世の人を擧げて、想望愛悅するの念に於ては、全く頭腦裏を掃盡せしむるに歸すればなり。

一世人民の好愛する所は、便ち是れ其の一世智德の階級に應ずる者なるが故に。安りに其れを以て、千百世人心智德の極則となし、自他を福利し、現未に亘りて、是れぞ人間境界の至文なり至道なりと、斷定する如きは。纔かに一端を知りて、未だ邊際を究めざるの測量と云ふべし。何となれば、一世を擧げて、好尚する所の智德と雖も。其の學質たるや、純然たる養分のみに非ず。必ず幾許の毒分を含蓄して、未來之が爲めに、却て文化を退歩せしむること有るを以てなり。今日に

在て、既に至文なりとする者も。未だ全く智德發達の至道に非ずして、誤て岐路に入り、漸く進みて險隘に陷り、又去て無邊の曠野に亂歩し、茫乎として道を失する因緣となるも、未だ知るべからず。是故に、世の文明を論じ、人民の智德如何を察し未來の變動を觀察せむと欲する時は。必ず先づ當時輿論の好尚する所に瞳子を著け、以て之が因果を求むべし。其の物體は、即ち學風言論是れなり。是れ即ち其の國人民の智德より發揮せし返照にして、未來の衆同分に關係し。其の智德を誘導するの筌蹄なるを以てなり。

物必す一利一害あり。而して時と處とに由て、其の効顯を異にするが故に、事も亦必ず一利一害無きこと能はず。寶玉を把て煖を求むるは、其の物を失するなり。鎮耶を以て鐵を斬るは、その用を失するなり。虎を養うて鼠を捕ふるは其の力を失するなり。宋襄の仁を施すは、その事を失するなり。蓋し學は、能く其の物の是非を論じ。智德は、能くその事の利害を判つ。夏蟲其の躬の火に投ずるを慮らず。却て蟻蜂の、豫め冬に禦つるを嗤ふが如きは。是れ大痴にして、事物の性情に通ぜず、時處の變轉を知らざるに依るなり。蓋し學は、能くその未來

を例知し。智德は、能くその禍福を前知す。以て國歩をして、謬て危險に陷らしむる所以なり。然り而して、我が亞細亞東方の諸國に於ては、此の數事を、知識するの言論無きに非ずと雖も。古へより、之を難きに得て、之を易きに失ひ。之を創業に致して、之を守成に失ふは。同一軌轍にして。其の以て然る所を審かにせず。其の文學言論に於けるも亦然り。今の文明は、古への文明の盛美に及ばず。今人の智德は、古人の智德の深遠に及ばず。之を印度支那の今古に證して、歴々見るべし。是れ果して如何なる因果に出づるや。曰く、人情難きに勤めて、易きに怠るが故なり。疎に明かにして、精に昏きが故なり。然れば則ち、亞細亞東方の人心は、困難醜辱に耐るに長じて、樂易榮耀を維持するに短なるか。其の學は則ち、陳魯迂濶に停止して。精細的實に入るの志致なきか。之を千古の史書に徵し、其の文章の宗派源流を考覈する時は、信に然りと云はざるを得ざるなり。然りと雖も、是れ亞細亞東方の人民に於て、一定不易の性情にして、得て救醫すべからざる者なりと、的切に我が同胞の頂門に斷案を下して、實決すべからざる一點あり。故に後段に於て、人々智德成立の所以を論じ。併せて其の學派に

毒分有るの實證を明言せむ。

凡そ人智の發生は、五官の感覺に應じ、情欲の嫌愛に生ずる者にして。人間萬般の動作、悉く之に根せざるは無し。故に今彼の比例知より基礎を起し、以て智德發生の端緒を論ぜむ。蓋し比例知なる者は、見聞覺知に實證して、審斷詳知するの能力を云ふなり。譬へば、我が身未だ死せずと雖も、豫め其の死を了知する所以の者は。他無し、遠く古來を察するに、數百歳の人有る無く、近く現今を目擊するに、凡そ我が身の同類たる者、老幼賢否となく、漸々死亡に就くを以て。之に比例して、我も亦永存すべきに非ざるを知り。又昨年あり今年あり、昨日あり今日あるを、躬踐實證するが故に。之に例して、復た明日明年あるべきを詳斷す。乃至春夏秋冬の轉旋も、過去に於て、皆然るが故に。未來も、然るべきを例知するなり。實に天地萬有に對し、疎となく精となく、實證知を去て、比例知無く。比例知を去て、我が知識なる者有ることなし。故に比例知なる者は、吾人思議の材料にして。其の思議なる者は、全く智德運轉の發靭なり。迷疑決斷の公案なり。曰く、然らば則ち、或は一書の說に依りて、以て千古の舊事を知り。或は一人の話頭

に就て、以て萬里の海外を知る。此の知や、本と徒聞徒見のみにして。若し他の聞知見知を以て、參合比例する無き時は、概して妄なりと斥ぞけむか。曰く然り、是れ僅かに。徒聞徒見のみ、未だ以て比例知に及ばず。何となれば、其見聞に就て、未だ信妄虛實を、審斷するの能力を有せざるが故に。必ず他の見聞を以て、之に參同し。而して後ち、始めて信妄を斷するの働きを生ずるなり。故に十書千古の事を載せて、比例に異同無し。能く世人をして、其の學を保任せしむる所以なり。十人千里の外に游びて、語る所一樣に出づ。能く吾人をして其の境を確信せしむる所以なり。然り而して、其の之を信任するや、必ず時と處との景況を、想像する者は。是れ果して何等の比例知に出てゝ、此の想念を發するや。曰く、是れ我が曾て親しく躬踐實證する者を以て、比知して、之を想念するのみ。譬へば古代を想像して、寫せる書の如し。其の形たる、甚だ奇怪なりと雖も。之を分劃究尋する時は、其の身體の具は盡く我人の知覺する所なり。人の想像概ね皆斯くの如し。故に聞て而して想像する所は、未だ必ずしも目見る所と同じからず。畢竟實驗知と、比例知とを知る時は。我人の智識に於て、別に思議を生ずる

の種子を見ざるなり。孔子曰く、未だ生を知らず、安くんぞ死を知らむと。豈に其の比例知無きを以ての故に非ずや。

人生れて、見聞知識の未だ具はらざる時に於て、其の言說の厖雜なるは、則ち思議の全からざるに因るなり。其の思議の全からざるは、則ち比例知の發生有りとの全からざるに因るなり。喩へば、一を聞て、十を知るの例知ありと雖も、百雖も、其材料猶乏しきが故なり。

千萬を例知するに足らず。一隅を舉げて、三隅を反するの思議あるも、未だ世間萬物一々の異同に、思及する能はざるが如し。又古人の言論智德に覆はれて、之が爲めに、後世の思議心を破ること有り。是れ知らざるべからざるなり。彼の天は圓にして、地は方なり。又天高く地平かなり柄と。一言以て天地の大を盡くせるが故に。後世天地の事に比例を失ひ、其の思議を絕すること、日久し。此の如きは、人民の智德を限界して、通達せしめざる所以なり。近世天地の學大に開け、童子と雖も、皆地の楕圓なるを知るが故に。之に從て、更に又比例知を生じ、思議を起して。其の疑ひを去り、其の眞を解得せむと欲す。何となれば、楕圓なる物は、必ず其の表面の限り有り。且つ其の外面を包裹する物有るべく、又中天

に一橢圓の地球を維持運轉せしむるは、何の作力に因るべき等の疑團を生ずるが如きなり。

人既に成長するに及びては。躬みづから見聞覺知の偏小にして、比例知の基礎なく、思議の未だ至らざる所あるを知ると雖も。自然の欲情と、己れを主として、他に抵抗するの我見とに因るが故に。動もすれば狐疑を生じ、自己の臆度を以て、却て他の智德を妨障すること有り。是を以て世の智德なき小人を視るに、己れの不智を反省せずして、却て他人の大德を毀損し。苟も己れに合せざる者を疾惡し、他人の言行を誹議す。即ち君子は義に喩り、小人は利に喩ると云へる語の如く。全く各自の意度を主として、以て他を思議するの罪過なり。是故に人の智德は、年少の日、其の未だ思議を生ぜざる前、逆め勤めて、見聞覺知の境域を廣め、今古人民の言論を玩味熟考し。以て他日比例知覺の材料を蓄積し、其の臨時の活用に供せざるべからざるなり。

前に云へる所は、斯くの如く人民の智德を發達するの階梯なるが故に。學びて其の德を失し、思ふて其の事を誤るは。全く見聞覺知の偏小なると、比例知の少なきとに隨ひて、思議の至らざるなり。故に苟も自己の智德を發輝せむと欲する者は。學に向ひて、不退轉の德を保ち、假令ひ其の思議する所實に詳明に至るを覺ゆるも。猶之に安ぜずして、中止すべからず。如何となれば、天地の大なる、萬物の多き。豈に能く一時意度の測り盡くすべき所ならむや。往を顧み來を知り、みづから反省して、他を察せよ。蓋し時に緩急あり、處に難易あり。物に大小精粗あり、事に是非利害得失あり。因あり果あり。而して因に又順逆の果あり。以て感應報復する所以等は、是れ悉く我が思議の著點にして、智德の以て能く明晰なる所なり。是に由て之を觀れば、我が亞細亞東方の人心と雖も。學びて味み、思ふて亂るゝの種子に非ず。然り而して、其の今日より以前、千餘年間、久しく一處に坐して、進歩せざる實跡の如きは。蓋し別に因緣ありて爾る者なり。請ふ後段に於て、之を論辯せん。

凡そ物に顯密あり、而して理に虛實を存す。故に文學上にも、亦おのづから虛無實有の二流を分てり。蓋し虛無の學は、其の實際比例物理に相應せざるが故に。學業成就して、終に世緣と背き、人事と離るゝに至る。亞細亞東方古來の智德は、

多く此の間隙に流注せるが故に。文明の精神、智德の命脈をして、枯處空理に歸著せしむるが如し。是れ即ち學積みて文退き、智極りて愚に歸る所以なり。

德に大小の兩種あり。其小德は、一世に浹洽するの勢力、甚だ速かなるが如しと雖も。其の實は、時好に投じ、人情に適應せしむるの點よりして、之を施行するが故に。徒らに其の德澤の、後世に流れざるのみか。却て後世を害して、其の文明を退歩し、智德を衰弱せしむる者あり。大德は則ち之と反せり。當時に在ては、却て顯はれず、其の一世の同分に背く者あるを以て、人心動もすれば之を厭惡すと雖も。稍〻時勢の運轉するに及びて、益々其の功驗を顯はし、漸く流れて漸き ず。終に天下に蔓延し、永く人世の爲めに、福利を闡開する者なり。人の功に於けるも亦然り。必ず大小の差別ありて、當時に於て、過贊推寵せらるゝ者にして、末世の毀斥を逃免する實に尠し。蓋し亞細亞東方は、必ず小德に流れ。其の功も、亦小功に止まるが故に。其の慈仁は。貧民に止りて、全國に及ばず。其の功は、僅かに君家一代に止りて、未來後世の澤を受くる所に非ざるなり。

余曾て東洋歷代の史乘を讀み、其の古今士君子流の言論する所に就て、之が意衷

を觀察し、甚だ以て不可思議の思念を生ぜり。如何となれば、其の當時の文學ある君子は、畢生の智德言論を盡くして、其の君家歷代の盛德を稱讃し、其の瘢疵を回復するに汲々として、模糊牽合、以て一代の美事を、誇揚せむと欲する者の如し。故に史家の筆鋒は、一代の美事を、頌述するの紙上に於て、既に其の滅亡の機を動かし。言論者の稱讃して、至治隆運を呼ぶの舌頭に、早く顚覆の徵候を來たせるなり。實に一世の智識を擧げて、無實の修飾を事とすること。恰も文彩を羅織せるの間、既に綿帛の腐壞するに至るを知らざるが如く。又水流に筆を下して、著色の精畫を作るに異ならざるなり。何が故に、一刻千金の好日影を棄て、一生の智德を磬盡して、彼の當時に益無く、後代に累を貽すの言論に從事せるや。彼等は、皆是れ一時の名家にして、斯かる要點を失却するの愚人に非ず。その前代の事跡を追ふて、その利害得失を論明し、古人に責備せしを觀るに。概ね理非明了にして、則を取るに足る者あり。而して己れが實踐する當代の事に至りては、却て疵類を回護するの言論をなすは何故ぞや。請ふ其の勢の由て來る所を論破せむ。蓋し亞細亞東方の人心は、德を貴び、賢に服し、威を懼れて、力を假るの性

情に過ぎたり。故にその慣習、人心を壓抑して、古人智德の權內に屈服し。恭順寅畏して、背て範圍を出づる能はず。舊規を墨守して、程度を破るの氣力乏しきが故に。其の風俗に因て、一時野蠻の域を脫するは、速かなりと雖も。到底自立不羈の精神、地を掃ふて有ること無し。然る故に、偶々非常傑出の善政を施すも。主權者亡びて、相續を絕つ時は。先の美政良憲も、立ちどころに變じ。文物風氣も、頓に衰頹の色を見はし。殆ど夷狄の舊に復る。蓋し其の威を懼れて、力を假るの性情なるや。上に屈して、下を凌ぎ。自己の智德を愛養せず。一向法度を、他に假るに熱心して。一切の智德を盡くして、之に注ぎ。一切の功名を擧げて、之に投入す。故に亞細亞東方の智德は、徒らに功名を朝廷に光耀するの用に充て。未だ曾て世の文明を促がし、人民の智德を誘導するの具に供せざる者と謂ふべし。

我が日本古來の智德者を尋ぬるに。その秀邁特達なる者、甚だ寥々たり。中に就て、厩戸皇子、吉備眞美、中臣鎌子の如きは。實に身躬から率先して、文物を起し、憲法を制し、制度を改正し、その功と名と、兩ながら今日に存せる者なり。此等の

大人は。實に文化の階梯にして、智德の基礎たるが故に。假令其の名亡ぶと雖も、其の功必ず亡びざるなり。然り而して、我が國の民心、概ね小德小功を愛するの性情なるが故に。其の推尊して、稱道する所は。彼の大人に非ずして、却て其の他に在り。曰く菅道眞、曰く楠正成、曰く藤清正、是れ其の今日に於て、尊崇推服する所たり。此等の德者も、固より稀世の人物なりと雖も。要するに世の文明と、人民の智德とに關係せし者に非ず。纔かに性理上の道德に就て、其の功績を存する者のみ。若し夫れ、自他の腦髓中、唯に是等の尊崇すべきに熱心して。彼れの最も貴重すべきを知らざる時は。人民の智德は、畢竟小德線路に掛りて、旋轉すべしと雖も。終に大德線路に向ひて、進歩すべきの日無きは。道理の尤も見易き者なり。方今支那の人民、擧りて關羽を尊崇すること、彼の邦千古一人の大德者たる孔子を、仰崇敬慕するの上に出づるが如きは。即ち支那一般の智德を、度量するの一標衡とも云ふべきなり。

是に由りて之を觀れば、亞細亞東方の學風は、概して實體を離れて、虛體に就き。大德を棄てゝ、小德に流るゝが故に。學積みて昏迷し、智極りて愚に歸り。國家

の勢力、文明の歩武に於ては。益々衰退に赴くの弊を免れざるに至る。譬へば孔子の禮樂仁義の學は、漸く性理の一說に收局し。晦庵象山の智識を以て、生涯徒らに無極の二字を爭ひ。又は尊德性而道問學と云ふ中庸の字句を裂きて、相互に自己の主眼を皇張せしが如き。實に開明國の童蒙にも嗤笑せらるゝ所なり。天地の大なる、萬物の多き。誰か能く一言一句の中に於て、之が物理を解得すべけむや。明の王陽明は、良知良能の學を主張し。我が良知を致して、萬物を格すと言ふ。是れ亦數學度量を捨てゝ、目分量を以て、物の輕重大小を量らむと欲するが如し。豈此の道理あるべけむや。韓愈曰く、巫醫樂師百工之人、君子不齒と。此等の語氣を以て、亞細亞東方の智德は、概ね虛論に涉り、空理に流れ。終に世の文明を退歩せしめ、人民智德の種子を、無何有の鄉に下植せしことの、漸あるを證するに足れり。

兵法に曰く、不敗の地に立ちて、人の敗を失はずと。古來兵を談ずる者、概ね孫武を推稱して、止まずと雖も。果して不敗の地なる者は、何くに在るや。十三篇中、其の呶々する所、一として主論に非ざるは無しと雖も。反て之を物に求むるに、

茫乎として得る所無きは何ぞや。或は曰く、是れ兵を學ぶの、未だ精ならず。心を用ふるの、未だ至らざる故なりと。然りと雖も、若し他の書籍に就て、彼の不敗の地を尋ね知ることを得ば。則ち兵法の妙は、孫子に在らずして、却て他書に在り。用兵の智德は、孫子に得ずして、之を他書に得し者と云ふべし。然る時は、孫子未だ以て兵法の蘊奧と爲すに足らざるなり。何となれば、凡そ戰をなす者、誰か不敗の地あるを知りて、枉げて必敗の地に立ち、敵の敗機を見て、坐して之を擊たざる者有らむや。此等の道理は、必ずしも兵法を學ばず、孫子に聞かざるも、固より職を爲す者の目的なれば、自然と之に協合するは、更に論を待たざるなり。故に苟も、其の不敗の地と、必敗の形とを的指し。學者をして、之を領得せしむるに非ずば。書も亦何の實用か有らむ。即ち商法を學ぶに、物品を低價に買ひ、之を騰貴の時に賣れと論ずる如く。理は固より然るべしと雖も。亦唯席上の虛論にして、事物の活用に益無く。未だ我が智德を養成するの筌蹄にはあらざるなり。

支那の學風も、古へ文明の時代には、六藝と云ひて、禮樂射御書數の科は、智德なる

君子の、必ず缺ぐべからざる者なりしが。世遷り學變ずるに至りて、遂に虛論のみを主張し、漸々文明を退歩せしめたり。然れども今日に在りて、古への六藝を起し來り、其れを以て一世の人を陶冶せしめず、以て亞細亞東方の文明を、發達するに足ると云はゞ。萬々其の理有ること無し。唯古人の、學藝に心を用ひしは。末世の虛論のみに日月を費し、智德を昧ませし者の如くにあらざるを視れば。若し其の人を九原より喚び起し、再たび今日に在らしむる時は。又必ず一世の重むずる所。人民の缺べからざる學藝を主張し。彼の禮樂等の、當時に必用なりしが如く、著實至要なる敎導を闡き。以て後世文明の基礎を成し、人民の智德を、實體に誘進するの働き有るを、保證するに足るべきのみ。

此を以て證する時は、亞細亞東方の文學は、其の理の正ならざるに非ず。又其の業の精しからざるに非ずと雖も。斯く文明を退歩せしめ、人民の智德を昏迷せしめし所以の者は。畢竟其の學風の、漸く虛無に流れ、實體を離れたるに、發因せるなり。蓋し學なる者は、精微に入るに隨ひ、愈々虛無に流るゝ弊を生ずる者なり。況や亞細亞東方の人心は、鄙屑に甘むじ。小智小德を好むの風習なる故に。

虛無の窩窟に陷ると、尤も容易なりとす。是れ其の謂はゆる毒分あるの食味を知らず、久しく口腹の飽滿に安むじて。遂に智德の身體上に、偏廢不通の錮疾を被りし者なり。然れば則ち、一旦此の學を棄てゝ、他の毒分無き學を求め。以て我が智德の元氣を壯大にして、軀幹筋骨を康强にすべけむか。此際に於ては、實に紙上空論の揣摩すべきに非ず。躬踐實試、其の經驗を熟察し、之が調劑を爲さゞるべからず。凡そ何の學を問はず、時處の異同を以て、必ず其の効驗を同うせざる者なるが故に。苟も世の文明を論じ、人の智德を、善良の地に誘導せむと欲するの學士は。必ず其の心目を公正にし、偏見我執に坐すること無く。疎陋迂濶に失すること無く。精細詳密、以て文學流動の如何に著目し。世と學と相伴ひて。彼の至文至明の極地に躋登するを期すべきなり。是れ之を好學の實と云ふ。

智德發達論 終

老婆心說

人權論

老婆子曰く、人權なる者は其の初め之を天に稟け、而して之を身に保つ。人以て奪ふことを得ず、我れ以て棄つることを得ず。故に人の初生に當りて、天一たび之を授け、人一たび之を受く。是に於てか、君主の威と雖も、之を損することを能はず。父母の慈と雖も、之を益すこと能はず。而して我れ亦其然る所以の者を、知ること能はざるなり。夫れ我れ其然る所以の者を、知ること能はずして。而して之を稟け之を保つ。是れ即ち父と君と雖も、焉ぞ能く之を與奪することを得んや。是に由て之を觀れば、人權なる者は。即ち我れ獨り之を天に稟け、而して天獨り之を我れに授くる所以の命なり。故に我れ明かに此命を知り、而して篤く此道を信ず。曰く、何を以てか之を知り、何を以てか之を信ず。曰く、天理に就て之を知り、物理に就て之を信ず。夫れ人の始めて生ずるや、天必ず之に發育の理を賦し、生活の道を授く。故に今我れ其理を知りて之に順ひ、其道を信じて之を行ふ。是れ我れ即ち天命に答ふるなり。若し果して其初め、全く此道理あること無しと云はゞ。天其れ我れを欺くに非ざれば、將た我れ天を誣ゆるなり。蓋し吾人、肉體中に主たるを以て、苟も天を誣ゆべからず、天豈吾人を欺かむや。吾人既に天命の在る所を信ず、故に今其人に存する所以の者を云はん。蓋し、天の命、細かに之を論ずれば則ち二あり。一は即ち天の直ちに之を我れに與ふる者、生死是れなり。一は即ち天直ちに之を我れに與へずして、而して理と物とに就て存する者、生活是れなり。夫れ生死は、吾人の終始、唯天命に是れ委す、更に又何をか論ぜん。獨り生活の道に至りては、則ち吾人此世に生存する所以の者なり。故に君主も此道に由り、父母も此事に從ふ。長となく少となく、賢不肖となく、之を去て〻他に求むべき生存の道あること無し。是故に、人權なる者は、專ら生活の上に就きて之を論ずべし。

人權既に棄つべからず、其之を棄つるは則ち非命なり。人權既に奪ふべからず、其之を奪ふも亦非命なり。非命を爲す者は、必ず非命に死す。或人問ふて曰く、其之を棄て之を奪ふと云ふ者、抑々如何なる狀ぞ。曰く、吾と、人と、其權固より並

び立てり、甲乙の別あること無し。若し人、我が權の一部を奪ふときは、吾れ則ち我が權の一部を損す。曰く、然らば則ち吾れ我が權の一部を棄つるときは、必す人の權の一部を益さんか。曰く、何爲れぞ其れ然らんや。夫れ吾れ我が權の一部を棄つると云ふは、即ち是れ吾れ我が權を守らざるに過ぎざるのみ。蓋し之を棄つる者は、譬へば猶貨物を途に遺てゝ、而して人得て之を拾はざるが如し。其之を奪ふ者は、猶人の貨物を欲して、而して之を掠取するが如し。古に云く、天道は常に善人に與みすと。思ふに是れ天道善人に與するに非ず、即ち善人は、我が權を守りて、人の權を侵さゞるなり。故に能く命を保つことを得。惡人は、我が權を守ること能はざるのみならず、却て人の權を奪ふ。故に命を保つこと能はざるなり。

甲と乙と、一日事に從ひ。百金を得て、之を平等に分ち、各々五十金を得。甲若し六十を取るときは、則ち乙の一十を奪はざるを得ず。然りと雖も、若し甲は十日事に從ひ、乙は五日事に從ひ、而して甲の得る所千金、乙の得る所五百金なるときは、又是れ平等と云ふべし。何となれば、甲は則ち十日の權を有し、而して乙は則ち其五日の權を棄つるを以てなり。

生活なる者は、吾人皆其欲に滿つるを以て、其限りとす。飲食は、饑渴を救ふに足り。衣服は、寒暑を禦ぐに足り。宮室は、風雨霜雪を覆ふに足る。其餘に至りては、皆吾人の榮耀、即ち生活の光輝なり。故に天命なる者は、吾人の榮耀を裁限せず、而して其之を爲すに任す。蓋し天の人權を與ふるや、之を守る者は、富且つ貴。之を棄つる者は、貧且つ賤ならしむ。是即ち吾人の天分、而して人權の平等なる所以なり。

天既に吾人の欲を裁限せず、今之を反覆極論すれば、欲盈ちて而して權定まるなり。君主は天命に順ひ、萬民を扞護し、以て其權を奪ふ者無からしむ。是れ即ち謂はゆる君權にして、君主生活の權に非ざるなり。

吾れ之を見、吾れ之を聞き、吾れ之を嗅ぎ、吾れ之を言ひ、吾れ之を思ひ、吾れ之を行ふ、何を事としてか可ならざらん。若し夫れ我が言行、以て人の權を奪ひ、人の害を致すときは、則ち謂はゆる非命なり。

耳目は聞見し、手足は携行す、誰か之を使はしめ、而して誰の爲にか之を爲すや。

思ふに天之を吾人に附與し、即ち吾が情欲に順ひて、其意志を果さしめ、以て彼の人權を全うせしむるのみ。蓋し情は辛苦の途を避け、欲は喜樂の境を望む。是故に其意志たる他無し、蓋し我が生活を計るのみ。

是故に天の我れに附與せし所以の者、豈偶然ならんや。何となれば、若し人として聾たり盲たり、併せて以て手足痿痺せば。必ず凍餓交々迫り、以て我が生活の道を絶せん。吾れ故に曰く、假令天偶然に之を授與するも、吾れは則ち之を偶然に看過すべからずと。

既に偶然の觀に措くこと能はざる者あり、而るに之を用ふる、其道に適せざるときは、則ち之な名けて自棄と云ふなり。縱使少しく其道に適すること有るも、之を勤むる、其意を盡さざるときは、又之を名けて自暴と云ふなり。蓋し自棄は、我が生活の道に非ず、故に途に凍餓す。自暴は、我が生活の業に非ず、故に禽獸と伍を爲す。是れ其本性に離れて、天命に應ぜず。其私情に牽かれて、天分を盡さざるの罪なり。古に曰く、罪を天に獲れば禱る所無しと。

天の吾れに授くる所以の者は、夫れ形體か。豈翅我が四肢五體のみならんや、凡そ我が見聞思想の及ぶ所。天に在ては日月星辰、地に在りては山川草木、禽獸魚鼈、之を思ふも窮する所なく、之を取るも盡くること無く、之を用ふるも傷ること無きもの是れなり。

天の吾れに允す所以の者は、夫れ富貴か。富は我が勉力の致す所。其陶朱に過ぐるも、天敢て之を妨げず。貴は我が德行の致す所。其王侯を傾くるも、天敢て之を貶けず。

禽獸の生活に富めるを視るに、天獨り彼れに私せしものゝ如し。其衣は則ち翎毛、以て寒暑を防ぐに足り。其食は則ち穀實、以て饜飽を致すに足る。往くとして其身に適せざるはなし。天實に彼れに與ふるに厚うして、吾れに與ふるに薄し。何となれば、吾人土處すれば則ち病む、故に爲に宮室を營まざるを得ず。寒至れば之が裘を作り、暑至れば之が葛を作る。而して未だ必ずしも凍餓の歎無きを保つこと能はず。終身營々として、寸陰の閒を得ず。霜を履みて出て、星を戴いて歸り。鞠躬勉力して、生を計ると雖も。而も猶足らざるあり。嗟乎天何が故にか、吾れに此不幸を貽す。靜かに爰に之を思ふに、其之を附與せざるは、却

て大に之を附與する所以なり。其大に之を附與する所以の者とは何ぞ。曰く、人權是れなり。

是故に徒爾として寸陰を消却し、偶然として四肢を使役せざるは、吾人の罪業、是れより大なるは無し。何となれば、天固より其形體を以て、我れに附與すと雖も、之を以て全く我が有に屬せしめず。謂はゆる出息の際、已に生を去り。入息の間、已に死に及ぶ。苦も是時なり、樂も是時なり、勤勉怠惰、時と俱に去りて。必ずしも我が幸福の日あるを期せるざなり。請ふ看よ、彼の悠々たる浮雲の無心なるも、忽ち去て岫を出て。滔々たる流水の無情なるも、遂に往て復た回らず。故に曰く、天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客なりと。蓋し我が生活の路程なるを謂ふなり。天の吾れに授與する者、已に偶然ならずと雖も。其之を守り、之を行ふは、翼に吾人一身の幸福を是れ圖るのみに止まらざるなり。何となれば、天已に吾人に生活の權を賦して、其道を助けしめ。又旁ら其委托する所ありて、而して却て吾人の生活を全うせしむ。是を天托と云ふ。是故に、吾人天の委托を受けて。天行を補ひ、物化を贊し、彼の天道をして、窮する所無からしむべきなり。

何をか天行と云ひ、何をか物化と云ふ。德微にして功大なるは、天行なり。生滅榮枯を常住し能はざる者は、物化なり。故に人の親と爲りて、其子を育せざれば、天行窮して終に人類なからん。人の子と爲りて、其親を養はざれば、老者途に昏迷して、終に歸する所無し。將た何の贊けを得て、以て永く物化することを得んや。故に吾人は人權を守り、以て彼の天托を盡くすべし。

鰥寡孤獨癈疾の世に在るや、豈獨り吾人の不幸のみならんや。抑々天行の不幸、是より大なるは無し。願ふに此輩、安ぞみづから任じて、彼の天行を補ひ。物化を贊くることを得んや。蓋し天道も亦、是に至て窮する所有るが如し、悲夫。併せて之を吾人に委托せん。謂はゆる一視同仁天の道なり。吾は其道天の刑を懼るゝ者なり。

言說論

老婆子曰く、凡そ人の行事は、申すまでも無く。都て世間に有りとあらゆる、一切の事々物々は。必ず因緣果報の道理を、遁るゝもの有ること無し。謂はゆる因

とは、此の物を指し。緣とは彼の物を指す。而して彼れと此れとの、業と感とに依て、顯はるゝ者を果と云ふ。果は、因緣の所生なり。報は因緣の報いなり。是故に、因あれば必ず緣有り、因緣あれば必ず果報有り。而して善因緣には、善果報を引き。惡因緣には、惡果報を受くるものも。亦是れ當然の理、道るべからざるの義なり。是故に、世間一切の人の、言說上に於ても、亦必ず因緣果報の道理あるものなれば。誰人も、みづから愼みて、論文記述は勿論、平生の對話に於ても、忽にすべからざるなり。

何をか言說の因緣と云ふや、己れの心を因となし、世間一切の事物を緣と爲す。而して此の心、彼の事物に感動して生ずる者を、果と云ふ。而して其の果を身に顯はす時は、身業と云ひ。言舌に顯はす時は、口業と云ひ。只其の心に念ずるのみを、意業と云ふ。其の所作相同じからざるに似たりと雖も、均しく心と外物との因緣より生ずる者なり。今唯其の口業のみに就て論ずべし。譬へば眼に色を見て、其の色相を感じ。其感覺する所に應じて、之が言說を作し。或は白と云ひ、或は赤と云ふ。乃至其の所見に感じ、種々分別して、交ごも互に其の意を通ず。

其の苦樂悲觀に於ても、亦復た此の如し。心と境外の諸物との因緣に依りて、或は苦しむこと有り。或は樂しむことあり。其の情內に餘りて、其の言外に發し、以て他人を感動し。以て自身の毀譽禍福を來たす。是れ之を、言說に就ての因緣果報と云ふ。

是故に、苟も他人に對して、一旦言說する以上は。其言說の、正邪善惡是非に相應して、必ず其の報復を來たすべし。其の報復の大なる者は、徒に一人一己の言說と雖も、能く衆人の心を感動せしめ。以て天下國家の大利を興し、又は大害を生ず。其報復の小なる者は、己が榮を譽損じ禍害を來たす者あり。又は富貴功名をなす者あり。皆是れ言說の果報と云ふべし。而して世人は、概ね言說に於て、此の如き深重なる關係あるを悟らざるが故に。謂はゆる口舌任意にして、他の是非得失をも省みず。又みづから國家の大事、自身の不幸を來たすをも知らず。甚だ歎ずべき事なり。是故に、苟も人に對して言說する者は、篤と此の道理を辨へ。常談平話に於ても、深く愼まずばあるべからず。

今老婆子は、他人に向ひて、此の如き義理を、言說するが故に。獨りみづから愼む

のみならず、又必ず衆人をして、此の道理を了解せしめ。謂はゆる言說の惡業を斷絕して、無上の幸福なる果報を、得せしめむと欲す。故に此の說を聞く者は、徒に他人の事と思惟せず。自己の心に反省して、深く愼まずばあるべからず。何をか言說の惡業と云ふ、曰く、殺、偸、邪婬、妄語の四者、即ち是れなり。

大凡そ殺偸婬妄は、人の惡事を來たす根元なり。謂はゆる殺とは、慈悲の心に疎く、人情刻薄にして、惡念多く、諸の生類を慘害するを云ふ。甚だしきは人を殺し、人を傷つくるに至る者なり。謂はゆる偸とは、貪慾非道にして、苟も他人の物に眷戀し、遂には人の與へざる物を盜み。又みづから得べき分に非ざる物を取るを云ふ。婬とは、禮義なく、己が情慾を恣まゝにし。其の配偶に非ずして婬事を行ひ。遂に人の妻妾を姦するに至る者を云ふ。妄とは、言說に信なく、人に對して、其の說兩面あるの類を云ふなり。此の四惡業の中に於て、殺偸婬は、正しく身業に屬し。獨り妄語のみ、眞の口業となすと雖も。其の口業の中にも、亦此の四惡業を、含蓄する者なりと知るべし。

さて何をか口業の殺と云ふ、其の殺意有ると無きとは、且く措て論ぜず。他人を讒謗毀惡し、苟も人の榮譽を害し、人の不幸を來たす等の言說は、謂はゆる舌刀人を殺す者なり。何をか口業の偸と云ふ、言說を以て、他人を欺誣し。義に於て、求め得られざるの財寶衣服を、得んと企つるを云ふ。何をか口業の婬と云ふ、婦人女子に對して、妄りに猥褻の言說を吐き、其の婬情を促がし、故さらに禮義を紊り、以て情交を通ぜんと欲するを云ふ。此の如き惡業に由て、無實の言說を弄し、他人を騙瞞し、以て人の人たる道を壞り。終に己が不德を來たすのみならず、一世の人をして、人面獸行に墮せしむ。是故に口業は、人の甚だ輕忽にする所と雖も。世を害し、人を戕ふは、却て身業より懼るべき者有るなり。如何となれば、身業に在りては、固より國法の許さゞる所、世人の最も疾惡する所の者なるが故に。何人と雖も、概ね深く愼む所なれば。其毒をして、國家に蔓延せしむるに至らず。口業の如きは、諺に謂はゆる、口に關門なきの故を以て。人の品行を紊り、世の不幸を來たすこと、必ず是より甚だしきは無かるべし。噫口は是れ禍の門なり、深く愼まざるべからず。

今老婆子が、世人の甚だ輕忽に看過せる言說に就て、斯く懇ろに、利害を說明する

所以の者は、實に餘の義あるに非ず。大凡人の此世に在て、或は禍患を來し、或は福德を得る所以の者を、推察するに。概ね此の言說の媒介に依て、就れる者多きを知るが故に。世人をして、故さらに此道理を會得せしめ、苟も世の禍害となるべき言說の媒介をして、終に消除せしめんと欲するのみ。

假令人の心中には、如何なる愛念を藏匿すとも。未だ之を言說行事の上に、顯はし出さゞる以上は。唯其の者の一己の意業にして。縱令自家の心事は、安からざるも、自業自得の看に歸し。敢て人間社會に於て、不幸なる影響を生ぜざるなり。然れども、若し意業を轉じて。口業となし、又從て之を身業となす時は。其の惡業、世間に增長して、殆ど人の面目を失ふに至るべし。故に今老婆子が。故さら言說のみに就て、區々の衷情を演ぶる所以の者は。諸の惡事、多くは先づ口業より顯れ、而して漸く身業に及ぶが故に。直に惡事の發端なる言說を以て、深く愼むべき事なりと爲すなり。

抑も常人に在て、十に八九は、一向に己が生活の幸福を求めんと欲して、心中常に、種々の惡分別を生ず。或は殺伐の念を起し、或は偸盜の念を起し、又は邪婬の情慾を生ずる等。彼れに滅すれば、此に起り。此れ沒すれば、彼れ生じ。念々織るが如く、素より絕る期無しと雖も。深く之を意中に藏して、愼む所あれば。其人の品行に於て、尙ほ士君子たるの面目を害せず。如何となれば、人の意業は、容易に推察すべき者に非ず。假令人ありて、之を邪推するも。之を邪推する者の邪念にして。此の邪推邪念は、士君子たる者の、深く愼むべき所のみならず。世間交際の上に於て、妄りに人の心事を摘發するは、人々相互ひの讒誣となればなり。然れども、意業一變して、口業となり。苟も他人の知覺する所の者となれば、其の正邪善惡に應じ。或は士君子の面目を變じ、或は小人邪人となり果つるに至る。若し身に之を行ふ時は、實に國家の奸賊にして、人間の惡蠹と云ふべし。

是故に聖人ありて、之が禮節を正し。佛有りて、之が戒法を設け。苟も世人をして、禍害に遠ざからしめんと欲す。今や人情浮薄に流れ、其の敎法を棄て、其の道德を棄り。覥として恥無きのみならず、動もすれば、彼の口舌四肢を以て、唯に己が私利を營み、非道を遂ぐるの用具となすに至る。是故に、國法を暗記するも、只に刑科を避くるが爲めのみに非ず。却て法網の拔け目あるを覗らひ、委曲に事

を巧み。其實は、殺偸姪とも云ふべき惡事を、成就せんと欲するに至る。噫人情既に此の如きは、則ち目下の三惡道と云ふべきなり。佛曰く、慙愧の心あるを以て、人と名づくと。又曰く、慙愧は、能く人の非法を正すと。實に恥づべきの心ありて、愧ぢざる者は、人間に非ざるなり。

抑も人は是れ、生れながらにして、人に非ず。故に太古蒙昧の民は、禽獸と其の類遠からず。交ごも互に、殺戮盜偸を恣まゝにし。又男女の別、言語の信あることを無かりき。漸く世代を逐ふに及て、幸に聖人なる者あり。之に敎ふるに道理を以てし、之に授くるに文物を以てし。漸次に誘導して、野蠻の陋俗を去り。遂に今日文明の盛世に趣くことを得せしめたり。然りと雖も、今日の人も、其性情に於ては、大古不文の民と、素より異ならざるを以て。一旦聖敎を壞り、自我の任意に應じて、言行を顧念する所無き時は。亦安んぞ彼の禽獸と、伍を爲すに至らざるを知らんや。是故に、四肢五體あるを以て、人と名づけず。又横目縱行を以て、人と名づけず。蓋し人の以て人たる所の者は、能く聖敎を奉じて、人の行ふべき道を行ふを以てなり。

眞妄辯

老婆子曰く、凡そ世間の事々物々に就て、之が正邪眞妄を辨識するは。殊に人生の一大要件にして、而も容易の業に非ず。如何となれば、唯に之が字義に就て論ずる時は、眞とは實有の義、妄とは無實の義に過ぎざるが故に。其の分別は、直に判然たる者の如しと雖も。之を實地に就て思考する時は、水火冷熱を辨知するが如きに非ざる者有ればなり。今試みに一問題を設けて、之を論ぜむに。人性は善か將た惡か、或は善惡混同するか。其の性善の說に就て思考すれば、必ず一義あり。其の性惡の說に就て思考するも、亦必ず一義あり。蓋し一心の性情に就て、此の如きの善惡反對の說を得る者は。未だ其の眞妄を辨識すること、恰も日月の明の如しと云ふ所以の者に非ざるなり。是故に古人も、之が爲めに、種々の法を設け。儒門にては、格物窮理と云ひ。佛家にては、因明正理と云ひ。其の法式、おのづから異同精粗の差別ありと雖も。均しく是れ、一切事物の眞妄正邪を辨ぜんが爲めなり。

儒佛二教に於て、論ずる所の法式は。固より小異同ありと雖も。俱に內外に通じて、廣く、事物の眞妄を辨識する所の者にして。殆ど一流の學科と云ふべし。故に之を論辯せむと欲するも容易に老婆子の舌頭に、詳悉すべき事に非ざれば、暫く之を擱き。單に彼の眞妄是非の、根底する的中に向ひて、順次に論明すべきなり。

何をか眞妄是非の根底と云ふや。即ち吾れ人一切の事物に對して、取捨分別するの心是れなり。若し此の分別心の生ずる、苟も妄想臆測の念よりして發生する者は、畢竟して妄なり。譬へば夢に大川を涉るが如し。或は游泳を圖り、或は舟筏を求む、既にして一覺すれば、其の大川と認めたる者、本來虛妄なるが故に。游泳舟筏共に虛妄の取捨分別なるが如し。是に於てか老婆子は、此の譬喩に就て、其の對照すべき實事を考察するに。怯者の闇夜を往くに方りて、眼に朦朧と物影を認み、忽ち夜叉惡鬼妖怪の想を作し。以爲らく、是れ己れを害する者なりと。其畏怖の念よりして、或は之を避けむと欲し、又は之と戰はむと欲する事あり。若し明かにその樹木竹石たるを認知する時は、その夜叉惡鬼妖怪は、固より

虛妄なるが故に。其の避くると戰ふとの分別心も、亦謂はゆる空中の現象にして、無用の取捨と云ふべきのみ。

復た茲に稍や前說に似たる惡分別有り。蓋し人情の常事として、過去を顧み、未來を憶想し。以て自己の生運活路を、幸福の地に誘はざるを得ずと雖も。妄に未來時を望みて、由來無き幸福を求めむと欲し、心中種々の妄分別を生じ、鄙言に謂はゆる未獲の狸皮を暗算して、以て己が福祿を期するが如き者あり。斯かる妄想を、明解せむが爲めに。重ねて之を言說する時は、稍論宗に合せざるものありと雖も。尙此の義の詳悉ならざるを恐るゝが故に、敢て之を左に論明せむ。

既に言說論に於て世間一切の事物は、悉く因緣果報の道理を道るゝ者あること無しと明言せり。況や吾人の生計に於ける、其の行事萬物に關涉して、一も此の因緣の爲めに非ざる者なきに於てをや。是故に、苟も宿世の因緣如何を問はずして、萬一を來世に僥倖する時は。その計度萬發に、唯一の偶中無きのみならず。恰も空手にして魚を漁せむと欲するが如く、終歲奔走するも、終に一物の所得無からむ。鄙諺に云ふ、播かざるの種子は生ぜずと。是れ能く簡單に、彼の因果の

道理を說き得しものなり。

凡そ世人の妄想臆計は、獨り其の人の不幸を來たすのみならず。又甚だ世間を害するものなり。今之が一端に就て其の有樣を云はむに。誰人も、日中は、東西に奔走し、概ね耳目現量の繁劇なるが爲めに、深密の工夫も出來難く。漸く夜分に至り、暫時の閑靜を得て。過去の失計を追悔し、尙ほ來者の追ふべきを思ひ。千慮萬考して、漸く自己身勝手の工夫を憶ひ出し。委曲に之が順序計策を調へ、不合の勘定を、理不盡に統計し。以爲らく、是れ甚だ妙計奇策なりと。曉天を待ちて、之を世上に計らむと欲す。然れども、是れ全く自己一分の妄計なるが故に、既に旭日を望めば、滿胸の計算、其の半ば消散す。玆に至りて、殆どみづから其の非たるを知るも、尙ほ其の分別に執着して、措く能はず。强顏に言說を巧み、之を他人に相謀り、俱に共に此の失計に墮ち入らしむ。一人より二人二人より三人と、漸く其の義に雷同し。幸にして其の非を遂ぐること能はず。而して其の窮困を獲るは、固より其の人の自業自得なりと雖も。若し不幸にして、他に其の利害を同くする者多く、彼此相互に、之を彌縫して。謂はゆる人衆ければ天に勝つ者の如くならしめば、將た之を何とか云はむ。果して然らば、老婆子は、不智小民の爲めに、其の不幸を吊し。併せて國家の患害を、深く憂ふるなり。

今夫れ、人の妄想心より流注する者を擧げて、論列する時は。其趣向甚だ多しと雖も。之を要するに、自己一分の我意に執著して、世間一切の事物を、明了に正觀せざるに是れ由る。如何となれば、萬事萬物、共に一定の性質及び因緣ある故に。假令己が我意を以て、自由に諸物を相應せしめむと欲するも。決して得べからず。若し强て之を作さば、謂はゆる宋人の苗を揠くが如く。勞して功無きのみならず、必ず他を損害するに至らむ。是故に智者は、明かに天地萬物の性情と、之が因緣とを觀察し得るが故に。苟も物をして、我意に隨はしむることを勸めず。唯に諸物の因果に相應し其の性情に從ひて、之が功を治むるが故に。百事一として成就せざるは無し。是れ之を妄を棄てゝ、物我の眞を得ると云ふ。

古人言へることあり、花は愛惜に落ち、草は忌嫌に生ずと。是れ蓋し、自己愛惜の情よりして花の散り易きを感じ。自己忌嫌の念よりして、草の速かに暢茂するを覺ゆるを云ふ者なり。若し無分別の境よりして、之を視る時は。美花惡草の

差別すら無し。如何に況や謝絶と繁茂とを、殊更に感覺せむや。さらば有情世界は、己が一念の妄行に因て建立し、又は毀損すと云ふも。其の理無きに非ざるなり。

世の人、此の一念妄行の、妄たる所以を知る時は。必ず諸法の平等を達觀し。苦樂の幻境永く亡びて、聖者の卓見に通入し。身心の自由を得ること、更に難しとせざるなり。

若し夫れ、此の一念妄行の、妄たる所以を知らず。諸物をして、苟も我が愛憎に、相應せしめむと欲する時は。必ず事物の、我が意に背くを感覺し。五十年の生涯も、徒らに境界の奴隷となり。常に苦惱に纏縛せられて、多愁深哀の中に、人事を過さむのみ。偶に曰く、芭蕉葉上無秋雨、斷腸偏在愁人耳。

さて世人の妄念妄行を論ずるに、其の因緣多端なりと雖も。概して之を云はゞ皆愛憎忌嫌の念に、根柢し、以て漸く苦惱の境を感ずるのみ。請ふ試みに其の一端を證明せむ、今夫れ飛禽走獸の、林叢に集り曠野に遊びて、逍遙自得する有樣は。貪着なき大人の、視て以て心を樂ましむる所の者と雖も。未だ物我の情に通ぜざる兒童の如きは、然らざるなり。一禽一獸も、必ず我が樊籠中に置き。彼れの自在を失はしめて、自己の意中に繫ぎ。全く我が思惟する所に相應せしめて、以てみづから安むずる者の如し。然る故に、我れ彼れをして自在を失はしむれば。我れも亦彼れが爲めに其の自由を失ひ、心念究屈にして、愛憎喜怒の妄生すること。恰も波瀾の流動して、際限なきが如し。何となれば、彼の事物の因緣は、必ずしも我が意に伴ふべき果報に非ざれば。彼れは彼れが因果に任すべきを以て、強いて我が意に從はしめむと欲すれば。必ず己れが自由をも失ひ、斯かる意縛を受けざるを得ざるなり。看よ彼れ兒童は、禽鳥を籠絡するを以て、一時の快を得るが如しと雖も。又却て其の脫去せむことを恐れ。甚だしきは傍らを離れ得ず。若し其の脫去するに遇はゞ、必ず失望して、悲憤に沈むに至らむ。是れ豈鳥を縻がむと欲して、反りてみづから縻がるゝ者に非ずや。是等の意味を指して、自家の妄念妄行に因て、苦樂の幻境を建立するとは名づくるなり。

一切諸物の色相は、必ずしも愛惜すべき物に非ず。亦厭惡すべき物にも非ず。然り而して、世人概ね此の諸物に於て、妄りに好惡愛憎、取捨分別の見を起し。以

て己れが苦樂悲觀等の感觸を生ずる者は、是れ皆一として、妄念妄行の働きに非ざる無し。所以何となれば、彼の諸の色相は、本來無相にして、和合を體と爲し。因緣を以て、姑く發現せし者にして。固より好惡愛憎に關すべき物に非ず。其の關係すべきが如く看做せるは、曾て彼れより醸し來るに非ず。皆己が妄念妄行の揑造に出づる事なるは、恰も向きの籠鳥の爲めに、身心を勞するも、全く兒童の妄念に發し、其妄行力に出てゝ。鳥の所作には非ざるが如し。人々無明に覆はれて、眞如を晦まし。色相の上に、迷執するよりして。妄行と妄相と相紆はり、以て諸の妄境を結構するのみ。是故に一たび眞如を發して、妄行を除遣せば。從ひて妄境も亦滅せむ。妄境既に滅せば。身心は固より自在にして、何の繫着の勞か之れ有らむ。

然りと雖も、世人未だ輙く此の自在の達觀を得ざるが故に。常に妄念を以て、妄境に處し。而して其の中に於て、展轉計度し、執著の勞に罹り。恃むべからざるを恃み、求むべからざるを求め。以て境界の奴隸となるなり。何をか恃むべからざる物と云ふ、曰く、世相の轉變是れなり。此の轉變の境に處して、常住の念を爲すを以て。事物の因果を、自己の意外に認むがる故に。概ね薄命不幸の苦地に沈む者なり。何をか求むべからざる物と云ふ、曰く、富貴利達是れなり。是れ元其の因緣無くして、求むべき者に非ず。而して世擧りて、妄りに之を求む。然る故に、求むる所の福利、遂に得られずして。願はざるの貧賤、常に身心に逼迫す。人生意の如くならざること、十に常に八九と云へる語の如く。世界は如何なる道理にて、斯かる類例の有樣多きやと怪めども。是れ決して世の罪には非ず、自家の不了簡より、して、徒らに事物の我が意に違ふを感覺せるなり。

凡そ人愛する所あれば、必ず憎む所あり。愛して其の物を得ざれば、憂惱茲に生じ。憎みて其の物に接すれば、亦憂惱を來たす。愛憎は妄行の大端にして、貧瞋は衆苦の門戸なり。其の原因事物の眞理を辨ぜざるの妄差別より出でゝ。諸物をして、苟も我が情に相應せしめむと欲し。因緣果報の、何事たるかをも察せず。愛すれば其の生を欲し、憎めば其の死を欲し。愛憎更る〳〵起りて、妄言妄作外に發動し。世を害し人を賊するに至る。世人此の妄行を恣まゝにして、みづから戒めざるより。父を忘るゝの子有り、兄を訴ふるの弟有り。夫を欺くの

婦あり。其の他醜穢なる影響を現じて、世の榮華を妨げ。罪を後代に獲るが如きに至るなり。何ぞ不了簡の甚だしきや。

富貴は、善業の果にして。貪瞋は、災害を招くの因なり。故に現今の福樂は、過去の宿報なり。現今の事業は、將來の仕度なり。妄者は其影を見て、其の實を知らず。其の花實の美を羨みて、其の根本の培養を知らず。世の盜賊、及び不義の心を挾む者は。人の富貴榮華の境界を視て、其の境界の由來する道理を求めず。譬へば綺樓玉席に宴會し、歌舞珍羞に圍繞せらるゝ有樣を見て。金銀の働きを羨み、慾心頓に起て、堪ふること能はず。直に人の倉庫を穿ちて、其の財を橫奪せむとするが如き不了簡を生ずるなり。金銀の働きは、貴き者なり。此の金銀を得るの道は、勉强と忍耐とより獲る者なり。然るに因果に求めずして、人の蓄積せるを奪はむと欲するは。人の勉强忍耐を賊害して、己れの欲を遂げむと欲する者なり。斯かる不義不道は、人の許さゞる所なれば。惡果立ちどころに報いて、刑場の因となるなり。豈唯盜賊のみならむ、凡そ人の自由を妨げ、世の榮華を害する言行は。終に己れに廻り報ゆること、皆此の類と一般なり。

是故に、智者は因を論じて、果を論ぜず。因果の離れざるを知る故なり。妄者は、因を忘れて、果を願ひ。果を懼れて、因を輕むず。是れ不了簡の根本なり。彼の盜賊の頸を斬る者は、刑場の白刃に非ずして、倉庫中の黃金なり。蓋し刑場の白刃は盜賊の懼るゝ所なり。庫中の黃金は、盜賊の甘むじて斬らるゝ所なり。彼れ盜賊をして、黃金を懼るゝこと、白刃を懼るゝが如くならしめば。何ぞ甘むじて、己れの身首處を異にするに至らむや。又彼れをして、己れの妄念を懼るゝこと、獄吏を懼るゝが如くならしめば。始めより劫奪の事も生せざるならむ。然るに、遠きを懼れて、近きを懼れず。人を恐れて、己れを恐れざるは。謂はゆる因を忘れて、果を願ひ。果を懼れて、因を輕むずるの過ちなり。故に盜を爲す者は、先づ自己の身體を棄てゝ、而して後ち人の家財を取り。人を殺す者は、先づ自己の頸を刎ね了りて、而して後ち禍を他人に及ぼす者と云ひて可なり。是れ則ち自業自得の理にして。宇宙廣しと雖も、古今久しと雖も、毫も改むる能はざるの因果なり。世の人、苟も因果の懼るべきを思惟し。妄行の恣まゝにすべからざるを知て。細心詳究、次第に進步して。以て愛憎苦樂の、俱に妄たるを悟るに至

らば。一心瞭かに、法界の眞に協ひて。一切の不了簡は、跡を滅して無かるべし。聊か論じて眞妄の辯と爲す。

世相說

老婆子曰く、世と云ふは、果して如何なる物を指すの言なるか。今人々の常言に世の中と云ひ、又は世の人など云ひ馴れて、怪しむ者無しと雖も。之が名に就て、其の實を求めむと欲する時は、甚だ分明ならざるなり。然れども、吾れ人の棲む所は、正しく世の中に相違無く。人々又世の人に相違無ければ。篤と其の物柄の成り立ちを、考索熟思して。之を審らかにせざるを得ざるなり。若し夫れ人として、世の何物たるを知らざれば。其の心思、及び言行、共に世の成立と齟齬を生じ。唯々此世に棲む道に背くのみならず、其の世渡りの上に於ても、必ず多少の不幸を來たすべきなり。抑も世と名づくる者は、單的に人類を指すの稱にも非ず。又人の執り行ふ事柄を云ふにも非ず。又天地萬物を總稱して、名づくるにも非ざれば。將た如何なる物が世の名を得。如何なる物を、世の性質とせむか。今老婆子は、反覆沈思して、世の世たる所以を考ふるに。正しく萬物の轉變毀壞する有樣を指して、是れぞ世相と名づくるの外無きを知れり。故に一言以て之を盡くす時は、世相は、即ち無常なりと斷言して可ならむのみ。

然るに今世の人は、此の無常なる世に棲息して、反て此の無常轉變の義を知らざること。恰も幾百年も住み果つる積りの如し。斯かる人は、既に此の世に棲息する所以の主義を、顚倒せるが故に。萬事萬物、おのづから己れが心と反對し。從ひて薄命の歎息、不幸の苦情止む時無く。愁聲世に盈ち、醜態交も〻〻顯はるゝに至る。是れ皆此の世に處して、此の世の何物たるを辨へず。みづから顚倒の謬見に坐するが故なり。

既に論說するが如く、一切の事物、悉く轉變毀壞して窮り無きを。世の世たる所以なりとする時は。假令ひ己れ獨り此の理に反し、常住の念に執著するとも。如何ぞ事々物々の、我が意に相應する者あらむや。看よ、天地も終始轉變し、日月も晨夜に迭代す。四時の循環より、百物の榮枯に至るまで。一として永く舊に

依る者無し。實に此等の有樣を、深く觀察するが故に。老婆子は、玆に決定して、世相は萬物常無き情態を指示せる名なりと明言せり。請ふ我れと人と、共に此の義を辨へ。苟も世に住するの道を失ふこと莫からむことを欲す。

さて人の世に在る、固より世の世たる所以の義に畔きて、獨り常往不變を保つべき道理無き時は。誰人も、此の世相に相應せむが爲め、各自に反顧して、之を己が宿世に證し。併せて老婆心說の、誣言に非ざるを辨識すべし。看よ、吾人の此の世に住するや、固より長短夭壽の差別ありと雖も。今之を吾人の過去に反省して、其の所得を求むる時は。積りし日月の踪跡無きのみならず、縱に其の記念と爲すべきは、躬の衰へたると、事物の變遷せしとを認むるの外無かるべし。

今老婆子も、之を其の躬に反省するに。大方は逝く水の間なく、夢も現も、現身の流れて早き浮世なりとす。就中後の記念と語り出づべき物も無く、昨日は更なり、今日の日迚も。夕べにして晨の事の不審なる、憶ひ回へすも其の詮無きが如し。されば道なき浮世に、露の命を懸けて、最と長き日月を繫ぎ渡るは。吾れ人の有樣なれば又今更に云ふべき際にも非ざるなり。然れども上に論ぜし如く、人として、此の世に住みながら、此の世の世たる所以をも辨へず。尙幾百年も住み果つるが如き不注意の人は、必ず世と畔きて、憂患多きのみならず。其の心もおのづから强慾非道にして、人情に疎きより。他物を害ひ、他人を疾惡妬忌するの心多く。此の世を害すること、鮮なからず。

抑も萬事萬物の、此の世に在るは。悉く有爲の法に因りて、存する者なり。謂はゆる有爲とは、爲す有るの義にして。一切世間の事物は、都て此の義に由りて、成就せざる者無し。夫れ然り、苟も有爲の法に由る者は、必ず轉變毀壞の相を免かるゝこと能はざるが故に。殊更に老婆子は、玆に正觀を盡くして、有爲法の不思議を感じ。且甚だ奇特の思ひを作せり。如何となれば、人々試みに思へ、一切世間の事物をして、皆悉く一定不易にして、常住不變ならしむる時は。苦樂の果報、終に絕無に歸し。貧人は、未來永世まで貧困にして。富人は、究竟して富人ならむのみ。死者は生ぜず、生者は死せず。萬物に盛衰無く、四時に循環なく。是非得失、苦樂悲歡の情も無からむ。然るが如きは、是れ人間世界の殺風景にして。謂はゆるありてあり甲斐無き者ならずや。然し他の萬物の、盛衰轉變を傍觀し

て、我が身獨り、常住不變の位地を占むることを得ば。無上の福利なるべしと雖も。夫は決して世相の許さゞる所なれば。之を望むは、實に妄想と言ふべきのみ。

誰か金石の體質を稟くることを得む、誰か千歳の日月を經ることを得む。看よ、吾れも人も、互に、蜉蝣を天地に寄せて。僅かに生命を保存するも。此の世の有爲に相應して、必ず漸次に轉變せり。其の死生存亡も、實に佇立して待つべきのみ。夫れ此の如き世に處して、此の如きの形體を保ち。吾れ人共に、旦夕に衰死すべき分際に在りながら。尚ほ且つ互に妬忌、疾害し、競爭攻擊して。以て其の不幸と、其の衰死とを促すが如き者は。噫何事ぞや。假令ひ互に相企てゝ、其の不幸衰死を促さゞるも。必ず此の世相に連れて、俱に共に待ち得て逭ること能はざるべきのみ。

噫呼斯くの如き相互の殘毒は、翅に人を愛せざるのみならず。其の極は、自己を愛せざるものなれば。豈之を狂妄喪心者と云はざるを得むや。然り而して、此の殘毒の原因を尋ぬるに、他無し。唯此の世の有樣を思惟せず、常住の執見に惑はされて、妄想の縛を受くるが故なり。是を以て老婆子は、世の人の、無常の理を知らざるよりして。終に情も無く、義理も無く。人の人たる道理の世たる所以を害して、みづから薄命不幸に沈むことを悲み。今無常の文を作りて、之を世人に示す。請ふ世の無常を知る人も、尚ほ等閑の看に附せず。靜坐一讀、以て善を勸むるの媒とすることを得ば。亦以て區々の衷懷を慰するに足らむのみ。其の文に曰く、

夫れ生有る物の死あることは。常ならぬ世の常にして。古より斯るがゆゑに。今更にはかなき際にもあらず。無常の風は。常に呼吸に通ひ。白骨の姿は。既に桃李の裝ひに存せり。未來遠きが如しと雖も。實は歩々前程を踏むが如し。昨日見し天邊の寸碧は。全たく今日に踏む脚下の巖頭なり。臨終一期の至れること。猶今日の至れる如く至れり。現身の世は。只に夏の蟬のよすがにもあらず。露の命は。偏に秋の草葉に置けるが故の果なきにもあらざるなり。斯かる世なるが故に。佛は無常なりと說示し給ふ。噫吾れ人の愚かなる。只に生あるを知りて。その死あるを知らず。又此の世

あるを知りて。未來あるを知らず。一日〳〵と。後生近くなりぬるも。老たる蠶のまゆをいとなむが如く。罪業は漸く深重に。煩惱の火は終に消滅するの期無し。朝には六塵の業欲に繫がれ。夕には十惡の重障に沈む。その一切の法心を燼き盡くすこと。恰も霜の朝に殺人の劍を望むが如し。我も斯くなり。人も斯くなる。是れいかなる境界ぞや。されば佛は。賢を愚なりと誣い。無常ならぬ世を。無常なりと詐り給ひしにも非ず。又無常なるが故に。疾く無常の世を捨よとにもあらず。假令ひ無常は捨るとも。捨てがたく。貪るとも得難し。大方は彼れも此れも。無常の世にしあれば。執をとゞめて。後生の障りと爲すことなかれとの。いと尊き御教にこそあれ。さりとては又。生あるものゝ。死を悲まぬなければ。佛も殺生戒を立て給へり。古の佛者も。衞生保命。人獸不殊。重身愛體。彼我無異と云はれたりき。されば我が心の畏懼喜樂を。他に及ぼし。物の情をして。滿足ならしむるこそ。佛の道に近からめ。是故に無常の世は。有情の世にして。有情の身は。無常の身なれ。嗚呼世も盡きじ。人も盡せねど。此の世いつか無常の世を逃れ。此の人いつか常住の身を保つことを得むや。先立つも後るゝも。老たるも若きも。共にのがるゝ道なく。來を迎へ往を送り。吾れ人同じく臨終一期を待つの外なかるべし。斯くもはかなき世のためしは。古よりのならひにして。又今さらの事にしあらず。

告少年文

老婆子曰く、汝少年よ、汝は此の生れる處は、如何なる境界と思惟するや。汝若し、此の世の中の成り立ちと、其の有樣の如何とを知らずして。只に汝が思ひの儘に嘲し、取り行ひする時は。實は汝は、昔の人と、今の人との罪人にして。又汝が世を繼ぎて、生れ來れる後の人の爲めに、家を破り、世を害する惡魔なり。如何となれば、試みに思へ、昔の人は、汝の爲めに、家室を造りて、風雨を凌がしめしに非ずや。田畠を耕して、飢饑を免れしめしに非ずや。其の他、大凡そ汝が足に踏む物、手に取る物、何一つとして、汝がみづから工夫を凝らし、みづから成就せる物有ること無し。皆是れ昔の人の賜物のみ。

然るに其の恩をだに知らず、其の功德を害し、世の道を荒さまして。國の衰へを來し、後の世の人の患ひを貽すに至りては。豈之を魔賊と云はざるを得むや。

昔の人は、汝の爲めに善事をなし置かむとて、萬事萬物を、工夫成就せること、容易に非ず。心を焦し、躬を碎きて、尙止むことを知らず。實に汝が遊戲に耽り、放逸無賴にして、親の誡め、世の毀りをも顧みざるが如き、無道に似ざるなり。

汝若し古人の斯くまでに、世の爲めに力を盡くし置きしを知らば。汝が生れ來れる境界は、古より斯かる習ひなる者と知りて。尙ほ古の人に相續し、後の世の爲めに、善事を營むべきなり。然らざる時は、汝は當に汝の一身一命を以て、此の世の相續に立つこと能はざるのみならず。必ず罪人魔賊と看做されて、永く世間の惡しみを受くべし。古語に曰く、子を養ひて父に如かざれば、家門一世に衰へ。賢なること師に愈りて、應に傳授すべしと。汝其れ之を思へ。

今の世の人も、中〳〵に、汝が爲め、又後の世の人の爲めに。力を盡くし、心を竭くすこと。古の人にをさ〳〵劣ること無し。如何となれば、此の人等は、盡く古人の相續者なれば。古人の傳へ遺せしよりも、一層此の世の中の榮華を興し。後の世の人をして、貴き境界に住ましむるを、庶幾するものなればなり。汝試に市に出て〻看よ、寺に詣て〻見よ、野に往きて看よ、學校に入りて見よ。其の人の爲すこと、言ふこと、則ち何事なるや。果して汝が遊戲に耽り、放逸無賴に似たる者ありや。復た家に歸りて、父母が行ひを見よ。朝は夙に起き、夜は更け行くまで。其の爲す事、果して何事なるや。大凡そ家の爲め、世の爲め、汝が爲めに非ざるもの無からむ。されば汝が着たる衣も、手に執り足に踏む物も。大方は汝が力の、能く工夫し成就せるものに非ずして。盡く古人の賜物なれば。之に報いて、汝は汝の力の及ぶ限り、營み勤むべきこそ、此の世の有樣にして。即ち汝が生れ來たる境界の道理なれ。

此の說話を聞き、汝は斯く思ふべし。此の世の中の成り立ちと、有樣とは假令斯かる道理なるも。我が家には、金錢貨財あり。又我が父母は、能く我れを養育せるが故に。我れ敢て憂ふる事無しと。是れ甚だ了簡違ひなり。汝若し此の不了簡を、改めざる時は。吾は實に、汝が爲めの父母ある事無く、又汝が爲めの金錢財寶とて、一も有ることなしと云はむのみ。此の道理は、甚だ深密なる義にして。

輙く汝をして悟らしむること難しと雖も。茲に其の大概を示すべし。譬へば彼の家財は、世の中に在る水の如し。此の水は、必ず高き處を去り、低き處に向ひて流れ。遂に凹き處に到りて止まる。汝が恃む所の金錢家財も。汝と共に滅すべき物に非ざれば。是れ全く汝が物の如くなれども、其の實は世の中の物なるが故に。必ず世の中を流通して、高き處を去り、低き處に向ひて流れ。凹き處に到りて、富をなすものなり。さて汝に問はむ、彼の水の利と、又水に就ての高低凹凸とは、容易く知り得べしと雖も。彼の金錢家財の爲めの高低凹凸は、果して如何なる處と思ふや。蓋し其の高き處と云ふは、直に汝が如く遊戯に耽るのみならず。師の敎へ、親の誡めを守らず。又此の世の成り立ちと、其の有樣とを知らず。世の爲め人の爲め、又己れが爲めに、筋骨を碎きて、働き勤むることをなさず。世の人よりは、罪人なり、惡人なりと賤められ。此の世の榮華を破壞して、害を後の世に流す程の人を云ふなり。之に反して、其の低き處と云ふは、品行方正にして、能く師の敎へ、親の誡めを守り。又此の成り立ちと、其の有樣とを能く知りて。世の爲め、人の爲め、又己れが爲めに、筋骨を碎きて、働き勤め。世の人より、善人なり、君子なりと貴ばれ。此の世の榮華を、相續して。之を後の世に傳ふる程の人を云ふなり。是故に、此の理に照らして、之を論ずれば。假令億萬の家財有りとも、其の汝が躬を離れ去ること、恰も彼の水の高きを去りて、低きに赴くが如く。大水の流れ去るは、小水よりは駛く。大財の散滅するは、小財に比すれば尤も速かなり。然る時は、世には罪人惡魔として、永く斥けられ。親に對しては、不孝の子となり。子孫の爲めには、敗家の親と名づけらるゝも。汝安ぞ之を逃るゝことを得むや。

又汝が思ふ如く、父母の汝を養育せしは、既に汝が今日の躬あるに依りて、明らかに知らるゝ所なり。然も汝が意に於て、汝の父母の、汝を養育せしは、如何なる心と思ふや。又汝は、今日の、汝が躬に成り立ちしは、如何なる道に依りて、長ぜしと思ふや。汝試みに之を父母に問はゞ、則ち父母の我が爲めに、如何なる辛苦をなせしやを明らかに知るべし。大方は汝が爲めに、寒さをもいとはず、暑さをも避けず。夜と無く、晝と無く。心を困しめ、身を勞し。其の辛苦は、中〳〵に口にも筆にも、盡くすべき樣無からむ。噫是れ父母の心は、汝を養ひ育てゝ、世の罪人と

なし、惡魔となし。又汝を長ぜしめて、此の世に餓鬼たらしめむが爲めならむや。實に世の親たる者は、汝等が爲めに、心を盡くして養育をなし。汝が少しにても、事物を辨知するに至れば。敎師の請に遣はし、學問を敎へ、職業を授け。汝をして、一生の營みに、不自由無からしめむ事を願ひ。長じては、人に尊み敬はれ。尙ほ後の世の人の爲め、又子孫の爲めに。みづから勤めし如く。汝をして師となり、父母となり、其の心と其の行ひとを、長く相續せしめむと欲せるなり。然るが故に汝の父母は、汝に食を與へ、汝に衣を與ふるのみを以て、養育せりとは思はず。全くは汝が世の中の道を辨へ、能く此の世の有樣を知りて、此の世に背かず。永く汝と、汝の子孫との果報を全からしむるまでを懸けて、養育の道となすなり。是故に、汝が如く、父母は啻に我れを養育して、寒からしめず、暑からしめず、とのみ賴む心ならば。既に汝が父母を無みすること、恰も親を弑する子の如し。前に說く如く、汝が飢ゑず寒ゑざるのみか。大凡そ見る物觸るゝ物、悉く古人の賜物にして。又今の世の人の、傳へ敎へし事なれば。汝も亦能く其の道理を考へ、其の敎へに背かず。其の賜物を無益にせず。之を汝が躬に會得して、以て汝が子孫と、後世の人とに傳へ、敎へざるべからず。汝少年等、必ず余が言を忘るゝこと勿れ。

方便解

老婆子曰く、梵語謳和、之を漢譯して、或は方便と云ひ、或は善權と云ふ。蓋し大聖先覺、世人を開化啓發せしむるの一大要具にして、宇宙間闕ぐべからざるの至寶なり。何を以て之を言ふや。曰く、名なる者は、實の賓にして、實の體に非ずと雖も。名に假らざれば、以て實を彰はすの便無く。言なる者は、心の華にして、心の體に非ずと雖も。言を離れて、以て心を通ずるの方無きが如し。然り而して、世の人往々方便の名を、謬解誤視する尠しとせず。其の至寶をして、殆ど實用を隱蔽せしむるのみならず。從て先聖、世人を開導救濟するの妙用をも、併せて虛妄に屬するに至る。遺憾と云はざるべけんや。故に今聊か、方便の實義を辯明し、以て其の大用を識らしめむと欲す。然れども、是れ唯淺學の爲めにする者にして、高明の學士は、那ぞ之を事とせむ。

凡そ先聖の覺知たる、至大にして見難し。唯慧眼ある者、能く之を視る。至廣にして、究め難し、唯法眼ある者、能く之を究む。然るに世の人、慧眼ある者極めて寡し。法眼を具する者、將た幾許かある。然らば則ち、人類衆しと雖も。輙く大道を辨明し、妙理を究尋する者、殆ど得る能はざるなり。試みに之を辨明し、之を究尋する者無しとせば。縱令至妙廣大の道あるも、壅遏閉塞、遂に通ずるに由なきなり。果して然らば、滔々たる世間、何の日か眞理の顯はるゝを豫期せむや。人々亦何に向ひて、心性歸着の地を知らんや。噫此際に當り、棄てゝ顧視せざる如きは、聖の聖たる所以に非ず。苟も之を開通せむと欲せば、その術無くして可ならむや。是れ即ち方便の由て生ずる淵源にして、聖人世間を開化する善術たる所以なり。

世の人慧眼無し、先聖爲めに之を開く。世の人法眼無し、先聖又爲めに之を開く。世の人未だ遽かに眞理に觀達する能はず、而して先聖爲めに無數の法門を洞開し。無數の法規を裁制し。彼の曉らざる者をして、始めて曉り易く。通ぜざる者をして、始めて通じ易からしむ。蓋し謂はゆる無數の法規を裁制するは、衆機を該攝するの方法にして。無數の法門を洞開せしは、又群物に應ずるの便宜のみ。先聖をして方便無からしむる時は。聖はおのづから聖なりと雖も、愚は益々愚たらむ。聖愚遠く隔ちて、移易の道無き時は。智も徒智にして、貴ぶに足らず。聖も徒聖にして、仰ぐに足らず。世界は、漠然たる死物に同じく。千歲を經るとも、更に人智開明の見るべき無からむ。是れ豈天地の理ならむや。一雨茲に降り、百草各々其の分に從ひて、潤澤を受け。至人出世して、智愚利鈍、成く位に應じて益を受く。只夫れ强者は弱を助け、愚者は智者に導びかるゝは。宇宙間横目の徒の通義なれば。愚も變じて智となり、拙も化して巧となるべき道理なり。夫れ然り、故に聖智たる所以は、愚を導き迷を開くに在りと云はざるべからず。されば、とて、愚者速かに、智者の域を窺ふべきに非ず。迷者立ちどころに、悟者の地に至り難きは。大聖も之を如何ともする能はず。唯方便開通して、應分の覺悟を得せしむるのみ。之を聖者の善權と名づくるなり。

今世の人、多くは方便の實義に達せず。兎角詐僞詐謀を設け、他人を陷穽に陷し入るゝが如きを、卒爾に方便の名を施し。方便と云へば、詐僞の異名と心得たり。

殊に知らず、詐僞詐謀は他人を賊害するの器械にして。到底眞理と反對せる者なるを以て。苟も人心ある者の、爲すべき事に非ず。矧や大聖覺者に於てをや。試みに目前淺近の事柄に就て、詐僞方便の徑庭を區別せむに。譬へば痰黠なる卜者、人の家に入りて。此の家大不吉の相あり、急に祓除せずば、必ず災害に値はむと。詭誕無稽の說を以て、愚夫の金を奪ふが如きは。是れ詐僞の術なるのみ。幼童疾有り、藥を與ふれども、肯て服せず。其の父母竊かに、藥を食中に置き、之を與ふれば。小兒直に食して、以て、病おのづから癒ゆる者の如きを。方便と名づくるなり。故に詐僞は、百端にして人を害し。方便は、多方にして人を益す。其の跡似たりと雖も、其の實は天地懸隔せり。詐僞は、一日も世上に存すべらざる者にして。方便は、一朝も人間に缺ぐべからざる所の者なり。

是故に、人の父と爲りて、方便を知らざる時は。其の子を敎育するの度を誤まり。人の師となりて、方便を知らざる時は。其の徒を勸奬するの術に暗し。看よ、彼の父の子を誨ふるや、豈其の子一朝にして、事物の理を知るを望まざらむや。然れども、朝々にして之に言語を敎へ、夜々にして之が坐作を習はしむ。日月を積むの後、終に其の子をして、人間百般の事物に通ぜしむるを致す。是れ父の方便あるに因る。師の徒弟に於けるも亦然り、其の智愚同一に成業するを欲せざる、に非ず。然れども、理に淺深有れば、業に階梯あり。器に利鈍あれば、敎に迂直あり。此の如くして後ち、智愚各々得る所あり。若しも其の道に悖り、才子を敎ふる所を以て、不才子を敎へ。鈍器を導びくの法を以て、利器を導びく時は。器敎相背きて、畢竟勞して功無きの道理なり。彼れ大聖先覺の、方便以て世間を喩すも。是に準じて、其の一斑を知るべし。

善い哉、古人の方便を解するや。正直を方と云ひ。己れを外にするを便と云ふ。正直に因るが故に、衆生を憐憫するの心を生じ。己れを外にするに因るが故に、自身を供養するの心を離ると。又曰く、方便なる者は、權に通ずる智の種なりと。夫れ大智は、大方便を起し。小智は、小方便を起す。方便一なりと雖も、大小實に懸隔無きこと、能はず。是れ凡聖の區分ある所以にして、覺地の不同なる者なり。夫れ唯法界の理に通達して、而る後ち、初めて平等の慈悲を生じ。平等の慈悲生じて、無窮の法門あり。以て衆機をして、眞理の門に通入せしむるを致す。是を

方便の極と云ふ。豈庸人の輙く窺ふべき所ならむや。又豈庸人の、輕々しく議すべき所ならむや。

無益論

老婆子曰く、世人の論端に、無益の二字を挾み來て。舊古の事物を毀壞するの口實とせる風氣あり。今熟〳〵思考するに、其の實際に的當せるは、甚だ尠なく。概ね一時の好尙に阿諛して、情を矯め、物を誣ゆるの弊に陷る者多きが如し。若し夫れ、有益無益の論理を盡くして。世間萬般の事物を、一々に取捨し。以て此の弊を矯正せんには、甚だ煩勞を免れざるを以て。今將た世人の、有益無益を區分するの原因に向ひて。聊か之を辨明し、其の正觀を開かしめむと欲す。若し夫れ、正觀達理の上よりして、之を論定する時は。世上萬般の施爲に就て、分明に達觀し。彼の皮相者流の、有益無益の妄差別を鎭定するに足るべき道理有らむ。

凡そ人間萬般の事概ね無益に似たる者多しと雖も。夫れにて世界は治れる者なり。然るを、今一概に之を無益なりとして、廢毀する時は。實に世には有益の物無く、一切の事は悉く廢毀に屬すべし。何となれば、誰人も五十年、乃至百年の後は、盡く衰死すべきが故に。日々衣食住の爲めに奔走するも、無益の勞なること。恰も雪達磨の爲めに、莊嚴なる堂塔を建築するが如しと云ふも。其の理無しと云ふべからざればなり。

斯かる不理窟は差し措き。人々此の世に生存する上は、物に假りて、我が用と爲さゞるを得ず。然る時は、事々物々、漸くに出來し。みづから無益と思ふ事も、暫く有益の用を成し。以て人生の幸福を、維持するの依緣となる者多し。此の義に由りて推究すれば、前の論理と反對し。世界萬般の事に、有益の名を施さば。事物一として、有益ならざる者無かるべし。何となれば、夏月の蚊雷、人をして、邪氣感冒の豫防を成さしむるの妙用ありと云ふべきに至ればなり。

是故に、一事一物の、有益無益を論ずるも。必ず先づ之が標準を立て、之が論宗を定め。何が爲めに無益なり、何が故に有益なりと明言し。以て自他の關係を詳かにし、其の計度を著實にせざれば。徒らに無稽の浮言たるを免れ難し。蓋し

其の標準論宗とは、果して何物ぞや。今之を概論する時は、日常生活の幸福を要するの外ならず。事物一々有益と名づけ、無益と名づくるも。究竟して活計の幸福、生涯の安全を謀るに就ての論宗なること、誰人も固より異言無かるべし。若し夫れ、人として食無ければ、則ち飢餓す。衣服無ければ、則ち寒凍す。居室無ければ、則ち風露を禦ぐの術無し。三の者は、人生の至大緊要にして。一日寸陰も、缺ぐべからざるの需用たり。此の需用を支辨するが爲め。忙然として、朝より暮に至るまで、奔走經營するは。智愚尊卑と無く、更に異なる事無かるべし。されば、此の數の者に就ては、有益無益の論もなく。古今同一轍にして、言說の左右も有ること無し。然り而して、人の情念は、僅かに衣食住に足るを以て、安しとせず。兄弟夫婦の親愛より、朋友鄕黨の交際あるに及びては。みづから人々の榮華を競ひ、志望愈々廣く。寵を得て獨を望み、此れを充つれば彼れを羨み。既に食を得れば、又其の食の美を欲し。既に衣を得れば、又其の衣の綺麗を欲す。家宅器物も亦然り。聲名富貴も亦然り。是に於て乎、日常施爲の上に就て、事物頓に生じ。千差萬樣、復た窮極無きに至る。遂に時好の異同と、人生の愛憎に由りて。其の迂拙と思ふ者を去り、其の便利を認むる者に從ひ。無益を棄てゝ、有益を擇ばむと欲する者は。人欲改進の方向と、人智精進の自然とに根ざして。勢の防遏すべからざる所なり。

然りと雖も、此の說の甚だしきに至りては、却て又一弊を釀成する者あり。彼の進步轉遷の際に當りて、世界流行の說に雷同し。其の始めや、狂を矯めむと欲して、漸く直に過ぎ。終に狂に回るが如く。概ね舊を棄てゝ、新に就くを事とし。舊き事は、一概に無益なりと、妄想の愛憎に墮するに至る。蓋し一心未だ定まらずして、事物交々前に生ずる時は。必ず好愛中に亂れ、毀譽外に鬪ひ。心目眩惑して、之を取捨するの權衡を失す。故に其の好む所に於ては、日に其の美を求め。其の惡む所に於ては、日に其の醜を尋ぬ。日に其の美を求むれば、美所目前に集り。日に其醜を尋ぬれば、醜所心頭に浮ぶ。此の理に依りて、甲乙の醜美天淵を隔て、新故の好惡偏黨に陷り。終に時樣の轉遷に隨ひて。舊物を見ること、弊屣に均しく。新物を望むこと、寵妾に殊ならず。好尙變易の勢は、知るも知らざるも、一口に雷同し、一意に熱心し。汲々乎として、其の全力の、舊慣を離るゝに罄盡

し。而して損害の實際と、生活の幸福安全との主點に於ては、却て關係無き者の如し。斯かる偏黨偏頗の有益無益は。唯に好尙の變ずるものにして、無稽の妄言に同じと云ふも不可無きなり。

看よ、世人の好尙に隨して、事物の有益無益を論ずるは。猶兒女子の衣服に於けると一般なることを。喩へば多年流行せし染色は、今年既に廢せられ。去年貴ばれし縞柄は、今年反て賤まる。是れ固より身體に關するに非ず、寒暑に便するに非ず。唯時樣に轉化せられて、耳目眩亂し、心思反覆して、好惡其の間に生ずるのみ。耳目一たび亂るれば、惡聲も好聲となり。美色も醜色となり。心思一たび亂るれば、幸福も禍害と思ひ。恥辱も榮耀と認む。狂たり痴たり、又何ぞ言辭を勞せむ。然りと雖も、苟も人として、幸福たる所以を知らず。徒らに時樣の好尙にのみ隨逐せば、如何なる禍害を招きて、生活を害するも亦知るべからず。豈愼むべき事ならずや。

今や世上に流行する所の、無益說を證せむに。舊來我が國の風俗は、四時の節序、寒溫の季候に從ひて。一歲中に五節を撰び。上巳端午の日を以て、親戚朋友、鄕黨隣里、互に相聚りて宴會し。壽を祝し、歡を極めしも。今時は無益なりとて、都鄙共に之を廢するに至る。偶々僻陬に、此等の事殘りたるも。都市の人、舊弊なりとして、嗤笑罵詈する勢なり。看よや、上に論ぜし如く、人生百般の行事は、全く生活の幸福、自他の安全に外なきが故に。縱令好尙は、時に從ひて移らむと欲するも。幸福を願ふの念は、易はるべからず。抑も幸福とは、果して何事ぞや。人々一日の食する所は、一升の飯に充たず。一歲の衣る所は、三襲の服に過ぎず。而して其の居處は、膝を容るゝに足れりとして。猶ほ且夙に起き夜はに寢ね、以て自家を經營する者は。豈父子昆弟の親み有り、鄕黨朋友の交り有りて、時に相會し。歡を共にし、勞を慰し。頤を解いて、談笑せむと欲するが爲めならずや。若し然らずとせば、更に何事か、人生の幸福なるや。子孫の爲めに、產を營むとせば。子孫は父祖の資に藉りて、却て父祖の無益としたる事に費やさむ。國民の爲めに、財を殖すとせば。徒らに素餐の人を培養するのみ。且夫れ無益の名を施して、事物を廢棄せば、何事か、世間に有益の實を殘さん。途上相逢ふて禮を行ふも無益なれば、接禮廢すべし。人家に入りて、寒溫を問ふも無益なれば、應答廢

すべし。襤褸にして、寒を凌ぐに足れば、錦繡も廢すべし。瓦缸敗盞、用を辨ずるに足れば。玉盃漆器も廢すべし。茅屋破壁も、風露を蓋ふに足れば、綺席玉樓も廢すべし。野蠻朴陋も、身を終ふるに足れば、文明開化も廢すべし。此の如く推究する時は、各自の生活も。終に天地間に無益なれば。死の勝れるに如かざるも、知るべからず。夫れ然り、故に人として、幸福の何物たるかを審かにせず。徒らに世の好尚に連れて、總べて物事を無益として廢毀せば。我か躬も、殆ど生きて甲斐なき場に至らむ。

試みに看よ、汝が五十年の生命は、朝菌蜉蝣の、渺々たるが如きを以て。天地に俯仰し、萬物に接遇し。其の中に於て、姑く取捨分別に競爭し、苦樂悲觀に從事するも。一息僅かに止めば、昨夢の迹無きに同じき事を。抑も世人の好惡常無く、取捨定まらず。情慾時に起りて、喜怒乍ち變じ。事物是非の爲めに、侵亂せられて。正觀に住する能はざる所以のものは。端的に本心を失して、みづから知らざるに由るなり。本心一たび失すれば、客塵妄想縱横馳騁し。妄より妄を出だし、迷より迷を重さぬ、生死の何事たる自己の何物たるかをも知らず。斯かる愚蒙の地を以て、夢中に言說を勞し、臆測推算を逞らすも、曷ぞ事物の實際を盡くさむや。然らば則ち、無益も眞の無益に非ず有益も眞の有益に非ず。纔かに皮膚の外相を爭ふのみ。若し夫れ、眞の有益を知らむと欲せば、自己の本心に求むるに在り。自己の本心を求めむと欲せば、佛氏の正說幸に存せり。試みに就て見るべきなり。

眞如解

眞とは不二なり、不二とは無二と同じからず。無二は、即ち雙ひ無きの義。又物之に亞ぐべきの義なり。故に今不二の說を辯明して、以て其の眞義を知らしむ。譬へば水の眞性を指すが如し。散じて雨となり、雲となり、雪となり、霰となり、聚りて河海沼湖となるも。全く是れ因緣所成にして、嘗て其の水の眞性を變ずるに非ず。又其の清濁暖冷より堅輭動靜に至るまで。同じく皆因緣所成に據りて、其の相を變ずるに過ぎざるなり。是れ則ち、水の眞性不二なるに由る。夫れ然り、而して其の諸因緣に據りて、應化自在なるも。亦是れ物の眞にして、敢

て其の本分を枉げ、其の性情に戻るものに非ず。何となれば、是等千形萬狀、唯是れ因緣に依りて、應化すと雖も。一切の物、總て其の眞を失はざること。猶ほ他の金石を採りて、水の諸相の如くならしむること能はざるが如きなり。是れ則ち、物々其の眞性を保ち。萬緣に應じて、其の形を變ずるも、其の眞を欺かず。變ぜざるも、其の性を枉げず。畢竟其の變不變を問はず、而して萬物の眞性、湛然として不二なり。其の不二なるが故に。敢て其の眞性に於て、變不變有ること無し。

如とは無作なり、無作とは、無業と同じからず。無業とは、因無く緣なく、力無く感無く、究竟不變の謂ひなり。若し如にして、究竟不變ならば、何を以て能く變ずるを爲す。如にして、究竟變ならば、何を以て能く變ぜざるを爲す。故に無作の義を說明して、以て如の義を知らしむ。譬へば動靜の如體を指すが如し。動若し無作なれば、必ず靜なり。靜若し無作なれば、必ず動なり。如何となれば、作として以て之を言ふときは、動に作力あれば、靜にも亦作力無かるべからず。若し夫れ動體にのみ作力ありて、靜體に作力無しと云へば。必ずや眞如の本體、究竟靜止に位せるものと言はざるべからず。網々たる乾坤究竟靜止に位するときは。千品萬類、如何ぞ能く動作を生ずるを得むや。譬へば、人間がみづから動き、みづから言ふ。而して眞如の本體、究竟靜止に位すと云はゞ、其のみづから動き、みづから言ふは、果して、是れ何物ぞや。是故に、如體は動靜無し。而して無作にして、能く動靜する。是れ之を動靜一意と云ふ。動靜一意、是れ之れを如と云ふ。是故に、如なる者は、無作なり。無作なるが故に、能く動作して。而して如體に背かず。

蓋し天地の間、千品萬類多しと雖も。盡くこれ己れが眞性を枉げず。己れが如體を紊らず。直に是れ眞なり。眞に是れ如なり。人徒らに情識に謬まられて、委曲計較を用ひ。强て他をして、己が意度に合せしめむと欲す。故に如々揀擇して、如々得ず。如々度量して、如々失す。悉く是れ己れが分別に苦みて。みづから迷ひ、躬づから失するも。敢て天地萬類の眞如體に於て、毫も缺損することなし。

破邪顯正

老婆子曰く、儒に非ざる者は、之を異端と名づけ。佛に非ざる者は、之を外道と云ふ。各家みづから、名言句義を異にして、排斥攻擊其の妄信する所に溺し。相互に搏噬して、止まずと雖も。之を要するに、彼此の邪見。徒らに其の慣習を主張するに過ぎざるなり。此の如きは、我れ之を佛中の外道、儒中の異端にして。而も瞿曇仲尼の罪人なりと云はむのみ。

試みに思へ、彼の瞿曇の思議する所を以て、みづから佛法を建立し。仲尼の學術を以て、敢て儒道を作爲する者と云はゞ。豈他の瞿曇仲尼ならざる者も、其の思ふ所と、學ぶ所とに就て、彼の瞿曇仲尼と、其の建立作爲を異にし。以て教を斯の民に爲すも、何の不可か有らむ。如何となれば、彼の瞿曇仲尼が建立作爲は。特に彼れが自家一分の取捨に歸するを以て、姑く之を一家の私言と爲すことを得るも。安ぞ天下の公道にして、必ずしも人々の安住すべき至法と爲すべけむや。然るが如きは、我れ敢て彼れに與みせざるのみならず、我れも亦みづから我が意

を以て、我が法道を建立作爲し。以て儒を異端と呼び、佛を外道と名づくるも。彼れ得て我れを尤むるの道無かるべし。

若し夫れ覆載の間に於て、おのづから至大至道の存する有りて。苟も人爲の得て建立すべからざる者有りと爲さば。彼の儒と稱し、佛と稱するも。豈獨り之を私して、其の門流家脈に非ざる者は、其の是非を問はす。一概に異端なり、外道なりと稱呼し、力めて排斥邪觀するの理有らむや。況や區々の名字言說に就て、其の爭鬪と、搏噬とを逞うするに於てをや。是故に、佛者の佛說を妄信して、他の是非を顧みず。儒者の六經を固執して、他の正邪を省せざるは。之を佛中の外道、儒道の異端と號ぶも。彼れ得て逃免すべきの術無かるべし。

抑も彼の瞿曇仲尼は、何等の實義に由りて、爲めに其の法道を建立作爲せしやは、暫く措て論ぜず。今將た單に、其の說く所の者に就て、之を視れば、未だ異端外道の妄說たるを免れざるなり。何となれば、凡そ彼の異端外道の、縱横其の說を作し、以て斯の民を迷惑せしむるもの。其の建立の根底する所、宛も一轍に出でゝ。其の機軸を同くするを以てなり。看よ一切世界の所作を觀察して、能造主神を

妄認する者と。生滅有爲の現相を觀察して、眞如法體を妄認する者と。果して何等の差別か有る。人に由りて天道を立し、有爲を認めて無爲を立し。死を視て常を說き、生に因りて斷を說く。其の言說する所に於ては、彼此相同じからざる者有るに似たりと雖も。是れ特に名言の異同にして。之が建立作爲を爲すの根底に至りては、毫も殊なること無かるべきなり。蓋し人々其の見聞覺知に反對して、其の未だ見聞覺知せざる所の者を妄定し、以て妄想臆測を恣まゝにする時は、何者か汝が臆測に相應せざらむや。佛土を念ずれば、佛土生ずべし。天國を觀ずれば、天國生ずべし。乃至一と爲さば、孔老は支那の如來なり。耶蘇は猶太人衆の悲仰より生じ、拔苦與樂の爲めに、躬を刑架に置きしと爲さば、是れ全く觀音薩埵の化身なり。

不思議辯

老婆子曰く、世の無智文盲なる者は、概ね己が分別了解し能はざる者に於て、妄りに不思議の名稱を蒙らしむ。今此の名稱の出處を推考するに、佛典中に於て、屢々之を認得するのみならず。凡そ佛氏の說たる、往々常人の、得て了解し難き妙理あるを、以て、斷じてその出處を、茲に證徵するも、敢て不當の觀に非ざるべきを信ずるなり。若し夫れ、出處の果して茲に起源せざるも。彼此の稱呼する所に於て、その名を同くして、其の實を異にするを以て。世人動もすれば、妄認臆測して、其の正邪を混視し、其の虛實を錯亂し。遂に佛氏の正說をして、妖怪不經に歸せしむる者有らむ事を恐るゝが故に。今將た彼の誤謬者の爲めに、勉めて之が異同を辯明し。彼をして、醒悟せしむる所有らむと欲するなり。

大凡そ佛氏の所說に於て、萬物の實義を究索するに當りては。必ず思議分際と、不思議分際との別を立す。思議分際とは、因緣果報輪廻一定の法を云ふ、不思議分際とは、法性不二、眞如平等の理を云ふ。今此の分別に就て、其の大意を解說する時は。思議は、思慮分別の、固より了解し得べき部分を云ふ。而して不思議は思慮分別既に絕盡し、苟も覺者の知見に非ざるよりは、之が妙理を究盡することは能はざるの部分を云ふ。是故に思議と云ふも、不思議と云ふも、畢竟諸法の眞實妙理を正觀して、之が實際に體達するの階級なれば。假令目前枯木死灰の、枯木

死灰たる所以を觀察するに於ても。亦必ず思議分際と不思議分際との階級なきを得ざるなり。

此の如き思議不思議の分別は、佛氏公正精微なる眞說にして。毫も妖怪奇異の境に涉らざる者たりと雖も。世人稱呼の習慣により、其の言辭の同一なるを以て。遂に之を妄認して、或は神變不測の思ひを作し、或は荒唐不經の毀りを爲す者あるに至る。俱に是れ己れが不思議と思惟する所の者を以て、佛氏の所說も、亦此の如きものなるべしと比擬し。其の公正精微の實を、誣妄する者に非ざるを得むや。

今や彼の不思議分際に屬する法性不二、眞如平等の理を說明して。世人の妄認を論破し、一切世間の事物を、明覺せしめむと欲するも。固より容易の業に非ざるを以て。暫く觀察實理の學に於て、不思議と認むべき分際を論定すべし。凡そ世人の視て以て不思議となす所の者は。其の實未だ不思議とするに足らずして。其の敢て不思議とせざる所の分際に於て、却て不思議の實を存するなり。如何となれば、世人の日常履踐して、怪まざる所の者は。畢竟見聞覺知に狃れたるまでにして、固より物我の性情を盡くし、之を分別了解せし者には非ざるなり。若し一旦思議の見を起して、何が故に我れは此の如きぞと云ふに至りては。凡そ尋常日用の物と雖も、皆悉く不思議分際に屬せざるを得ざるのみならず。其の之を思議する所の、我が念慮なる者も、亦遂に不思議の觀に措かざるを得ざるべし。

夫れ人暗夜に方りて、未だ曾て見狃れざる所の物を視る時は。忽ち驚きて、不思議の念慮を生ずれども。平常知見する所の諸物を望みては、決して之を不思議となす者有ること無し。又卒然奇異の聲を聞く時は、必ず以て不思議と爲せども。家畜籠禽の聲を聞きては、更に之を不思議と爲す者有ること無し。是れ畢竟己が耳目の狃習せざる所にのみ、不思議の觀を生じ。遂に思議分際に屬する者をも、併せて奇異妖怪の思ひを作すなり。又其の聞見の狃習する所に於ては、恰も分別了解し得て。全く疑惑する所無きに似たりと雖も。是れ即ち慣習常を爲して、自己心に異念を生ぜざるまでにして。未だ思議不思議の觀察に於て其の實際に體達せしには非ざるなり。故に其の甚だしきに至りては、物影を見

て驚愕し。聖音を聞て、畏懼し。以て不思議奇怪と爲す者有り。噫此の如き人こそ、殆と不思議人とも名づけて可なるべけれ。然りと雖も、佛氏の說には。彼の顚倒人を以て、尙ほ未だ不思議となさず。安詳徐々として、說明誨諭し。其の妄見を辨破し、漸く正法に住せしめむと欲するなり。抑も正法に不思議無し、其の之ありと云ふは。惟ふに學人の爲めに、思議不思議の分別を爲して、事物理會の階級を示すのみ。

是故に、世人の不思議と名づくる所は、即ち妖怪奇異、凡そ見聞に狃れざる所を以てせり。故に其の不思議たるや、人々一樣なること能はず。愚者の不思議とする所は、智者之を嘲り。怯者の不思議とする所は、剛者之を笑ふ。見聞に廣狹あれば、智識に明暗有り。腕力に勇怯あれば、妖怪に大小あり。是故に、昔や不思議多く、今や不思議鮮なし。今を過ぎて已往、見聞益々精く、人智增々進まば。遂に不思議の事無きに至らむ。是れ他無し、見聞に狃れざる者を、指して不思議とするを以て。見聞熟して、不思議滅し。因果を知らずして、驚愕せし故に。因果詳かにして、驚愕亡ずるなり。是に由て之を觀れば、世人は、思議不思議の際に於て知解の定則あること無く。卒爾に物に接して、妄呼妄稱するのみ。故に之れを觀察實理の點より論究する時は。此等は最初より、不思議分際の義に非ざるなり。

斯なる無稽の言說を以て、佛氏の精微なる學を妄誣し。之を妖怪奇異と、同視する如きに至りしは。世人膚淺の識見に根ざすと雖も、其の實は之が因緣無きに非ざるなり。請ふ其の實證を論明せむ。後世の僧徒、經論の文句に拘泥して、實義に體達する能はざるを以て。思議不思議の分別を知らず。或は博學强識の稱有る者と雖も、概ね名言上の理窟に、汲々たる人多くして。實行躬踐の人實に寥々たり。矧や其の餘の、糟粕僧流の如き。古人を賣り、以て口を餬するに過ぎず。其の種類、日に天下に蔓延して。盲より盲に傳へ、萬口同談、みづから其の師を妄誣せり。此の因緣を以て、今日の人、苟も佛氏の名字だに聞く時は。直ちに指して妖怪の說話と認定し。愚者は妄りに惑溺し、智者は唾して排斥す。是れ豈僧徒の罪と云はざるを得んや。然りと雖も、佛氏より之を見る時は。彼の信する者も、排する者も、及び誇說する者も、俱に門外漢たるに過ぎず。而して佛氏

は、おのづから公正精微の眞說を存して、巍然卓立する所有り。

凡そ事物、其の然るを知りて然る者は。則ち思議の部分に屬する者にして、敢て疑怪すべからざる所たり。謂はゆる此の如きの因を以て、此の如きの果を得。此の如きの緣を以て、此の如きの因を生長すと云ふの類、是れなり。故に此の部に在りては、勤めて智力を鍛錬し、事物の因果を詳察し。以て自他の福利を開き、人生の榮華を增さゞるべからず。如何となれば、若し人思議すべきを、思議せざる時は。其の智愈ゝ昏昧に歸し。みづから甘むじて、みづから縛するの道理たるを以てなり。

若し夫れ、事々物々に就いて、其の法性不二の眞理を尋ぬるに至りては。其の然るを知らずして、おのづから然る者なるが故に。思議分別の、能く及ぶべきに非ず。因緣果報の定則を絕し、其の比例待對を得ざるを以て。愚者は勿論、世の才識有る者と雖も。未だ遽かに其の才識を以て、之を究盡すること能はず。必ず や非常の大志を發し、身心を此の學に投入し。精細工夫、能く思議分別の妄情を脫却し。而る後、始めて之を究盡すべきのみ。是れ佛氏が眞正の論說、知る者獨り其の理を知り。至る者獨り其の境に至る。世人の怪みて信ずる能はざるも、亦宜なるかな。

今老婆子は、將に不思議の辯を終らむとして、重ねて學人に告げむとす。凡そ學人たる者は、必ず不思議の名辭を挾みて、聖佛を妖怪視すること勿れ。如來の說は、汝が云ふ如き、猥褻不經の談には非ざるなり。古人言はずや、微遠幽玄にして、二乘測る能はざるが故に、不思議と云ふと。是れ其の不思議の名有る所以なり。夫れ二乘は、學道の士にして。見思の惑を斷ぜし者なれども。猶如來平等の境に、達すること能はざるは。其の法執を存するを以てに非ずや。是れ即ち諸法の體性は、固より思議理窟の能く盡くすべきに非ず。觀察學斷じて、感情を除遣し。無分別發して、其の義に體達するに非ざれば。豈其の一分をも、窺ひ知ることを得むや。抑も之を學び之を修するは。汝が應分の務めなるときは。道の明かならざる、汝豈其の責を辭するを得むや。

又世の好學の士たる者、自己が知識の疎漏を以て、妄りに佛氏を妖怪視すること勿れ。佛徒の醜跡に就て、佛を罵るが如きは。蓋し兒童小人の見にして、開明の

士の、共に齒せざる所なり。佛氏の道、豈他あらむや。即ち人々心性の本を、明らかにするの外無きなり。世の學者外物假相の理を究むるに汲々として。自己の心性に於ては、却て之を不問の點に置く者の如し。謂はゆる近きを捨てゝ、遠きを求め。本を忘れて、末を務む。亦思はざるの甚だしきなり。然るが故に、禍福吉凶の念、一旦内に動くに迨びては。みづから其の守りを、全くすること能はず。妄りに上帝鬼神等を、外に想像して。現未の冥福を托寄するの、卑屈心を醸すに至る。是れ皆、自己の何者たるを、知らざるよりして、斯かる惑ひを來せるなり。佛氏思議不思議の論說は。其の意趣殊に世人をして、斯かる謬見を脫却せしめ。正觀獨立、以て外物の抑壓を受けざらしむるに在り。而して人皆之を知らず、悲いかな。

後世其の道を業とする者も、亦其の眞に達せず。獨りみづから謬るのみならず。終に世人をして、其の膚淺の談に就て。佛氏の道、遂に取るに足らずとし。妖怪虛誕に混視せしむるに至る。今我れ佛氏の爲めに、悲しまずして。僧徒の爲めに、其の道を失するを悲しみ。又僧徒の爲めに、悲しまずして。世人の眞理を見ること克はざるを悲しむ。滔々たる天下、誰か其の惑はざるを願はざらむや。唯其の道を求めて得ざるなり。必ずや其の道あり、而して之を得ること易からざるなり。苗莠分たず、玉石並び棄つ。此の際に當りて、豈一辯以て其の惑ひを正さゞるとを得むや。之を不思議の辯となす。

斷常二見論

老婆子曰く、世人概ね吾人一切の靈働妙作を觀察して。自己の分別計度に相應せざる者あるを以て、甚だ奇怪の思ひを作し。遂に身後の方向落着に、迷惑するのみならず。現在時に於ても、冥々中に自他の禍福を明知する者有るべしと、妄認するに至れり。是故に動もすれば、鬼神上帝等を妄認し。妄りに身命を倚托して、現世未來の冥福を、祈禱する者あるに至れり。

然りと雖も、試みに思へ。吾人は斯かる不思議の靈働妙作を以て、直ちに吾人と認得するの外無きを以て。假令みづから怪み、みづから知らざるも。安ぞ之を外物に倚托し、以て現未の冥福を希望するの謂れあらむや。如何となれば、吾人

既に斯かる靈働妙作を以て、直ちに自己の本位とするも、尙ほ未だ是れが實相に明達すること能はず。況や他に假令鬼神上帝等あるも。いかでか吾人の知識せざる所を知識し。以て他の情願の向ふ所に、一々是れが福利を授與するを得むや。

今老婆は、古より斯かる妄見妄想を以て。此の人世界に、流注し來れる因緣を觀察するに。是れ全く自己心性の、何物たるかを詳察せず。又此の境界の、何物たるかを明知せざるを以て。疑惑の念頓に起り、虛妄畏怖の情識、交々横生して。みづから安むずること能はざるに根據せり。因て今聊か、斷常二見の、共に妄見なるを、論じ。人々をして、心性究竟の明理を覺悟せしめ。以て世間の迷惑を、鎭定する所有らむと欲す。

敎家宗流の異同を問はず、其の談ずる所は、概ね一轍に出づる者の如し。其中に就いて、儒敎は必ずしも、靈魂歸著の地を說かざる者の如しと雖も。然れども、其の身後の遊魂を認むるに至りては、猶ほ他の敎家と、其の見を同うせり。獨り佛敎の如きは、之を排斥辯駁し。名づけて建立常見の徒と云ひ。決して身後に靈魂の存在すと云ふ事を免さず。又誹謗斷見と云ひて身後に、心性の滅盡すと談ずる者有り。是れも亦佛の許さゞる所なり、蓋し建立常見なる者は、實際歸着すべきの地と、歸着すべきの游魂と、俱に有る事無しと雖も。姑く世人の妄念妄想を縻羈して、以て善行に誘導せむが爲めに。敎家たる者假りに其の說を建立するに、名づけし者なり。其の誹謗斷見なる者は、現に天地萬物の、如是に存在するを省みず。妄りに自己一分の邪見に任じて一切諸法の實義を破毀し。正法を誹謗するの弊害を釀すを云ふなり。

何が故に、斷常二見の、佛智見に相應せず。而して人々心性の實義に、背戾するやとの問題は。特に心性學の南針にして。正法不二の極地を、對照比知すべき明鏡とも云ふべし。故に今身後靈魂の有無を論究し、以て心性實義の如何を、知らしめむと欲するなり。

試みに思へ、人々みづから我が精神と認めたる者は、果して如何なる現相に就いて、之を明知するや。顧ふに、必ず目に色を見、耳に聲を聽き、鼻に香を嗅ぎ、口に味を嘗め、身に觸を覺し。中に於て取捨分別より、苦樂悲歡を生ずる等の靈働に就

て、之を徵證すと云ふに過ぎざるべし。若し夫れ果して然る時は、此の靈魂なる者は、此の如き靈妙なる働きの主として。假令彼の造化上帝と假想せし者と雖も。畢竟此の靈妙を、反對追想せしには過ぎざるべし。而して汝の靈魂と假想せし者と、上帝と假想せし者との同異を、極論する事は。固より此の論宗の正意に非ざるが故に、其の辯論は、暫く差措き。單に汝が假想せる如き、身後に於て靈魂の存在せざる所以の實義を明證せむ。

看よ、彼の草木の核子は、是を播植培養すれば。必ず枝葉を生じ、花を開き、果を結ぶのみならず。其の粲然なる光彩、遒然たる形勢に至る。而して徐に是れが靈働を考ふる時は、甚だ不思議なる者有り。若し之を上帝の論理に、照會例知する時は。此の花實等の靈働あるも、みづら諸緣に感覺して、盛衰變化するの主無しと云ふべからず。試みに思へ、此の花實の主は、衰枯朽敗に屬するも。汝が認むる如き靈魂心神等の者有りて、幽冥に旋轉し。又他の果實の心となりて、輪廻するの道理ありや。惟ふに必ず、彼の草木の花實は、他の衰枯朽敗に屬したる木心花心の、再たび來て、之が心主と成るに非ずして。全く老樹の因緣を、業種に相續して、盛衰榮枯する者たること。必ず實理に近からむ。如何となれば、彼れ草木の、果實を結ふに當りて、死木死草の幽神を須ちて成ると云はゞ。其の芽を發し、花を着け、實を熟するの働きも。將た之を外物に須ちて、能する者と云はざるを得ざるなり。今老婆子の正觀を以て、之を考ふるに。其の芽を生ずるは、花を著くるの因なり。其の花を著くるは、果を結ぶの序なり。而して其の核子中に、播植養成して、老樹に殊ならざるの靈妙有るは。全く老樹の業種を相續すること、猶老樹の花に由りて、實を結び。實に由りて、芽を生じ。芽に由りて枝葉を生じ。枝葉に由りて、花を生じ。終に實を結ぶの因果と、共に、其の靈妙を一脈傳統するなり。是に由りて之を觀れば、汝が謂ふ所の精神なる者も。畢竟汝が靈働の主意に就て、之を假想する者なる時は。彼の草木の論理と均しく。汝が父母は、必ずしも他の死人死畜の幽魂に假りて、汝を胎生するに非ずして。汝は全く、汝が父母の業種に相續して、生ずるを知るべきなり。

若し夫れ、汝本來靈魂の來所なく。單的に父母の業種に依りて、此の如き靈體を相續する者と知らば。亦必ず身後に於て、一塊の靈魂なる者有りて、晦冥中に存

在するの義理無きをも。例知するに足るべきなり。何となれば、汝の靈働は固より體に因りて。父母の業種を相續せし者なるが故に。體亡びて、獨り靈働の存すべき道理あること無けむ。則ち汝が靈魂と稱する者は、其の形たる、四肢五體のみ。其の靈たる、見聞覺知のみ。故に體亡び、眼耳亡びて後。汝が精神と認めたる者の、獨り存すること有る無し。

或は曰く、蓋し人の如きは、靈魂を以て、見聞覺知、苦樂悲歡等の働きを存すと雖も。彼の草木の如きは、曾て靈魂有りて、其の中に寓すること有る無し。故に其の花を着け、果を結ぶ等の靈働有るも。皆是れ造化主神の、然らしむる者にして。草木の自働には非ざるなり。故に未だ草木を引きて、以て人を例知すべからずと。吾云ふ、若し果して其の說の如くならば、只草木のみ靈魂無しと云ふべからず。人の靈働の如きも、亦造化主神の然らしむる所にして、人の自働に非ずと云ふも、不可無からむ。何となれば、彼の草木は、草木の性質に從ひて。天地の時に因り、盛衰榮枯の境を占め。未だ曾て其の靈魂有無の限界を見ず。故に汝縱令草木は言はず働かざるを以て、靈魂無く。人は言働するを以て、靈魂有りと云ふも。

彼れ是れ各々其の形容を殊にするのみなる時は。是れを以て、心神有無の實證とは爲すべからず。既に然らは則ち、汝と草木とに於て、比例を受けざるの理無きなり。

若し又、汝草木の比例を免れて、身後靈魂の存在するを認めむと欲するも。端的に汝が現在身に就いて、之を論じ。以て常見の得て坐すべからざるを辯明せむ。如何となれば、汝が謂はゆる靈魂は。身體の健疲に就いて、其の靈働を異にし。長幼の年齒に就て、其の感覺を異にし。瘖瘂の動靜に從ひて、其の有無を殊にするを見るに非ずや。現在身にして、既に此の如し。況や身後無體の時に於て。汝が想像する如き、魂體覺働の存すべき理有らむや。

復た次に、誹謗斷見を辯駁するは、又甚だ肝要の義たり。何となれば、斷見の弊害は。一切萬法を以て、自然の所生と爲すが故に。因果を撥無し、正法を紊亂して。心性の實義妙理に、抵達すべき正見を害するを以てなり。蓋し斷見の極理は、妄りに萬法の原因を臆測し。茫々たる天地は、おのづから此の如く見はれ、此の如く旋轉し。其の生ずるや、因無く。其の死するや、果無し。然り而して能く此の

如く循環する者は、即ち謂はゆる天地の妙理にして。宇宙の存する所以なり。若し此の如くならざれば。天無く、地無く、一切萬物有ること無し。其の始めや、無より生ずるが故に、生と云ひ。其の終りや、無に復るが故に、滅と云ふ。有を轉じて無となし、無を轉じて有となす。是れ即ち天地の妙理にして。天地の天地たる所以なり、と云ふに結歸するのみ。嗚呼是れ何等の道理ぞや、汝みづから反省して、自が心性を看よ。一念の生ずるも、妄生せず。一念の滅するも、徒滅せず。蓋し一念の生ずるや、其の生相は生ずるも。始めより實體を生ぜざるが故に、其の相たる姑くも住せずして。念々毀滅に屬するに非ずや。又其の滅するや生相は既に滅するも。未だ實體を滅せざるが故に、能く過去の一念を記憶相續して。未來の因果を爲す者あり。若し生は無より生ずと云はゞ、一念の生も、無より生ずと云はざるを得ず。又滅は無に復ると云はゞ、一念の滅も、無に復ると云はざるを得ず。無なる者體無し、何物か能く相續し。何物か能く生滅して。過現未來に因緣するや。物無より生ずると云はゞ、皮膚の痛癢も、無より生ずと云はざるを得ず。無なる者體無し、何物か能く之を病み。何物か能く之を覺し。

何物か能く之を紀念す。蓋し天地萬物、無より出てゝ、無に入ると云はゞ。何の因緣か有らむ。何の相續か有らむ。一生一滅、段々として。遂に汝が現在の心と稱し、我れと稱する者も、無からむのみ。

若し意念痛癢等の生滅は、單に心性の感觸覺動する者にして、肯て生滅と云ふべからずと云はゞ。吾人汝に問はむ、汝が皮膚を去れば、痛癢冷暖有ること無からむ。汝が耳目鼻口を去らば、見聞嗅味あること無からむ。汝が過去の紀念を去らば、絕えて是非得失、悲歡苦樂等の意無らむ。凡そ是等の感覺は、汝が心性が、汝が身內に寓するに因て、時に隨ひ發動すと云はゞ。是れ其の心性なる者は、必ずしも肉身の故に非ずして。みづから存する所の者有らむのみ。若し苟も、心性の存する有りて。諸物に感覺すと云はゞ。縱令其の感覺すべき緣を離るゝも、みづから感覺すべき因は。永く存して、不滅と云はざるを得ず。此の如きは、安ぞ身後に於て、心性の無に入るを見むや。

是故に、汝有と云はむと欲するも、心性は有ならず。無と云はむと欲するも、心性は無ならず。常と云はむと欲するも、心性は幻相轉變して假想に相應ぜず。斷

と云はむと欲するも、現に因緣相續して、三世に止む時無し。玆に知りぬ、心性の實義は。固より有無を離れ、斷常を絕ち、一切妄想を離れて。淸淨本然なることを。此の淸淨妙明の體を覺するを、至聖と云ひ。其の妙明の體を覺せず、幻を認めて非幻とし。妄を指して眞とし。己れの己れたるを知らずして、妄りに畏怖狂顚するを、至愚と云ふ。喩へば、夢覺の境域を異にするが如し。夢みる時に當りては、一場の境界所見、皆妄ならざるは無し。天地も妄なり、我れも妄なり、彼れも妄なり、分別も妄なり、喜怒悲歡も、一として妄ならざる無きは。夢中の夢中たる所以なり。夢人みづから夢を知らず。迷人みづから迷ひを知らず。醒と悟とに至りて後ち、始めて向者の眞實に非ざるを知るべきのみ。

萬法は、唯心の所現なり。故に心の外に、神明無く。心の外に、佛陀無し。福を祈るも、汝が心なり。禍を與ふるも、亦汝が心なり。苦を招くも、汝に在り。樂を招くも、亦汝に在り。人々何故に吾が心の神明上帝佛陀たるを思はず。却て他の上帝鬼神佛陀を假想揑造し、又之に寄托して、以て其の冥福を請求するや。心を外にして、而して上帝神明あらば。則ち魍魎妖怪に非ずして何ぞや。心を外にして、而して佛陀薩埵有りと云はゞ。決して大聖至佛の正說に非ざるなり。吁汝世人、最尊無上の重寶とは、果して汝が一心の別名なり。試みに其の一心を取りて、之を陶し、之を冶し。假を去りて眞を存し。妄を除きて實に就き。工夫鍛錬、其の道を失はずば。大にしては大覺、小にしては小覺。淺にしては上帝鬼神、深にしては佛性涅槃。唯汝の欲する所、求めて得ざる者無からむ。又何ぞ恐怖卑屈して、外物の蠱媚を受くる事かこれ有らむ。

老婆心說　終

護國談叢

明道協會要領五則

一　我協會以護國大意明創設之義

一　宗佛法以集天下之善術

一　安心立命各任其所信之宗義

一　事皆以報四恩即爲會員實踐之要旨

一　爲會員者當捨身命財歸正法

護國大意

神勅曰人者天地之神物也蓋吾人受天地之精靈法无能受所受唯心之精靈名神物其生乎此土勝業爲因父母爲緣因緣相依而受此果體其心固無有古今之異貴賤之別但有因果而不同耳心體无相唯有因果而無人故非吾心之精靈其成惡因惡果者墮乎惡道而爲惡人其成善因善果者生乎善道而爲善人當知因果之理

變其心善惡之業異其人所謂變其心者因果即成其人也今也吾人承神明之後生乎盛德之世其爲因也正矣其爲果也善矣君民之分父子之親誠出乎天倫然而僞學時而起邪說動亂其治化有撥無因果者有破壞國體者其害殆甚於洪水猛獸夫淸泉發乎源而其末流遂濁勢使然也雖然若去其濁復其性則可以見其淸矣人心亦然非時有正人君子者排僞學破邪說而審因果正正命則何以護此神物乎吾國自蒙外國之風化來聰明利智之人相競修其學術輸其文物奇巧以奪人之耳目異說以亂人之心思其始亶出乎利國益人而今也殆有不堪其弊者何謂其弊貴外而賤內其弊一也主形器而棄道德其弊二也其人高慢而不畏神明其弊三也此三弊者足以壞吾報身報土何謂報土曰二神相謀以生國土人物授之日神日神傳之神孫神孫承餘烈開之育之教之治之正統相繼護持神物

以至今日謂之報土何謂報身曰吾人生此報土奉日嗣正統之君受其德化爲之臣民謂之報身約而言之以神種生神國由來豈偶然乎報身報土固有因果而存焉是故吾人宜排僞學破邪說而明正因正果以護此報身報土是謂之正命

明道協會要領解說

護國協會創設の事に付き、或は世人の異解を招き、或は會員に列する人にも、其要領を得ざる者なきを必せず。現在諸君は、深く佛道を修し、固より誤解ある無しと雖も、今自他の爲め其要旨を約し、諸君に對し之を講明す可し。

今之を講明するに方り、先づ文字のことをいふ可し。凡そ文字の用は、多方なりと雖も、詮する所は、人の思想の割符なり。故に人の思想各々異なる時は、文字の割符、其眞實の媒介を爲すに足らざる事あり。(是れ形而上者に就て云ふ、形而下者に至ては、名字と形器と現然たれば、文盲人たるも、其割符を誤ることなし)是故に學問上の解說は、必ず先づ其名字の出處と、變化して用ふる意味とを能く正し、人をして、其割符を誤認せざらしむるを肝要とす、然らざれば、大なる間違を來たすことあり。佛敎に弑父害母といふことあり、是れ生身の父母に非ず、無明の父を弑し、愛欲の母を害して、成佛すと云ふ事なり。其他學問上に於て、文字の變通甚だ多し、然のみならず、世人の或は文字を雜用し、漸々之を誤り、終に本義の所在を失ひ、又は名字適當の思念なく、徒に自己の臆測に名くることあり。例して之を言へは、近時我國人の唱ふる文明開化の四字の如し。西洋の事は、一概に開化なり、文明なりと爲すあり、又は其學術のみ、開化なり、文明なりとし、又は其學術の中に就て、此說こそ開化の說なれと、思惟するもあり、又は舊を厭ひ新を悅ぶを以て、文明なり、開化なりと爲すもありて、人々の思想一樣ならざるが如し。又は儒道の仁義の如き、古へは至て平易なり、人皆人の人たる當然なりと思ひしも。後人の思想漸く變ずるに從ひ、其文字は其思想を離れ、其意味を失し、周末に至りては、人情に近からざる迂遠なることに思ひなしたり。故に孔孟は、此正義を明し、以て人道を正さんと欲し、之を解釋して曰く、仁義は人に遠からず、仁遠からんや、我

299111

れ仁を欲すれば斯に仁至ると、又仁は人也、又仁は人の安宅なり義は人の正路なり、又仁の實は、親に事る是なり、義の實は、兄に從ふ是なりと云ひ、其他道德を以て至近なるものとし、人の爲めに教諭解說したれども。仁義の字は、人の思想より驅逐せられ、大に迂遠なる物と思ふ感觸を破ること能はず。數百年の天亂、終に救ふ可からざるに至れり。此時に當り、仁義の二字を捨て、別に文字を制して敎ふ可からず。又當時の人の、好て道とする道を、其儘仁義なりとも爲し難し。譬へば攻伐を事とし、武勇を以て、功名と爲す人あるも、遂に人を殺を以て、仁義と說く可からざるが如し。是れ實に人文の一大厄なり。されば文字の亂れは、人の思想の亂れなり、故に文字の義を明かにし、人の思想を呼起して、之を正し之を明かにするは、即ち世の文明を致すの一大事なり。余は今文字と思想の關係と、最も甚しきことを略陳し、然る後ち、一々文字の分解を爲し、以て之を講明すべし。

一護國協會　我協會は、其創設の義、甚だ漠然たるに似たり。而して今之を論窮する時は、甚だ明了なる分界あり。苟も道に志す者は、其正義を誤らんと欲するも得ざることなり。易に形而上者謂之道形而下者謂之器とあり、即ち此協會は、斷然形而上者を修むるに限るとなり。而して此分界の明了なる上は、彼の護國と云ふ無形の國は、何處に在る。其國を護るは、何の法を以てすると云ふことを、明かにせざる可からず。今諸君に對し、略して之を講明せん。此國と云ふ義は、即ち佛經に所謂佛土、法土、化土、報土と云ひ、又は穢土、淨土と云ふ。多くは土と稱し、又は國とも說けり。此國土は、衆生の因果を以て、之を認む。而して今我が稱する國土も、我日本の因緣に就て、認むる所の報土を謂ふなり。其法土、化土、報土と、名は異なれども、其實は同物なり。正法を以て建立する故に法土と云ふ。德化を以て建立する故に、化土と云ふ。因果を以て建立する故に報土と云ふ。別に佛法と云ふ夢を見ざるかぎりは、諸君亦必ず此實義を悟るべし。故に佛法と王法と、一般なりといふ。或者は云はん、現在の日本國土を指て、強て之を無形上の報土に歸するは、偏見に非ずやと。此疑ひ、一應其理あるに似たれども。凡そ人たる者、其心に、吾はかゝる國土に生れ、かゝる家に生れ、かゝる因緣の上に生れて在ると云ふ識別なければ、全く畜生なり。如此き人は、必ず思惟せん、吾は天地間に生れたり、又は偶然かゝる所に生れ來れりと。其思ふ心は、直に報土を離れ

たる幽靈なり。此幽靈は、內外、親疎、善惡、用捨を知らず、（內外、親疎、善惡、用捨は、因果に由て成るが故。）己が心任せに行じ、大に人を殘ひ國を害す。一言を以て之を云へば、此世の大惡魔なり。故に此報土の義は、實に佛道の大事なり。是れ因果實相と云ふことを信ぜざれば解し難し。然れば此無形の國を護るは、如何して可ならん。曰く、之を護るは、我身此報土に生れてある上は、此正因緣に依て、此正果報を守り、臣子の道を盡す可き者ぞと、心にひしとかけて、造次顚沛にも忘れざる、是れ即ち護國の第一義なり。又邪見の人ありて、因果を撥無し、國家の由來を誹謗し、種々言葉巧に言ひなし、人をして四恩に背かしめんとする時は。之を破し、之を排し。或は妻子、兄弟、親族、朋友等、因果に暗く、自ら此報土を護るの念なき者あれば、之を說き、之を誡むる。是れ皆護國の意なり。されば報土を失すれば、眼に日本なし、住土なし、又之に住する身分も無し。因果を撥無すれば、人は天地間に生じ、天地間に住すと云ふ外なし。禽獸、蟲魚、草木、瓦礫も異ならず。遂に惡平等、惡差別の說の起る所以なり最も恐るべし。故に撥無因果の一念は、國土も無くし、君父も無くし、夫婦、兄弟、朋友も無くする大邪見なり。されば此護國の義は、人々の一大事なり。此義明瞭ならざれば、以て日本の民たること難く、官に在ることも難く、君父に事へ、臣子の分を盡すことも難し。此一點を誤れば、大なる間違ひ出來するなり。直に此國土を亡ぼし、其身をも亡ぼすことゝなる。今時は正法衰へ、邪說の盛なる時なれば。人々此道理を辨へ、隨分手堅く護る可し。然らざれば、人の人たる道德の區域は、破るゝと知るべし。

爰に此正義と至て親しき道理あり、序に講明すべし。楞嚴經に、二種の妄見と云ふことを說けり、其一は別業妄見、其一は同分妄見なり、譬へば一人眼を病み、行燈の火を見るに、輪を掛て見ゆ。此輪は病者に限りて見るものにして、他人には此事なし。是れ別業の妄見なり。又一國或は一區域の人民、盡く日月を三つ見ることあり。空中に異類異形の者の飛行するを見るなどは。是れ同分の妄見なり。今この妄見の說に就て、之を推究するときは、全く別業身、同分身なる者ありて、其爲めに感覺する眞妄迷悟の現境あることを知るべし。たとへば一人頭痛を病むは、一人の感覺なり。而して父母、妻子、兄弟まで、其憂を同うするは、即ち同分なれはなり。推して一鄕、一村、一國に一鄕、一村、一國の同分身あり。日本國の

人一齊に、喜怒哀樂を同うする、此一齊の感覺は、即ち同分身の感覺なるか故に、猶一人の形體の如し。今や彼の異說異學を唱ふる者は、此同分を打毀つなり。是れ大に恐るべし。我が同分破るゝときは、恰も一國の上に、敵國を建たる如く、此種の人哀めば、彼種の人喜び、萬事反對に感覺を受け、半身不隨よりも惡しきなり。是故に吾人此大事を思ひ、各々小利害を棄て、我が國體たる同分を喪はざる樣に爲さゞれば、所謂無形上の一念より、終に有形上の大害を引出す事なり。是亦因果の理にして、免るべからず。因て此道德の事は、無形上に止ると、分齊を定め、其無形の道德を講究し、又無形を有形として觀察すべし。余今試に、無形上を摘出して之を示さん、夫れ人に苦樂あり、而して此苦其時を去れは皆無なり、其過去りたる後に、彼の苦は圓かりしか、方なりしか、白かりしか、黑かりしかを求めば、即ち無形ならむ。樂も亦此の如し。されば過去は、形なきが如くなれども、苦樂喜怒の形にあらはれ、其人事の同じからざることは、黑白方圓の如し。其跡に存する作業も、亦苦樂喜怒に從て同じからず。加之其無形の苦樂喜怒、盡く人間上の因緣因果を現し、過去、現世、未來の上に輪廻を爲す。此事は誠に畏るべく、而して殆と解し難き程の事なり。何となれば、人々過去に於て、見聞覺知して、自ら行ぜし事のみ心に生し、以て之が因となり、緣となり、其發するときは、かゝる因を作りて、かゝる果を結びたりと云ふ事、其人の心付かざる程の事なり。されば人々三世に因果の根柢を結ひ、善惡邪正の道ゆきなり。此事は一二年說きても盡ぬ事なれは、後來善知識に就き、修行して、其實際を知見すべし。

一我協會、以護國大意明創設之義　此條の義は、既に護國の義を講明せる時、其大略を說了せり。但し同衆規約して、此協會を取設くる發願は、護國大意と云ふ文にて明了なりと云意に外ならず。

一宗佛法以集天下之善術　佛法は不可思議なり、一言一句の能く說き盡すべきに非ず。今之を宗とする所以を、諸君に略說せん。夫れ諸佛は、一大事因緣の爲めに、世間に出現す。其一大事因緣とは何ぞや。即ち人々本具の心性を明らめしめんが爲なり。此心性は、思議不思議の境に涉り、自身他身の上に及ぶ。敎主釋迦文佛、親しく此思議、不思議、自身他身の實相を知見し。之を僅々たる因緣果報の四字を以て說き盡せり。天地の大なるも、此四字を遁るゝこと能はず。鬼

神の幽なる、人物の明なるも、此四字を道るゝこと能はず。外道衆魔の邪惡なるも此四字を道るゝこと能はず。誠に不可思議と云ふべし。凡そ人生れて、稍々分別智を生ずる時は、其心に畏怖と疑惑とを起す。其畏怖疑惑に由て、必ず不思議の境を感じ。之を思議分別し、其畏怖を去り、其疑惑を除き、安心を定めんと欲す。而して其不思議の境を、思議分別する明了ならず。所謂冷煖自知することは能はず。大概は己が心に落着せざるも、我慢我見を以て、戯論空論を主張し。或は天理と說き、性理と說き。又は造物者有て主宰すと說く、是れ皆臆說なり。其他種々の見解を下すも、到底斷常二見の邊際に墮し、少々づゝは巧拙精麤あれ共、概して言へば、妄想の委曲のみ。されば不思議の境に通達し、冷煖自知するに非ざれば、所謂思議分際も、正思量を得す。何となれば其思量する物も、己れも、悉く不思議の相にして、本來人の妄想に應じて、道理の顯るゝ者に非ざればなり。譬は醫者の、臟腑筋骨の位置、神機運爲の妙を會得せざれば、其病理を論ずるも、徒らに己の妄想と妄念とを並べ置き、種々に分別思議するのみにして、始より其實際と相關涉せざるが如し。天理は如斯なり、性理は如斯なり、造物主宰が有るに相違なしと、此一念生ずる時は、萬事萬物悉く此一念に相應して、思念せらるゝこと、恰も人の夢見る時の如し。山も河も、草木も、人も己も、其中の萬般の作業も、皆己れの妄想より起り、其妄想を種々に分別思量して、苦樂を感じ喜怒を生ず。實に由來なきことなり。されば此妄想妄念を妄信し。自ら欺き人を欺き、種々の道理を付け、樣々の議論を起し、終には目前道る可からざる因果をも撥無し、四恩を忘れ、十善道を亡ぼし、相ひ帥ゐて三惡道に墮す。余も六七歳の時、始めて生死の苦を知り、漸く不思議の境を感ず。十二三歳の時に至り、全く斷見に墮在す。以爲く斯く人の愁苦多きを見れば、神佛有て之を守護するに非ずと。又自心の心に、罪垢ありとも覺えねば、因果有て貧賤に生れたるにも非ず。生死禍福も偶然なり、富貴貧賤も偶然なり。天地日月の運爲も偶然なりと思惟し。唯疑ひの存するは、天の天外は、何の際限ありて限れるかと思ふ計りなり。されば自ら身命を輕すること土芥の如く、以爲く生れて貧賤なるは、木石の病ひなくして壽を保つに及ばすと、大邪見を起し。其れより口に忠義と唱へ、武藝を學び、立身出世の志を起す。十七歳の時より、戰場に臨み、數度必死の途を侵す。幸に先聖善友より。

勤王の大義を聽き、之に薫習して、善因緣を結ぶ。且つ心に銘ぜしは、慈父在世の時小人閑居爲不善と云ふ大學の句を以て敎誡せられ、之を記念として、罪科にも墮入ざりし。此間十年餘のことは、實に云ふべからざる迷惑なり。維新の世となり、軍も止み、世上は議論の戰場となり、因て又例の不思議の感を生じ、儒書を讀み、其說を求むるに、彼の善惡性理の說、余が心に應ぜず。以爲く天地の不思議は、釋迦も孔子も、悉く知らず。其敎は只々世の中の折合の好き樣に道理を付け、人を治めし者なり。吾こそは何とかして、此不思議を看破し、無前無後の大道を明了すべけれと思ひ定めたり。先づ不思議の第一は、自心で自心の何物たるを知らず。たとひ道理を付るも、畢竟此心の作用で付るまでのことなり。其作用を起す本源は何の面目なるかと、一念に工夫を下したれ共、中々思慮分別の能する所に非ざれば、絕て消息なし。二十三歲より、二十九歲まで、讀書を廢し、萬事放擲して工夫を盡し、其間此事の爲めに身命を捨て、十日廿日間も不眠にして、恍惚として夢中の如く、工夫裡に墮在せしこと度々なり。伊達自得翁は、禪理に通ぜし人なれば、每々其說話を聞き、我が求むる所は、佛法の禪門に在りと信じ、始めて洪川禪師に謁す。師曰く、隻手の音聲如何と、余直に見所を呈す、師大に稱嘆して曰く、卿は是れ吾門の一宿覺なりと。而して余猶見所未だ明了ならず、只不可說不可言が故に、一氣に死中に活を求めしのみ。其年の冬に至り、客と對話の序で、己が言聲に即し、脫然として桶の底の拔たる樣に見徹し了せり。後ち之を獨園禪師に證す、師曰く、子の言を聽き、身に寒毛を生ずと。見徹して見れば、仔細も無き物にて、經中に所謂の應無所住而生其心の外に別義なし。一稱南無佛、皆已成佛道なり。汝等心想佛時、是心三十二相八十隨形好。是心是佛是身作佛のみ。されど此一事を明むるが爲め、若干の大苦心を爲せり。爾後は看經照心を旨とし、事理の一致を脩し、漸く深密に至り、三世諸佛安住於擊石火上ことを知れり。今三十七歲にして、佛法は四恩を報い、十善道を行ずるの外は、一事なきことを明らめぬ。三十年の工夫を積て、四恩を知り、十善道を知るとは、誠に愚の至りなり。されば若し佛敎なかりせば、其愚も氣の付く時節なかるべし。余徒に諸君と、苦學の樣子を說話するに非す。正道の解し難く、邪見の起り易きを證するのみ。往昔釋迦文佛は、雪山の苦行六年の後ち、大徹大悟す。我等學業は怠惰に、世務は

負荷せり、故に其教あり、其師あるも、漸く一分を盡すを得るのみ。されば今時聰明利智の人と雖も、一朝一夕の工夫や、思慮分別を以ては解得し能はざることなり。又道德教法を以て、自ら說をなし、家をなして、各〻其教學の由來ありと雖も、此不思議を、親しく知見し、假令造物主宰あるも、之を目前に見徹了するに非ざれは、悉く妄想妄念なり。水中の月を認め、各〻臆測を逞するに過す。故に佛法を離れ、佛經を捨ては、思議心も亂れ、邪見も增長し、人々妄想理窟のみに墮入り、爭ひの片付時はなし。此協會は、妄想を破るの道場にして、我會員は、正知見を發得するの念願なれば。未熟の人と雖も、唯心法界と觀じ、因果實相と觀じ、佛經に隨順し、四恩に報じ、十善道を行ずへきのみ。但し天竺の名義佛法、支那の風流佛法、日本の妄想佛法に墮入らぬ樣に注意すへし。

天下の善術を集むと云は、世界の善術は、悉く佛道なり、佛事なりと知る可し。譬へば佛事を營むに、香華其他一切の供養、悉く清淨無垢の者を集め、之を爲すが如し。何となれば、此世界に現るゝ善術は、悉く法性より緣起す。佛界魔界の差別なし。ゆゑに假令外道に現るゝも、魔界に生ずるも、自利利他の功德を具し、正因正果の眞理に應する者は、實に外道邪見の所作に非す。衆魔愛欲の所作に非す。正しく諸佛菩薩の建立する所なればなり。今時の佛者は、口に佛法を唱へされは、佛法はなき者の樣に思へ共、却て口に佛法を唱ふる所に、外道あり、魔界あり。口に唱へざる處に、佛法あり、佛事あり。此事は正知見の人に非ざれば解し難し。曾て一魔王あり、釋迦文佛の前に到り、誓を爲して曰く、吾れ末法の世に於て、汝が衣を着、汝が食を喰ひ、汝が法を說き、汝が法を亡ぼさんと。實に恐るべきことなり。涅槃經には、乳藥の譬へあり、惡比丘の警めあり。又如來常住にして、外道衆魔の中に混じ、種々の善方便を以て、衆生を化導すとあり。實に今時佛法者の唱ふる物が、佛法ならは、佛法ほど、世の中に惡しき者はなしと、古人も云はれたり。此等の因緣は、眞の善智識に就て、能々聽受すべし。

善術の術は、藝とのみ見る可からず。儒を儒術と云ひ、六經を六術と云ふ、道又は法と云も同じ。天下の善不善は、皆佛道に順ずると、背くとに在り。其善は自ら佛道なり、其惡は自ら佛道に背くなり。時を撰ばず、所を嫌はず、名目に關せず、世界の中に自ら現はれてある。之を撰み之を用ふ、所謂の佛事なり。されば天下

の善不善を、佛道を以て判斷するに及ばず、と云ふ者も有るべし。是は佛道の何物たるを知らざる人の云ふ事なり。譬へば草木の如し、滿世界、所として生ぜざるなし。而して是れ毒是れ藥、是れ以て人を養ふべし、是れ以て人を害すべしと、仔細に點檢して誤らざるは、名醫なり。之を論ずる書は、本草とか、藥性論とか、種々ありと雖も。要するに之を學ぶ人に在り。彼の妄想妄念の理窟に墜入ては、所詮悉く人を殺すに至る。毒藥變じて藥ともなり、又妙藥變じて毒ともなる、世界は活物なり。必ずや活法を修せし活眼目の人にして、始めて得べし。故に佛は能く此活法を說き、彼の因緣果報の四字を以て、善惡藥毒を知るの權衡となせり。試に思へ、因果を離れては、善惡邪正は無き者なれば、善と云ひ惡と云ふも、必ず先づ其因緣を詳にし、其果報を知り、以て其精細を盡すを得べし。今略して之を論ぜんに、所謂の正因正果は、全く法性の理にして、純善なり。其正因正果を滿足する爲めの方便は、皆悉く法性の働きなり。儒に仁義禮智信と云ふも、是れ人の人たる正因正果を、保つ爲めの方便のみ。仁と云ひ、義と云ひ、信と云ふ物柄あるに非ず。特に人の所作を云ふなり。佛法にては、十善道の中に、五常の道盡く備はる。譬へば人の目にて見口にて言ひ、手にて携へ、足にて行くが如し。之に反すれば、不自由の至りなり。此十善は、此心の眞實の儘が現るゝ者にて、善方便の根本とも云ふべし。今の佛者は、動もすると、佛法の爲めには、嘘を言ふも方便なりなど云ふ者あり。以ての外の事なり。一切經の中に、如斯き說法はなし。小人は忌み憚かる事なしとは、此等のことぞ。要するに一切の善方便は、人の誠實心より發得する者なれば、畢竟して誠實なり。維摩經曰、菩薩隨其直心、則能發行、隨其發行、則得深心、隨其深心、則意調伏、隨意調伏、則如說行、隨如說行、則能廻向、隨其廻向、則有方便、隨其方便、則成就衆生、隨成就衆生、則佛土淨、隨佛土淨、則說法淨、隨說法淨、則智慧淨、隨智慧淨、則其心淨、隨其心淨、則一切功德淨、又觀无量壽經曰、今未來世一切凡夫、欲修淨業者、得生西方極樂國土、欲生彼國者、當修三福、一者孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業、二者受持三歸、具足衆戒、不犯威儀、三者發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者、如此三事、名爲淨業とあり。今日苟も佛道を信ずる者は、能々心得べき事なり。自己の妄想妄念を以て、安心を定め、我見我慢を張り、以て佛恩報謝と稱することは、誠に正法を亡ぼす惡魔なり。茲に一話あり、曾て人あ

り、余が家に來る。余護國大意を示す、其人曰く、佛法は平等なり、何を以て斯く因果を論じ、差別を立つると。余曰く、子が言の如し。佛曰、草木國土、悉皆成佛。又曰、希有哉、希有哉、一切衆生、悉具如來智惠德相、と　然れば則ち子と糞蟲と、平等にして差別なきか。客曰く、然り。余戚を作て曰く、如是は、余今子をして屎を食せしめん。客面色を變じて曰く、屎は食すべからず。余曰く、子若し之を食ふ事能はざれば、因果實相と信ずべし。彼の蟲は、彼れの因果あり、故に厠中を二天地となし、屎を上味となす。子は誠に人なり、人の因果を以て此土に生ず。若し夫れ之を撥無すれば、自ら其身を亡し、其命を喪ふ。却て彼の蟲の屎を喰て、自ら其因果を守るに及かず。其人驚て回心せり。是等惡平等の見は、佛者にも有る者なり。是故に因果は、前生より、結び來り、其因果に應じて、吾誠を盡す、是佛道なり、方便なり。佛道を亡ぼし、方便を亂るは、必ずしも外魔に限るべからず。所謂佛者と稱する者、自ら因果を撥無し、正法を誹謗す、何ぞ他人の佛道を破滅するを恨むへけんや。因緣なくては正法起らず、因緣なくては正法滅せず、畏るべし、慎むべし。

一安心立命、各任其所信之宗義。佛曰、我於阿耨菩提無所得と。凡そ安心立命と云へば、聰明利智の人は、無造作の樣に思ひ。無智文盲の輩は、大難事の樣に思ふべし。是れ共に其要領を得ざるなり。余は今佛法安心の通義を論じ、其難きに非ず、易きに非ざる譯を講明し、諸君の爲に、學道の一助に供す可し。夫れ安心とは殊更に安心と云ふ事の有るに非ず。不安心の思念なく、身口意の三業一致して、着々眞實の塲合に至るを云ふのみ。抑我が心性は、本來清淨無垢にして、一も增減する處なきを以て、我相人相を離れ、只正因緣に應じて、念々其相應を失せざれば、神通妙用、法爾として大自在なり。譬へば水性の清淨無垢なるが如し、流動しても、蒸發しても、溜滯しても、泡沫となりても、何となりても、因緣に相應し、其相を變ずるまでにして、其眞實は、守らず求めずして、隨所に失ふことなし。世間の妄想家は、殊更に安心の道理が有ると思ひ、彼れは此安心なり、我は此安心なりと、各々見識を立て、流義とか主義とか唱へ、互に妄想窟裡に住し、人我の見を以て、最勝無上の道と思へり。試に思へ、一切諸法は、人々の見識や理窟で、丸くも角にも成るものに非ず。其眞實は、從本以來、依然として眞實實法なり。假令眞實を求

め、正法を守るにも、猶一重の關を隔つ。況んや妄念妄想を以て、自分勝手に造り出し、戯論空論に於てをや。古人云、金屑雖貴、入眼爲翳と。是故に惡く安心を求むると、盡寐をして夢を見るが如く、手枕の痛みは、人に打れた如く感じ、鳥の聲が耳根に響くと、人が來て惡口を言ふ樣に感じ、悉く自己の妄念で、甚だ苦痛の夢を見る。其苦痛の境に在て、妄りに安心を求めんと欲し、種々に工夫を盡し、遂に必死の覺悟を極め、思へらく、我は此安心で斃るゝなり。此主義此流義で貴くなりと。其原因を能々詮索すると、心底に貪瞋痴慢と云ふ主人が有て、此不都合の安心を申付るなり。因て至重の身心を擧て、其奴僕と爲り果るなり。されば彼の貪瞋痴慢の奴僕は、日中に大道の眞中に飛び出し、苦し紛れに、他人に衝かゝり、大に路上の邪魔となる。實以て不都合の至りなり。昔し夏桀王は、天子なれども、是の惡安心を致さる。故に湯誓曰、時日害喪、予及女偕亡と、遂に其身も、其國も亡びたり。今時は、隨分自分勝手の理窟安心が流行し、味ます可らざる正因正果をも撥無し、正法を破毀するに至る。是れ全く不安心の上から生ずる、惡鬼惡魔の惡安心と云ふ可し。是故に安心を得んと欲する者は、必す先づ彼の貪瞋痴慢の奴僕に成らぬ樣に注意し、只其奴僕たらざる耳か、我が心王は、煩惱妄想の臣下に對し、殺活與奪の大權を行ずへし。而して此殺活與奪の大權を以て、貪瞋痴慢の煩惱妄想を駕御せんと欲せば、必ず先づ正知見の金剛寶劍を研磨き、一念一念の上に向て、自在に其正命を施し、命を用ざる者あれば、直ちに打殺す可し。是れ正命なり。故に一たび身命財を捨て、正法に歸する時は、既に立命の義成就せり、其正命の相續は、人々學道者の一大事と申すべし。

安心立命の義は、如斯單一にして、難きに非らず、易きに非ざる者なるに。佛教中往々其宗旨を異にし、其安心の樣子同じからざる者は何ぞや。是れ人をして安心を求めしむる爲めに非らず、其不安心を去らしめんが爲めの方便なり。其方便の多端なるは、人の機根區々にして、齊しく其教を受け、齊しく不安心を解說し、以て諸佛の妙法の中に生ずる事能はざるに因る。是れ教中宗旨を立て、今日宗門の分るゝ所以にして、全く佛道多方なるに非らず。譬へば病多種なる時は、藥劑も多方なるが如し。教主在世の人も、機根の區々なる事、猶今日と異なる事なし。觀無量壽經に、九品往生を說く、法に上中下の異なる有るに非らず。諸佛の

誓願は、悉く上品上生に導かんと欲すれ共、機根未熟の者の爲めに、且く下品下生の往生をも說けり。是れ止むを得ざる事なり。此等は佛法に覩達したる者は、疑ふ所なし。眞言、天台、禪宗、淨土宗等、皆是れ一佛法、大解脫の法門にして。人々の根機に應じ、因緣の在る所にして、正智見を得るなり。且つ三世諸佛の誓願は、一切衆生の佛種性を護し。外魔の爲めに惑亂憂惱せざらしめんと欲す。故に父母に對しては、子と生じて孝道を行じ、子に對しては、父母と爲て大慈大悲を行じ、乃至君臣、夫婦、兄弟、朋友と化しては、其所應に隨て、正因正果に住し、其不安心を去り、大安心を得せしむ、其神通妙現、誠に不可思議なり。經中三世諸佛の方便を說き、其不可思議の義を顯はすは、多くは此因緣なり。總して衆生の心行は、畏怖と疑惑とに因て、種々の幻境を感得し、眞實實法の上に、安住自得する事能はざるに由り。敎化の方便も種々にして、衆生の煩惱妄想の種々なるに相應して、之が解脫を得せしむ。是れ諸佛の悲願なり。譬へば父母の其子を敎化するが如し、之を戒め、之を譽め、之を威し、之を懲し、之を說き、之を導く、其方便多方なれ共、其子の成人を期する大慈悲心の外は、毫も別義なし。されば佛法不可思議なりと雖も、悉く眞實實法にして、敎主の金言は、人々の本尊に照應し、歸命三寶の一念、即時に三十二相を現し、垂手にして來り、垂手にして去る。去來の相ありと雖も、畢竟して如來の法中に大自在なるのみ。

佛法安心の大意は、如斯なりと雖も。人々の機根に應じ、宗義宗派の沙汰に打任せ、其因緣の在る處に於て、各々內證を得るとなし、更に我協會の中に於て、之を如同する時は、何れの宗義宗派を論せず、期する所は、成佛の外ある可らず。今假りに悉く成佛したる者として、之を見るときは、宗門の爭や、人我の相は、實に夢の醒たる時、夢中の事を思ふが如く、誠に取留めも無き者ならん。且つ成佛の後ち、衆生の痛苦は、彼れが自業の致す所なり、此方の世話に及ばすとて、捨てゝもおけぬは、極樂の眞中にて、又候未來永劫の間、靈寢も出來ぬ事なり。されば安心立命は、且らく出世間道として、人々の機根に任せ、我協會は、其修業の道場、成佛の道場、其成佛したる佛達が、度生の爲めに、出世する道場を護持する事が目的なれは。已得未得、成佛不成佛の分際を問はず、悉く此因緣に住し、不惜身命ならざる可からす。敎主在世は、固より宗派宗門を立せず、比丘比丘尼は、人天の機緣に應じ、濟度

せし者なり。滅後に及んで、支那日本と東漸するに從ひ、之を傳る人、專ら得力したる所を旨とし、遂に經義を主として、化導するに至る。其弊は理窟佛法となり、又變じて形容佛法に墮入る。佛法は、形容や理窟では、所詮無利益なれ共、凡そ物は久しうして弊を生じ、佛子たる者、自ら末法の世と稱し、甘じて非法に墮し。人天の導師として、人に對して五戒十善も說く事能はざるに至る。如是しても、末法は事濟むべし、一切衆生の痛苦を如何んせん。故に今日に及ては、出家學道の人に、一大正智見の導師出現して、此弊風を一洗するに非ざれば。遂に法滅に至り、一切衆生界をして、永く黑暗獄に墮入らしむべし。然りと雖も、余竊かに以爲らく、敎主制作の佛法は、出家者の正邪に由て、時に盛衰汚隆あるも。所謂正法の如きは、衆生心の中に具足して、常住不變なれば、衆生界の盡ぬ限りは、法滅と謂ふ可からず。涅槃經曰、善男子、譬如因樹則有樹影、如來亦爾、有常法故、則有歸依、非是無常若言如來是無常者、如來則非諸天世人所歸依處、とされば今日在家の人と雖も、天下に善知識を求め、能く修し能く學ぶ者は。目に佛性を見て、耳に諸佛の說法を聽く事を得べし。之を要するに、國に主法なければ、盜賊横行して、一國の人、民、盡く殘害を蒙り。敎に佛制なければ、惡比丘横行して、一切の衆生、多く魔界に墮入る。假令一人一箇の正智見の者ありとも、詮方なかるべし。故に佛制亡ぶる時は、之を法滅と云ふ、悲しむ可き事なり。

一事皆以報四恩、即爲會員實踐之要旨、此條は、實に我協會々員の一大事因緣なり。其精細は、心地觀經報恩品を讀誦して知るべし。余は今簡略に之を解說し、以て四恩に報いるの外に、天理も無く、人道も無き事を明さん。抑も今日眼前の世界は、悉く四恩を以て現成し、四恩を以て建立す。一言を以て之を云へば、全く四恩の果報なり。譬へば父祖の勤行を以て、蓄積せる資產に由て、其子孫悉く衣食し、其頭目髓腦も、亦彼の父祖の分肉餘血なるが如し。然るに世人往々此實義を悟らず、動もすれば外道衆魔の奴僕となり、甘んじて其驅役を受け、遂に四恩に報するに、惡逆無道を以てし。君父を輕蔑し、三寶を誹謗し。一切衆生を誑惑殘害ずる所以の者は何ぞや。是れ全く我愛の一念、永く慧命を絕ち、智目を潰し、因果を知らず、道德を信ぜず、遂に其業相所謂煩惱の惡鬼と化し、苦を避る爲に、大恩に背き。樂を求る爲に大恩に背き。其極は外道に入ずんば、必らず魔界に墮す

其外道に託する者は、即ち曰く、我父は天父なり、我帝は天帝なり。天德を予に成せりと。魔界に墮する者は即ち曰く、我愛は人の性情なり、此道以て我榮華を致すべし、此人以て我性命の父母と爲すべしと。方角違ひに、恩と說き、報と說く。豈知らずや、彼れ外魔の大恩らしく汝に與ふる者は、汝が君父の、汝が爲めに經營蓄積する者に非らずんば必ず一切衆生の膏血なり。其道と說き、德と說く者は。悉く戲論空論にして、天理、性理、天父、天帝等を持出し、汝が現在の君父を壓倒し。以て我報土を奪はんと欲するに過ぎず。余は實に一たび此事を思へば、悲憤胸に塞かり、諸君に對して、極論する能はず。諸君自ら觀察して、其實相を知るべし。且つ今日世間に佛法と唱ふる中にも、其名目こそ異なれ、因果を撥無し、我相人相を君父の間、生佛の間に立て、彼の外魔と全く等しき者あり。誠に可嘆事なり。諸君は、因果實相と信じ、因果無人と信じ、今日眼前の世界は、悉く四恩を以て、自他共に現成する事を知れり。されば余は區々の辯明を要せずと雖も、此條は實に我協會々員の一大事なれば、猶丁寧反覆して、老婆の親切を盡すべし。經曰、說法不有亦不無以因緣故諸法生無我無造無受者善惡之業亦不亡と、是れ佛敎の本源にして、五千餘卷の金文黃軸、悉く此僅々たる二十八字より流出せり、三世諸佛は大火焰裡に在て、常に此敎法を說き。一切人天の類は、其音聞に由て、自然に正法を信受し。惡業を離れ、善業を修む。今余が諸君に對し、解說講明するも、亦此義に外ならず。諸君試に思へ、一切諸法は、常有と云ふ可からず。何となれば、因緣を以て滅盡するが故なり、一切諸法は、常無と云ふ可からず。何となれば、因緣を以て現成するが故なり。是れ無常の義なり。此無常の世に在て、一切諸法を畢竟因緣なりと觀し。其惡因惡緣を去り、其善因善緣を求め。我が爲めに、此身此世を建立成就する者は父母なり、國王なり、佛菩薩なり。たとへば名醫の藥毒の二性を知り、其毒を去り、其藥を與へて、人をして健全ならしむるが如し。一日三時の食を以て、僅に性命を全うし、一朝一味の毒、忽ち人を殺す。古今聖賢の功德、現在君父の慈悲を以て、漸く建立成就するの身世も。其臣子たる者、四恩に背き、外道魔界に墮する時は、忽ち此世界を破壞す。されば我が君父の辛苦經營して、此無常の世に、如是き至文至明の報身報土を建立成就せる事、恰も巢卵の上に、一大莊嚴の家屋を造り、最愛の弱子を住せしめ、飲食衣服、及び湯藥までも、其生長を

致すの手段に非ざるなきが如し。其勤苦勉行知るべきなり。而して其子漸く生長して、此家業を相續し、仰て君父に仕へ、俯て妻子を養ふこと能はざるのみか。多くの惡友を誘ひ來り、相共に君父を罵辱し、家屋を破壞し、兄弟妻子に毒藥を與へて、迷惑狂亂せしめて曰く、如是は天理なり、性理なり、自然にして人爲の私に非ずと。是れ皆一切諸法は、不有亦不無、以因緣故諸法生と云ふことを知らざるに由る。試に思へ、今日の世界は、善惡相交ること、猶草木の中に、藥毒の性あるが如し。以て人を殺すべし、以て人を生ずべし。其毒を去り、其藥を與へて、之が生育を遂げしむるは、人爲の私と云ふや。故に佛敎に四食を說く、一は段食、二は觸食、三は識食、四は思食なり。段食に毒あれば、人身を失ふ。思食に毒あれば、人心を喪ふ。觸食識食は、畢竟して思食口舌齒牙の如し。我君父は、段食に、觸食に、識食に、思食に、悉く意を注ぎ。造化の妙機妙用を司とり。臣子たる者の爲めに、其藥毒を取捨し、與奪して、之が身心の生育を遂げしむ。然らば則ち、君父は直ちに我等が造化なり、三寶は全く造化の密藏なり。此眞實實法は、會員の身命財なれば。諸君と共に、生々世々の因緣を以て、之を講明すべし。

一、爲會員者、當捨身命財歸正法。此條捨身命財と云ふ事、佛敎の通談なり。道德の田地は、必ず身命財を捨て開拓すべし。會員に列なる人は、固より。其仔細を了解せらると雖も。世間の文盲の輩は、妄りに疑惑を生じ、臆測を逞うし、殊に謂れ無き樣に思ふ者も有るべし。又近時流行の道德論を主張する者の曰く、我愛は性理の源なり、我れ有て天地あり、國家あり、君父あり。我れ吾を愛するに由て、國家を愛し、君父を愛し、及び民人を愛す。豈道德に歸する者の、身命財を捨てゝ、四恩に報ずるの理あらんやと。是れ皆因果の理に昏く、道德の何物たるを知らざるに由ると雖も。此輩の疑惑を解かざれば、正法を興隆する事難きが故に。此條は、佛敎の通談なれ共、諸君に對して、大畧を講明す可し。

佛敎に魔事を說く事、尤も綿密なり。就中四魔は、魔界を、現成する原因を明せし者なり。一は欲魔、二は身魔、三は死魔、四は波旬、是れなり。此四魔の事を、能々了解すれば。捨身命財と云ふ事、道德上の一大事なる事を知るを得べし。（捨財除欲　捨身除身　捨命除死魔）所謂の欲魔は、貪欲心が深く、骨髓に粘着し、一心一念の動く度に、悉く欲魔を現す。此欲魔は、父母兄弟をも辨ぜず、只財寶の上にのみ因果を計し、爭奪を以

て、道德と爲す。一言を以て云はゞ、全く財寶の上に生ずる惡蟲なり。身魔は其始め我相を取り、我愛を生じ、我痴我慢となり、終に我見を生じ、因果を撥無し。君父を輕蔑し。三寶を誹謗す。此身魔は、因緣和合の身を認め、實我を計し、獨り生じ、獨り住し、獨り福德を成ぜし如く思ひ。大恩の有る處を知らず。甚以て不都合の大魔なり。學問技藝が出來ても、我知らず付き廻り、段々に增長し、果は君父の頭上に、泥足を置く樣になる。凡眼にては見えぬ物なれば、此身魔は、殊更に氣を付て去るべし。死魔は、死を畏れ、二六時中、肉體の番人となるを云ふなり。又守屍鬼とも云ふ。されば、とて、死生命あり、富貴天に在と云ふて、職業を怠り、身命を土灰の如く思ふは、大なる間違ひなれば。能々因緣果報の理を辨へて、只々魔界に墮入らぬ樣に注意すべし。要するに三魔は、身命財に執着するの一念より、發生する者なれば。斷然此一着を捨つ可き者と知るべし。

欲魔、身魔、死魔の三魔は、內を亂り。彼の波句は、外に應じて、一切衆生を惑亂し。以て魔界に導く者なり。されば捨身命財と云ふ事は、餘の義あるに非ず、全く魔種を離れて、人の人たる本分に住し、正因緣に應じて、正果報を守ると云ふ事のみ。

財寶に執着して、貪欲に墮る時は。見る物も、聞く物も、悉く、慾となり。身相に執着して、我愛に沈む時は、見る物も、聞く物も、悉く敵となり。壽命に執着して、老死を畏るゝ時は。見る物も、聞く者も、悉く悲しくなり。四恩に報ゆるは姑く置く、自己一身の置き處も無き事となる。故に能々心中を詮索し、彼の魔種を除き、以て自己本分の田地に住し。安心立命して、一大事因緣を成就すべし。然らざれば、今急に大病に至らざるも、既に病根あれば、必ず其病の增長する事あり。是れ惡因なり、惡緣なり。惡因あり、惡緣ありて、惡果報の無きと云ふ事は、絕て無き事なり。

熟々人生の有樣を觀ずるに、四恩の中に生れ、四恩の中に住し、四恩の中に位するも、多くは報恩の正道を行ずる能はず。現身に修羅、餓鬼、畜生、地獄の果報を感じ。自他共に、惱害して止まず。是れ全く身命財の執着心に依て、一切の善法を遠離し。相帥ゐて魔界に墮するに由る。是故に四恩を知る者は、此義を能々了解し、身命財の一着を捨て、道德の田地を開拓し。外道魔說を排し、報土報身を護持すべし。戒經曰、若佛子常應一心受持讀誦大乘經律剝皮爲紙刺血爲墨以髓爲水折

骨爲筆、書寫佛戒。維摩經曰、應觀五欲之無常、以求善本於身命財、而修堅法。と。此等の教意を、能々工夫する時は、身命財を捨てゝ、更に身命財の有る事を知るを得べし。此正義に通達する以上は、我が身命財は、全く四恩の遺體なり。四恩に報ゆる資器なり。大切に護持すべき者ぞと、心得へし。

捨身命財の事は、其義至大至廣にして。百年二百年說きても、盡ぬ事なれば、一端を擧て、佛魔の分別を解說し了れり。世人は、言句に泥み、怪事なる事の樣に思ふ者もあらん。會員たる者は、爲めに懲懲に說明して。其邪見を調伏し、此大義を貫徹すへし。是亦四恩に報ずるの一端なり。且つ人の機根區々なれば、此大義を聽き、畏れず怪まざるのみか。恰も自身の面目を見るが如く、無量劫來已に會中の人の如く思ふ者もあるへし。是れ大根大機と云ふべし。又は理に於て之を解得するも、實際未熟にして、恐怖する人もあるへし。是れ小根劣機と云ふへし。小根劣機の者の爲めに言はゞ。捨身命財て、四恩に報ず可きが、道德と氣が付けは。無上大功德なり。之に反して、知りつゝ邪見の林に入り、魔事に從事する者は其罪科は神人の容さゞる所なり。故に自ら誓て規約の中に住し、漸く自心を調伏する時は、遂に惡人の惡を爲すより易く、行住坐臥自然にして、四恩に報じ、十善道を行ずるの時節ある可し。

古人は、銘を制して自ら戒む。大學に、湯之盤の銘あり。盤は沐浴の器なり、其身を洗ふに付て、日々心の垢を洗ひ落す事を戒めたるなり。其他筆の銘あり、戈の銘あり、杖の銘あり、座右の銘あり。悉く道德上の戒めを記して、自ら省みる事なり。故に協會の規約は、全く會員の心銘と心得べし。誰れ誰れと約束したる樣に思ふは、大なる間違ひなり。會員たる者は、常々心に雕付け置く所に、善方便ありと知るへし。

和敬議

古語に曰く、君子は和して同せず、小人は同じて和せずと。此の言誠に能く、君子と小人との分際を道破す。今佛法中に於て、之を見るに。又おのづから、君子小人の二流あるが如し。諸君も能く之を思惟せらるべし。諸宗の末派に至りては、小人同じて和せざる者、往々これあり。吾等結衆の、尤も取らざる所なり、或

人は、彼等も佛法を信ずる徒なれば、猶ほ恕すべしと云へり。假令佛法を信ずるとも、小人は小人なり。佛を信ずれば、小人も恕すべし。佛を信ぜざれば、君子も恕すべからずと云はゞ。佛法ほど不正直の者は無し。余は佞佛の徒より、寧ろ排佛の徒を以て、迷惑の淺き者と思ふなり。地獄極樂の說を假りて、人の信施を求むるは論無し。佛を假り法を賣りて、みづから菩薩ぶる高慢の者は。我が協會より驅逐して可なり。然らざれば、我が協會は、小人の奸計妖術を逞うする所となならむ。

抑々今日の佛法は大概破大乘に墮ち入りたる者の如し。今其の原因を尋ぬるに。佛徒たる者、始めの志を立て、道を求むる時。多くは名利の心を以てし、又は徒らに、苦を畏れ樂を求むるに出てゝ。凡夫その儘の、貪瞋痴に相應して、大乘に理會を生じ。遂に非有非無、若しくは、色即是空等の觀門に於て。却て佛性を喪し、善根を斷じ。煩惱即菩提と稱し。彼れも法性の獨り働きなり、此れも當體なり。有と說くも方便なり、無と說くも方便なりと。浮世三分五厘の悟りを開きて。相似の佛法を說き。獨りみづから高ぶり。又は經文の一句一偈を引き、己が氣に似合せて。宗旨と唱へ、敎相を作り。理窟を並べ、我慢我見を生じ。以て人の信施を求め。相率ゐて、天魔外道の種類に墮す。諸君能〳〵思惟せらるべし。

凡そ我が道とする源底を盡くし、自覺自悟する所無き時は、佛道も魔事なり。彼の天主敎の說にも、中には理窟の取る處有るべし。佛法中にも、理窟の合はぬ處も有るべし。其の是れ何物たるかを知らざれば、共に得失有らじ。具眼者より之を見れば、兩家共に魔說と云はむ。一大事因緣は、經文句義の、理窟測定にあらず。是の故に余輩も、下手に佛法を護持する時は。恰も黑子を惡むて、瘡を好むと云ふに至らむ。さる時は、誠に以て愚痴の至りなり。彼の小人は同じて和せず、等の事も生ずべし。されば今志を立て、此の道を修せむと欲する時は。必ず先づ、其の法の何物たるかを辨じ。其の大體を會得して。初一心の踏み立てを大事に心得べし。此の如くなれば、其の修業の上、遂に果位に至るまで。必ず初一心に相應して、少分に安むぜず。一切經文を、我が修道の南針となして。究竟する事を得べきなり。

されば此の佛道は、全く何者を指して敎へし者なるかと云ふに。直ちに是れ我々固有の一心なり。起信論に曰く、法とは一切衆生の心なり、此の法は一切世間出世間の法を攝すと。佛と云ふも神と云ふも此の心の外に非ず。是と思ふも、非と思ふも、有と思ふも、無と思ふも、皆悉く此の心の變相なり。苦と感じ樂と感じ、大凡そ世間に生ずる萬般の事。此の心を離れては、說くべき事も無く、語るべき事も無く、修すべき道も無し。此の心を悟る之を佛と云ふ。此の心に迷ふ之を衆生と云ふ。是の如く信受して佛道を修するを正見と云ふ。其の他は皆邪見なり。口に佛道を修すと云ふも、心外に法を見る時は。悉く外道なり、天魔なり。次に大乘と云ふは、大は大多勝の三義を含み、乘は運載の義なり。今之を的實に約する時は、大は大心と知るべし。彼の小人は、大我の見を以て其の心を限り。誠に貪欲瞋恚愚痴の上に、世界を建立して居れり。此等は、小乘とも云ひ難し。小乘とても、人我の見は無し。只みづから彼の煩惱妄想を去る事に汲々として、未だ大心を起すに至らざる分際を云ふ。さて乘とは心性に具足してある功用に乘じて。一切の衆生と共に如來地に至るを云ふなり。

故に我が協會正依の經は。其題目に、直に此の大意を掲出して、大乘本性心地觀經と云ふ。誠に大切の事と知るべし。大根大機の者は、此の八字でも既に佛法の本分を了得することを得べし。若し精細に、心法を工夫せむと欲する人は、楞嚴經をも一讀さるべし。此の經は、全く心性を明にする修業の正道を精しく指南して有るなり。其中に、阿難若し諸の世界一切の所有、其中乃至草葉纏結まで、其の根元を詰へば、咸く體性有り。縱令虛空も亦名貌あり。何に況や清淨妙明の心、一切の心を性として、みづから體無しと。是れ我が心性は、只に佛衆生と同體なるのみか。天地山河草木も、是の心を以て性とし、體とせざるは無し。譬へば大海の水の、洋の東西を問はず、同一味なるが如し。故に心地觀經の序品に、上は諸菩薩より、下は地獄の閻魔大王、及び獄卒までも。釋迦佛の大乘心地の法筵に列し。其の演說を聽受し、各々本願を顯はせり。過日も演述せし如く、地獄の大王獄卒が、佛に嘆願して曰く。一切の衆生、惡痴を以ての故に。五欲の樂を貪り、五逆の罪を造り、諸の地獄に入りて、輪轉窮り無し。自業の因る所、大苦惱を受く。世の鐵繭の、みづから縛繩をなすが如し。唯願はくば如來、大法雨を雨らし、

地獄の火を滅し、清凉の風を施し、解脱の門を開き三惡趣を閉ぢよと。地獄の鬼も、氣の毒と思ふなるべし。是れ大乘の極則なり。一切衆生を護念する事は、佛にも限るべからず。悉く一心地より成立する者なれば、自他平等にして、大乘本性心地に非ざるは無し。今之を大船に譬へむに、船頭も、水夫も、水先も、其の中の老若男女、賢愚の人も、悉く安危を同うせり。能者も獨脱すること能はず、智者も獨樂すること能はず。一船の安危は、佛衆生之を同うせり。其中船頭等の諸役人は之を菩薩と名づく。此の菩薩は、始終に一船の安危を以て、みづから任とす。孟子の謂はゆる、大體に通ずる者なり。

然れば苟も大乘法を信ずる者は。地獄極樂、成佛不成佛の沙汰は、大乘の極則に非ずと信じ。誓て我れ此の大乘心を發明して、生々世々、未來際を盡くして。身を五道に生じ、所緣の衆生を化度し盡くすべしと、誓願を立つべし。此大願を發する時は、教理行果の法に滯らず。無所得にして、大乘の妙義を發得し。天魔外道の種類に墮せず。今時諸宗に、破大乘の風起るは。全く此の初一心の、踏み立ての間違ひより來たる者と思はる。さて佛法は、此の心地を了ずるに非ざれば。

假令教理を說き、其妙義を拆出して、表裏を盡くす如きも。空腹の時、古人の献立書を讀みて。山海の珍味を並べ立てゝも、到底餓死を免かれざるが如し。且つ大乘の海は、心地より生ずる者なれば。此の心地を觀得するに非ざれば。彼の船頭は固より、水先も覺束無き事なり。必ずや其の船は、暗礁に觸れて。菩薩も、衆生も、共に大海の底に沈淪すべし。謂はゆる俱濟の船は、俱難の船となり。見性成佛は、見性成魔ともならむ。思ふに今時、經文句義を賴み、種々の見解を生じ。遂に持戒清淨の賢聖をも、輕蔑非毀して。末世の佛法に相應せず、抔と云ふ者あり。是れ正法を誹謗し、佛身血を出す者なり。是等も、實は釋迦文佛の老婆心切が、大に後世子孫の遺傳病となりしものなり。

看よ孔孟は廣長舌者に非ざる故に。後儒の間違ひは、間違ひながら、仁義を非毀する程の大病には至らず。吾が釋迦老師は、放膽家なるに因りて、自在に說破し。彼の曲子が鞠を弄し、劍を呑むが如きなれば。大に一切衆生の見解を、錯亂混雜せしめたり。是れも錯亂混雜に乘じ、例の三界の火宅を打破し盡くさむとの方便なれども。却て此混雜は、火宅中の活計となり。愈々以て、人心を失ふに至る。

平田篤胤が、出定笑語と云へる書を著はし。法螺の吹合ひを以て、大概は糊付け、張りの佛法を打ち潰せり。一冊や二冊位の書物で、佛法が破るゝとは。さても〳〵佛の方便も、引き當てに成らぬ者なり。今時は天主教が來りて、根本から引き拔く積りの由なり。若し人々みづから心地を觀ぜず、只に言句方便の戰のみにては、先づは九負けと知るべし。他力念佛者などは、早速西方へなりとも遁れ行け。余輩は、此の心地觀門に住して。生々四恩に報じ、正法を護持する覺悟なり。

國勢考

或者余に告て曰く、今日日本の獨立は。歐羅巴の文化を模範とし、舊來の陋俗を變し。制度文物、悉く改進するを以て目的とす。此の目的は、今日に始まるものに非ず。一新以來の、政府の方向なり。既に今日に至ては、漸々改進の歩を進め、終には條約改正の期運に立ち至れり。而して此の條約改正を遂げざれば、我國の獨立を保つこと難しとす。其の理由多々、枚擧に遑なし。

且耶蘇教の事の如きは。一新以來、或は之を信ずる者を懲治し。又は切支丹邪宗門は、從來の通り、禁制たるべしと、公示せし事有り。然るに漸次其の事を廢し、今日に至ては、終に默許の姿となれり。是皆交際上より推及し、苟も歐洲各國と、交際する以上は。遁るべからざるの事とす。抑歐洲は素と教法國にして。其の教法は、彼此異同有りと雖も。概すれば、耶蘇教に一致せり。其の文化も、亦此の中より胚胎して、顯はるゝ者にして。其の法律なり、教育なり、一切の德義は。悉く耶蘇教に、根據せざるは無し。故に我國、歐洲の文化を模範として、改進を目的とする以上は。其の法律なり、教育なり、亦おのづから耶蘇教の德義を以て、之が德義とせざるべからず。加之、我國に備はれたる歐洲人は、悉く耶蘇教を奉信する人にして。文部に在て、教育を主る者も。司法に在て、法律草案を起案する者も。今度內閣顧問として、聘し來る者も。皆然らざるは無し。且其の條約改正の上に就て、之を觀るに。我が日本の改正法律は、彼の歐洲耶蘇教國の人民の、安全幸福を保護するに足る者と。歐洲各國の政府が、是認するに非ざれば。終に此の事を、承諾すべからず。之を言を換へて

言はゞ。日本の法律は、耶蘇教の德義と、一致するに非ざれば能はざることなり。

併しながら政府は、耶蘇教を以て、國教と立つるに非ず。又他の神儒佛を、排斥するに非ず。此等は全く、人民の信仰に放任するなり。

但し神儒佛の如きは。舊來亞細亞洲の道德、即ち亞細亞洲の制度、文物、法律、教育、風俗の原因を爲すものにして。今日我國改進の目的と、おのつから反對の點に在る者なれば。政府は、法律教育等の上に關係せしむること能はず。

且耶蘇教を公許し、歐洲の風俗を移し。歐洲各國の人をして、我が日本は、亞細亞洲の歐羅巴なりと心を許さしめんと欲せば。成るべく神儒佛の徒をして、耶蘇教を嫌惡するの念を惹起さゞらしめんことを要す。然らざれば、啻に政府の、改進の目的に反するのみならず。必すや耶蘇教に對し、種々の障碍を受けしめ。大に我が國家の憂を惹き起すこと有らん。

因て杞憂會、明道協會の如き者は。即此の政府の目的と背馳し、所謂國家の大害を釀出する所の者とす。然るに政府の顯官に在る者、往々此の會中に在て、

贊成する等は。前件の理由に就て、尤も國家の障碍とすべしと。

余は此の論に就て、勘考するに。或者の論は、專ら改進の主義を論じ。且外交上より、論及する者にして。其の點より觀るときは、おのつから一理有りと雖も。熟々我國全局の上に、觀察を下すときは。國家後來の安危は、今日の國是如何に在るべし。

若し此の說の如く。今日の政府は、全く歐洲の法度文物を用ひて、改進を圖り。其の法度文物教育の根元は、悉く耶蘇教より發源し。文明の道德は、耶蘇教なり。故に後來日本の道德は、おのづから耶蘇教に歸し。日本從來の道德は、吾が政府の、改進の主旨と相反し。政事上には、一切採用せざるときは。おのづから政府の關係は、自然耶蘇教を間接に保護し。之に反して、佛教なり、神道なり、儒道なりは。間接に相廢する、の勢に立至るは、必然の事なり。是皆當今の勢にして、止むを得ざるものと爲すも。之を直言すれば。今日より、日本帝國は。耶蘇教を以て、間接の國教と爲すものゝ如し。斯の如くば、おのづから國家の體勢に於て、大なる關係を生じ。錯亂紛擾、終には收輯すべからざるに至らん。余は今其の理

由を論陳するに當り。先つ或者の意を助け、左の數條を掲げ。而る後之を分析論究して、余か所見を盡すべし。顧ふに或者の持論は、必ず左の意に在るべし。

儒道は、支那の道德にして。素より吾國の固有に非ず。敢て我國の、主として守るべき德義とすべき、分に非ず。

佛道は、天竺より傳來せし者にして。方今耶蘇教の、歐洲より傳來する者と差別有る事無し。故に吾國に於て、必しも此の道を道とし。此の德を德とすべき分に非ず。

神道は、皇家の祖宗、及び國家に功有る人の靈を祭りし者にして。此等は、必しも日本に限らず、萬國おのづから此の事有るべし。

之を要するに、吾國の主として守るべき德義とては、無きものなれば。今歐洲の文化を移し、改進を圖る事。猶中古支那の文物を移し、道德を學び、風俗を變じ。以て吾國の幸福を圖りしと、毫も異なる事無からん。

顧ふに今日は、昔日の比に非ず。昔日は、徒に支那の文化を慕て、模倣せし迄にして。此の文化を移さゞれば、國の獨立を致す能はずと云ふ程の、關係あるに非ず。然るに古人は、力を大に此の事に用ひ、以て當時吾國の開明を圖れり。今日は、實に歐洲の文化を移し、改進を遂げざるときは。忽ち國家の敗亡を來すや必せり。此時に方て、區々たる古風を守り、舊慣に拘泥し。終に此の禍を免かるゝと能はざるは、所謂政略家の取らざる所なり。

且道德の如きは、大凡人類の通義にして。孔子の仁を說き、佛の慈悲を說き、耶蘇の愛を說くも、其の意必ず同じ。畢竟道德の說たる、治國平天下に非ずんば、利世安民に外ならず。

試に思へ。歐洲は耶蘇教國なりと雖も、治國平天下に於ては、世界に比類無く利世安民も、亦他の及ぶ所に非ざるにあらずや。是今日歐洲の文化を移し、吾國の改進を圖るに於て。斷然小得失を、捨て顧みざる所以なり。

此の論、一應理無きに非ざるに似たり。然れども、細心に工夫を下し、以て此の論量の當否を判定せんとするときは。先左の定規を立つべし。

所謂道德は、治國平天下の道にして、利世安民に外ならず。故に先其の國と稱し、天下と稱する者の質分を知り。又能く其の道の、其の國を利し、其の天下を

安んずるに足るべきや、否やを考量すべし。

古人の儒道を開き、佛法を弘めたるは。果して是非を問はず、利弊を計らず。勞ひ止むを得ずして、之を爲せし乎。又其の儒道の爲め、佛法の爲めに國家を損害せし乎。將た國家を利益せし乎、を審問すべし。

右の論量に就て、之を論明するときは。必ず先國家の質分を知らざるべからず。何とならば、此の質分なる者は、我が建國の昔より、今日まで、現在せる者にして。即ち此の國の命脈なり。此の命脈を斷ずるときは、人衆國土有るも、之を亡國と云ふ。文明開化も、將た何の用をか爲さん。譬へば人の其身を養ひ、其の命を保つが如し。みづから其の身を身とし、其の命を命として。而して禍福、利害、藥毒等を審かにすべし。若し夫れ身命を人に與へて、人の命を續かしめ。己れ死するも、彼れの身命は、猶我が身命なりと云はゞ。豈亦愚ならずや。是故に我が命脈質分を明かにせずして、唯彼れに模倣せんことを是れ務めば。恰も至愚の人の、禍福、利害、藥毒を審かにする能はずして、終に必死の危難に陷るが如く。必ず國家の損害を來すこと有らん。何となれば、歐洲各國に於て、各々其の國を利する事物も。一概に吾が國家を利する者と、斷定すべからず。國の命　質分、相なればなり。

思ふに我が國家の命脈質分は、彼れ耶蘇教の爲に傷害せらるゝ者にて、其の事多般なれども、今姑く其の大要を揭げて、之を論ずるときは左の如し。

耶蘇教は、獨一天神を奉して、他の神を拜することを許さず。假令父母の歿して位に在るをも、之を拜するを得ず。其故は、彼の教に奉ずる所の神摩西に誡を垂れて曰く。余外不可別有上帝。毋雕偶像。天上地下水中百物。勿作象像之。毋拜跪。毋崇奉。以我耶和華即爾之上帝。斷不容以他上帝匹我。惡我者禍之。自父及子。至三四世。愛我守我誡者福之。至千百世。

此の一條に就て、之を謂へば。恐多くも、伊勢大廟、內侍所を始め、官國幣社に奉祭ばる所の神も。皆耶蘇教の敵神なれば。此の教、吾が國に流布するの日に至らば。悉く破毀撲滅して、假す所有ること無し。今日政略家の憂慮する所は、耶蘇教防くべからず。故に日本在來の神儒佛と、軋轢を生じ。終には宗教上より、爭端を開くに至らば。尤も國家の大難なれば。務めて斯の如きの結果を、生ぜざ

らしめんことを要するに在らん。然れども、今此一條を以て論ずるときは。必ず耶蘇教をして、成るべく我國に威勢を得せしめざる樣に、爲さゞるときは。必ず此の大難は免るべからず。何となれば、彼此の神、おのづから相敵對するものにして。彼の神威勢を得るときは、我が國神必ず亡び。我が國神威勢を得れば、彼の神必ず擅にする事を得ず。全く神と神との戰爭なれば、其の影響おのづから人間上に及び。終に教法の爭亂を惹起すに至る。是故に耶蘇教の蔓延を禦ぎ、彼の奉ずる所の神の威勢をして、我が國に擅にせざらしめんことを務むるは。尤も我が國民の、宗廟社稷に報ずる一大義務と云ふべし。

耶蘇教は、獨一天神を以て、大君大父とし。眞の君父を以て、假の小君父とす。其の證は、耶蘇の言に曰く、勿レ意レ我來致レ平於地、我來非レ致レ平。乃致レ與レ我耳。蓋我來使レ人疏レ其父、女疏レ其母、婦疏レ其姑。而人之敵即己之家人也。愛レ父母過レ於我者、不レ宜レ乎レ我也。得レ其生命者、反失レ之。爲レ我而失レ其生命者、反得レ之。

此の一條に就て之を言へば、苟も子として此の教を信ずれば、おのづから孝道に悖り。臣として此れを信ずれば、おのづから臣たるの道に悖るや明らかなり。彼れ西洋諸國の如きはおのづから耶蘇教中より成立せし所の者なれば。其の父子君臣は素より、其の道を以て道とし。其の德を以て德とし。敢て異念無きが故に、おのづから其の弊害少しとす。譬へば謀反人の結盟規約は、一國盡く謀反人となりて。其の結盟規約より生ずる禍害を免かるゝが如し。今や我國に於て、其の父未だ彼の教を信ずること能はず。陛下も彼の教を信じ玉はざるときは。其の臣子たる者の、彼の教を信ずる輩は。必ず意趣相反し、歸向相背きて彼の所謂大君父なる者を以て重しとし。小君父なる者を以て輕しとし。將に十字架を負て、彼れに從はんと欲す。況や方今各國競て宣教師を派遣して、其の國の宗教を宣布す。其の教を信ずる者、若し大節に臨まば。必や力を君父の爲めに盡さずして、命を其の教法の國に委すること。火を見るよりも明かなり。彼れ耶蘇教の說く所に據れば。世界の人種は、彼れが所謂始祖アダンエバなる者の裔にして。其のアダンエバなる者は、彼の教奉ずる所の、天帝の命に背き、魔術に陷り、罪を天帝に獲たる者なり。是故に世界の人類は、悉く天帝の罪人にし

て。其の罪深重なり。耶蘇が十字架に上り、刑辟に陷りしは。世界人類の爲めに、其の罪に代て、之を天帝に謝罪すと云ふ。是に由て之を言へば、我が神國の國體を壞り、宗廟社稷に背く者に非ずんば。決して彼の敎を信すべからず。又彼の敎を信ずる徒よりして、之を見れば。決して我國の人民は、諸冊二神の生み給ふ所に非ず。其の天津日嗣も、決して天津日嗣に非ず。君民共に天帝の罪人なれば。之に侯して、其の天罰を遁るゝの外、他の道有ること無し。斯の如く耶蘇敎の說く所は、盡く吾が國體を壞り、人倫を紊る。倫理紊れ、國體壞れて。其の國の命脉を保つ能はざるは。猶人の其の身を傷害せられて、其の命を相續すること難きが如し。

顧ふに古人の儒敎を開き、佛敎を弘めしは。必ず宗廟社稷の爲めにせしこと、既に識者の知る所なり。苟も宗廟社稷を利する以上は、之を彼に取るも、即ち我が善敎なり。若し宗廟社稷を覆さん者は、假令彼れには善敎なりと雖も、我に取ては邪敎なり。其の宗廟と云ふは、吾國の宗廟にして。他國の宗廟に非ず。其の社稷も、吾が社稷にして。他國の社稷に非ず。若し其の國として、宗廟も無く、社稷も無きときは。假令人衆相集て、國を爲すが如しと雖も。未だ全き國と稱すべからず。夫の西洋の如きは、殆ど宗廟社稷の無き國にして。おのづから國を爲すの體勢を殊にせり。乍併斯の如き國は、斯の如き國にして。自然みづから爲めにしみづから重んじて、他國に雷同順從せざるの風習あり。

試に之を論ずるに、歐洲各國、其の人種を同くし、其の宗敎を同くすると雖も。各國各々國敎を定め、以て其の國を異にし。苟も相屈下せざる者あり。是に因て謂ふときは、彼が所謂國敎なる者は、我か所謂宗廟社稷を守り、其の國の精神を、一致するの規模に非ずんば有らず。

茲に神儒佛の道德は、舊來我國の陋俗弊習を爲せし者とし。今日吾國改進の目的と相反する者とし。既に法律敎育の上に於ても、おのづから政府の嫌惡する所となり。彼の耶蘇敎は、反て間接の保護を受け。漸々擴張流布の日に至らば、必ず左の國難を來すべし。

我が舊來の德義、風俗、人情等、耶蘇敎の爲に、一變せらるゝの後を豫想するに。宗廟社稷を始め、我國先王の舊典は、悉く廢れ。國體は全く變換して、謂はゞ舊

國亡びて、新國を爲す者と同じ。中興維新の意と相反すること、天壤の如き者有らん。

全國の人民は、耶蘇教を奉信すと雖も。耶蘇教中、既に宗派を分つこと、現狀の如くなるが故に。之を例せば、百萬人の中。三十萬人は、カドリック教。三十萬人はギリシャ教。三十萬人はプロテスタント教と云ふが如く、一致するの期有ること無し。啻に一致せざるのみならず。此の宗派は神儒佛の亡びし後は。必ず相頡頏敵視すること、今日神儒佛に對して抱く所の敵愾心よりは、一層甚しき者と豫想せらるゝなり。何となれば、此の宗派は。曾て歐洲各國に在ても、相容れざること、讎敵の如き者にして。今日吾國に布教する者は、おのづから其の利益を異にし。一國を目掛けて、相競て蠶食せんとすればなり。夫食盡くれば相食ふは、固より其の數なり。キリシャ教は、魯國より之を弘め、羅馬教は、佛蘭西より弘め。新教は、亞米利加、英吉利より弘め。彼の民主國たる者は、民主國たるの意を以て弘教し。帝王國は帝王國の意を以て弘教す。之を言を換て云はゞ、帝王國の宣教師は、其の政府の意を含み。民主國の宣教師は、其の國民の意を帶て、弘教するなり。其れ斯の如くんば。後來吾國の悲態慘狀、實に目を當るに忍びざる者有らん。

或者曾て余に語て曰く、日本は素より獨立の力有るに非ず。畢竟各國同士の恪氣にて今日の安寧を保つなりと。余は以爲く、其の恪氣は既に內部に入りて、宗教の上に在りと。若し其の證迹を見んとならば、今日彼の宗教者の施行する所に就て、容易に知ることを得べし。

以上論する所に據れば、吾國今日に方て、文化を改進するの急務は。宗廟社稷を護持することの、最大急務なるに及かず。何にとなれば、假令文化は、何の點に進むとも。宗廟社稷の覆沒に至るときは、實に無用の長物にして、徒爾に歸すべし。或者は、佛法も亦吾國固有の物に非ず。如何ぞ吾か宗廟社稷を護持することを得んやと云ふべし。是れ深く考察せざるの過言なり。夫れ佛法東漸の初に方て、吾が先王、深く佛法の宗廟社稷を護持するに足るべきを觀玉ひ。之を天下に弘布し玉へり。故に國分寺を、天下の郡國に置き。偏く三寶を世に施し玉ふ。天下佛教に依て、神明を畏れ、邪惡を去り、正命に歸し。民今に至るまで、其の賜を

受け。殆と二千年の間、未た佛法の宗廟社稷を害するを聞かず。時々其の弊の生ずること有りと雖も、全く其の罪は其の人に歸し。法に於ては、聊も非議すべき者無し。且其の罪の、其人に出づる者の如きは。假令佛法無きも、世におのづから亂臣賊子有るが如し。佛法中の罪人は、佛法外の罪人に比するに。其の罪惡或は幾分を減じ、殘虐に至らざる者の如し。

神宮の秘書に、寶基本紀と號する者あり。其の中に、神道佛法其の歸を同ふし。且吾國の教法は、全く佛法に依ることの神託を載せたり。曰く

十一月新嘗祭夜。神主部物忌八十氏等詔。吾今夜承太神之威命所託宣也。（倭姫命。承太神之託而宣示神主部物忌等）神主部物忌等。慎無懈。正明聞焉。人乃天下之神物。奈利。須掌靜謐志。心乃神明之主。他利。莫傷心神禮。神亟以祈禱爲先。冥加以正直爲本。須任其本誓皆令得大道者。天下和順。日月精明。風雨以時。國豐民安。故神人守混沌之始。屏佛法之息。有無之異名。心走使。無有安時。心藏傷而神散去。神散則身喪。人受天地之靈氣。不貴靈氣所化。種神明之光胤。不信神明之禁令。故沈生死長夜。闇吟根國底國。因茲奉代。皇天西天眞人。以苦心誨諭。教令修善。隨器授法。以來太神歸本居。止託宣給。

今此の託宣に據て之を觀れば、全く佛教は、吾が國教たること分明と謂ふべし。何となれば、若し國教に非れば、何の故に太神本居に歸り、託宣を止め玉はんや。太神本居に歸り、託宣を止め玉ふ所以の者は。全く佛教を以て、吾が國教とし、佛の教語を以て、太神の託宣に換へ玉ふ者なり。今論者の說く如く、佛教は吾が國教に非ず。天竺の一法なりと言はゞ、太神は既に本居に歸り、託宣を止め玉ひて後は。實に吾國の主として守るべき德義とては、有ること無く。殆と無教無道の國にして、其の時々の利口者が發する所の橫議縱論を以て、太神の託宣に換へ。以て邦家を覆がへすべし。斯の如くば、何を以てか我が宗廟社稷を護し。神慮を安め、以て今日に至らん。

余請ふ佛教の中に就て、彼の託宣に相應する所の文を擧示せん。

心地觀經曰。以佗心智能了有情意樂煩惱心行差別。應病與藥。悉令除差。又曰。以正智力善了有情心行黑白。能爲衆生說相應法。又曰。一切菩薩。若五欲境現前之時。觀察自心。應作是念。我從無始至于今日。輪廻六趣。無有出期。皆自妄心而生迷倒。於五

欲境貪愛染著。又曰。此法猶如國大樂王善能正治若順王化獲大安樂若違王化尋被誅滅。善男子三界之中。以心爲主。能觀心者。究竟解脫。不能觀者。究竟沈淪。衆生之心。猶如大地。五穀五果。從大地生。如是心法。生世出世善惡五趣有學無學獨覺菩薩及於如來。以是因緣。三界唯心。心名爲地。一切凡夫。親近善友。聞心地法。如理觀察。如說修行。自作教他。讚勵慶慰。如是之人。能斷二障。速圓衆行。疾得阿耨多羅三藐三菩提。爾時大聖文殊師利菩薩白佛言。世尊如佛所說。唯得心法。爲三界主。心法本元不染塵穢。云何心法染貪瞋癡。於三世法。誰說爲心。過去心已滅。未來心未生。現在心不住。諸法之內性不可得。諸法之外相不可得。諸法中間都不可得。心法本來無有形相。心法本來無有住處。一切如來。尚不見心。何況餘人得見心法。一切諸法。從妄想生。以是因緣。今者世尊。爲大衆說三界唯心。願佛哀愍。如實解說。

又神佛乘の中に就て。神佛一致の意を參觀すべき者を左に掲示す。

倭姫世記曰。諸法如影像。清淨無假穢。取說不可得。皆從因業生。又曰。天地開闢之後。雖萬物已備。而莫昭於混沌之前。因茲萬物之化。若存若亡。而下々來々。自不尊。又大田命訓傳曰。天鏡尊。月殿居所鑄造之鏡也。視之以無相無爲。因以爲神明之正體也。

又曰。天照皇太神。則大日靈貴。故號日天子。以虛空爲正體焉。故曰。天照太神。又豐受皇太神御鎮座本記曰。發廣大慈悲。於自在神力。現種々形。隨種々心行。爲方便利益所表名。曰大日靈貴。亦曰天照神。爲萬物本體。度萬品。又寶基本記曰。神道則出混沌之界。歸混沌之始。三寶則破有無之見。佛實相之地。神則罰穢惡。導正源。佛又立教令破有相。又曰。掃災招福。必憑幽冥。敬神尊佛。清淨爲先。

心地觀經曰。善男子。三寶恩者。名不思議。利樂衆生。無有休息。是諸佛身。眞善無漏無數大劫。云云。修因所證。三有業果。永盡無餘。功德寶山。巍々無比。一切有情。所不能知。福德甚深。猶如大海。智慧無礙。等於虛空。神通變化。充滿世間。光明徧照。十方三世。一切衆生。煩惱業障。都不覺知。沈淪苦海。生死無窮。三寶出世。作大船師。能截愛流。超昇彼岸。諸有智者。悉皆瞻仰。又曰。爾時五百長者白佛言。世尊。如佛所說。一佛寶中。無量化佛。充滿世界。利樂衆生。以何因緣。世間衆生。多不見佛。受諸苦惱。佛告五百長者。譬如日光天子。放百千光。照明三界。而有盲者。不見光明。汝善男子。於意云何。日光天子。而有過否。時長者言。不也世尊。佛言。善男子。諸佛如來。常演正法。利樂有情。是諸衆生。常造惡業。都不覺知。無慚愧心。於佛法僧。不親近。如是衆生。罪根深重。經無量劫。不得

見聞三寶名字。如彼盲者。不視日光。若有衆生。恭敬如來。愛樂大乘。尊重三寶。當知是人。業障銷除。福智增長。成就善根。速得見佛。永離生死。當證菩提。

是に由て之を觀れば、佛敎の我國に行はるゝは、全く神慮に出づる者にして。古昔先王、徒に好事の爲に爲し給ふ所に非ず。我が人民も、敢て佛に佞し、此の敎法を信ずるに非ず。要を採て之を言はゞ、佛敎に依て神慮を知り。みづから其の心の穢惡を去て、此の神物を護るに過ぎざるなり。所謂混沌の堺を出てゝ、混沌の始に歸する者なり。

或者の說に據るに、杞憂會、明道協會の如きは、卽ち此の政府の目的と背馳し。所謂國家の大害を釀出する所の者とすと。杞憂會は、吾之を知らず。明道協會の如きは、實に我輩等の發起擴張する所の者にして。全く宗廟社稷の爲に報ずる、一分の微衷に出てし者なり。然り而して此の國家に、大害を爲す者となれば。此の事を主唱する者の罪科、莫大なりと謂ふべし。余は實に此の事の、國家に害有るを知らず。啻に害有るを知らざるのみならず、大に利益する所あるを信ずるなり。何となれば、明道協會の、主として擴充する所の者は、所謂四恩十善なり

此の四恩十善は佛敎の意旨多般なりと雖も。歸する所、此の四恩十善の外に、一法も有ること無ければなり。何をか四恩と云ふ、一には父母の恩。二には衆生の恩。三には國王の恩。四には三寶の恩是れなり。何をか十善と云ふ、一には不殺生。二には不偸盜。三には不邪淫。四には不妄語。五には不綺語。六には不惡口。七には不兩舌。八には不貪欲。九には不瞋恚。十には不邪見是れなり。此の四恩十善の義は、甚深廣大なりと雖も、要するに人たる者の行ふべき正路のみ。且協會創立の意旨の如きは、護國大意と云ふ文に就きて、之を明かにすべし。

余は前段に於て、神佛一致の意を明說す。今此の護國大意を以て、之を照明する時は。明道協會は、吾が國家に大害を釀出せざるのみならず。必ず宗廟社稷を護持するに於て、裨益有る者たるを知るべし。且此の事たる、苟も我輩等が、私意を以て構造する者に非ずして。佛敎の正道に基き、此の敎法を興隆し。以て神慮に應ずるの大義たることも、分明なるべし。或者の說の如く、我輩等、國家の大害を釀成する者と爲す時は。其の主唱の一人たる余、獨り潛かに其の罪科を遁

れ。他の幾千の人をして、看すゝ〳〵其の罪科に陷らしめて、傍觀すべからざるは人間の通義なれば。余は其の罪科の在る所を、明かにせざる以上は。決して其の說を變ずべからず。若し余をして、其の過ちを知ることあらしむれば。必ず他人の此の協會に列する者をして、先づ其の罪科を遁れしめ。而かる後に非ざれば、退避すべからず。

既に吾國の國體を主とし。其の關係する所の利害を審にし。終に明道協會の國家に神益する所以を說明し了せり。今大概を結び、譬喩を以て之を明らかにせんに。吾が所謂宗廟社稷は精神なり。其の國體は、身體の如し。其の制度文物は、衣服の如し。故に其の精神を失ふて、身體を保つべからず。其の身體に相應ぜざる衣服を着するも、未だ以て身體を害する者と云ふべからず。其の西洋食を食ふも、未だ以て身體を變じて、西洋同質の人となるべからず。西洋の書を讀むと雖も、西洋人の精神と同じかるべからず。然り而して、若し吾國の社稷を重んじ、國體を護るの思念無くば。必ずしも西洋の書を讀まず、西洋の食を食はず、西洋の衣服を服せずして。啻に西洋の事を見聞し、以て其の精神を變じ。知らず識らず宗廟社稷に背くに至るは。全く其の心暗く、因果の何物たるを知らずして、終に神明の誓に背き。吾が國人にして、吾が國人たるの本心を遺失する者なり。されば制度文物、風俗習慣等も、之を改進すべしと雖も。苟も吾が宗廟社稷、及び國體に障害あることとは。一切之を排斥して、其の守るべきを守らしめざるを得ず。然らざれば、太神の託宣に所謂神明の光胤を種ぎながら、神明の禁令を信せず。故に生死長夜の闇に沈み、根國底國に吟ふ者となりて。其の歸向する所を知らざるに至らん。豈悲しからずや。

右論陳する所は、余が一片の赤心にして、他に餘念あることなし。若し夫れ余が、明道協會の副會長となりて、周旋する等は。軍人の宜しく爲すべからざる事なれば、之を止むべしとならば。是れ全く余が一身の身分上に在る事ゆゑ、余は以上の論說の正邪に關せずして。其の名目を辭し、其の行事を止むべし。而して敢て國家の害を生ぜざるのみならず、間接に宗廟社稷を護持するの道と云はゞ、余は會員の一人に列して、四恩十善の說を聽受し。又は之に財施して、報恩の一端を盡くすも、不可無きことを信ずるなり。」

明治十七年六月

護國叢談終

佛道本論

佛道本論序

劉漢之微也。流言流毒。俊顧及厨。遂禍名士。然而李杜之所風化。陳寶之所漸洽。遺賢實多。鄭玄謝該之學。孔融楊修之才。蔡邕禰衡之文。申屠蟠王烈之節。世所希覯。而司馬德操曰。識時務者、在俊傑。遂舉伏龍鳳雛爲稱首。孔蔡之徒。不得厠其際。德操之識尚矣哉。方今之世。聖明在上。治化駸駸。固非劉漢之比。是以人士濟濟。盛矣美矣。雖然至俊傑之士。則未易得也。頃日得庵鳥尾公寄其所著佛道本論六卷。徵余序。余披讀之。拍掌曰。公果俊傑之士哉。初公之在大阪。優游林園。遊遙山水。酌月醉花。必取余輩爲伴。醉餘則輒話詩論文。以蕩滌其情思。而其濟世救民之志。不能全閟之。時時漏于篇章之間。故余亦已窺知其志之所在也。嗚呼。氓之蚩蚩。不能躰聖化。錯失

方嚮忘內重外之徒亦多。然則固民志定民心。豈非今日之急務乎。公獨有見于此。是所以有此著。非俊傑之士。安能與之。夫固民志定民心。其道難矣。聖人之所以制禮也。公身立朝廷。鳳而不雛。龍而非伏。然職有所掌。官有所圉。且制禮之重。未得輒議。其唯禪乎。學而遂既詣其奧。乃唱以爲固定之具。誰謂不宜乎。唯禪味余所未嘗。而其論精微。余輩不能贊一辭。故錄嘗所窺知者。以爲之序。

南岳藤澤恒撰

佛道本論後序

我儒之與老佛。豈異道哉。聖人本天道。因人情。設五倫五常。凡百儀則。以教人。人從之則幼而育。老而逸。貴而君師。賤而臣民。寒則衣。饑則食。風雨之有宮室。疾病之有醫藥。死喪之有葬祭。各從其分。遂其欲。去禍就福。以全性命。是之謂人道。夫唯人道。故成于人爲之上。人爲之過。矯飾詐僞。無所不至。於是有老者。唱虛無自然之道。以去其弊。是故人道修。而無人爲之弊。謂之儒中之老。夫唯人道。故行于入欲之間。人欲之過。放縱沈溺。無所不至。於是有佛者。唱寂滅眞如之道。以解其惑。是故人道修。而無人欲之惑。謂之儒中之佛。然則老佛之道。自寓于儒者人道之中。人道之外。豈更有老佛之道哉。要之橫說竪說。欲使斯人去禍就福。以全性命而已矣。果然謂之佛老中之儒。亦可矣。若夫厭棄人間。而搜自然于無何有之鄉。索眞如于極樂淨土。異端耳。外道耳。道已不同。又何足與謀哉。得庵鳥尾君以勤王武功。起列顯要。固能修人道者。爲人恬淡。無他嗜好。唯好讀書。儒之與老。無所不涉。而尤邃佛學。頃者著佛道本論。欲以濟度衆生于欲海。使余序之。其說平易明白。頑姿騃童。亦能解釋。而其旨不過欲使人全四恩。四恩則人倫也。人道也。與我儒所說何異。然則君亦可謂

佛中之儒歟。乃書平生持論以質君。君其以余爲儒中之佛乎。將爲儒中之老乎。抑亦爲儒中之儒乎。是爲序。

明治乙酉仲春　　中洲學人三島毅撰

佛道本論卷之一　一名法供養

第一段

古今眞正の學士は、必ず諸法の眞理を發明し、その眞理に相應して、人間萬般の規矩を改良せんと欲す。是れ學問上に於て、甚だ緊要の事なりといへども。動もすれば戲論に流れ、虛頭に走り。實際を錯亂するの弊害もまた莫大なり。その

學問の弊害有無の兩端

故は、人々の識見、家々の宗旨は、概ね有無の兩端に滯り。諸法の眞理に、契當するこ、と能はず。大概、一己の妄見に執じて、現在世間の善惡是非を、論量確定せんと欲すればなり。

第二段

茲に一人の學士あり、說をなして曰く。我が所見によるに、諸法の眞理は、云々なり。然るに現在人間の行事は、往々此の眞理に違背せりと。此の人や、其のこれを改良して、己が論量臆度に相應せしめんと欲すること。恰も自身の疾病を除くの思ひをなせり。又一人あり、その說を異にして。其の志願は、なほ、彼の學士の如し。斯くの如く、彼此ともに己が妄見に執じて、世間を錯亂するときは。謂はゆる眞理を發見し、本末を正さんとするの禍害は。人間世界を破壞し盡すにあらざれば、止むべからず。

學士の妄見

學問の禍害

第三段

然りといへども、天地も物なり、夷狄禽獸も物なり。物には必ず本末あり、始終あり。その本始を失せずして、其の末終を治むるは。人事の最要なるものなれば、學問上の工夫は、必ずまづその本源を究盡して。其の末流を支配するを目的とす。是れ恰も、水を治むる者の、山勢水脈の形勢を論ずるのみならず。必ず水性を審かにし、その動靜の變を觀察して。これを江海に導くがごとし。故に諸法の眞理を、發明論究して。人間萬般の事務をして、其の本分を失せざらしむるは、尤も眞正學士の、一大事務といふべし。

學問の目的

第四段

是故に、余は彼の禍害を畏るゝがために。敢て眞理を究明し、本末を整頓することを、不是とせず。且つ此の事たる、たゞに學士の好事にあらずして、元來人の靈

學士の事務

人心の靈妙

第五段
黄面老子

學海の南針

第六段
二種料簡
實相因緣
因果の理

禍福を知る定則

たる、おのづから智識を具して。その智識の發達を、求むるに出づるものなれば、宜しくこれを正道の方向に誘導して。自他ともに、禍害に陷いらず。謂はゆる眞理を發明して、本末を整頓せんことを、志願するのみ。

余は曾て、佛法を宗旨として、此の眞理を、究盡せんことを勉めたり。黄面老子は、南天の末世に生れ、九十六種の外道中にありて。もろ〳〵の外道の戯論を排し、正法を演說せし古佛なり。故に其の所說、尤も分明にして。學海の南針は、後來かならず佛經に歸すること。余の信じて疑はざるところなり。

佛經にありては、本末始終を論明するに、二種の料簡を以てす。一には實相、二には因緣、是れなり。因緣は始終を知り、實相は本末を究竟す。蓋し因果の理を以て、諸法の始終を言へば。即今現在の法は、過去行業の果なり。しかして未來の輪廻の因なり。故に過去を悔み、未來の福樂を欲望するは、人の常情なれば。いかなる人といへども、必ず此の思念あるべきなり。且つ世間學士の言論は、往々これを、過去の形迹に徵し。現在のありさまを觀察して。未來は必ず斯くあるべしと、其の福禍を推測す。是れみな三世因果の理にして。諸法轉變の上に、禍

過現未の三時は時の差排

現在の脚跟下

一念以て三世を蹈破す

福を計る定則なり。然りといへども、余はおもへらく。徒らに過去を悔み、未來を欲望するときは。却て現在の法は、夢中の如く經過して。知らず識らず、窮苦の境に、心身を投入するとあらん。何となれば、過去といへども。其の經過の日に就て言へば、現在なり。未來といへども、其の經過の日に就ていへば、現在なり。過現未の三時は、しばらく時を差排して、言ふものにして。その實際は、全く現在の外にあることなし。未來極樂に生るといふも、その生るゝの日に到來すれば、欲望の念の止まぬかぎりは、なほ必ず未來ありて。またも他の極樂を望想すべし。然らばすなはち、現在の脚跟下ほど、大切なる事はなし。現在の脚跟下にして、大丈夫なれば。たとひ地獄に墮るも、さらに今日と異ることなからん。極樂に生るゝも、また今日とことなることなからん。斯のごとき人に就て、これをいへば。地獄極樂の說も戯論といふべし。故に余は斷じて現在の一念を以て、三世の因果を蹈破して。隨處に失脚なからんことを欲す。斯くいへば當今の佛者、余を目して、種々の異名を付し。外道のやうに云ふものもあるべし。余は生來佛に佞して、冥福を祈るの念は、毛頭もなきがゆゑに。これも前世の因果とお

第七段

轉變輪廻は水上の波

もへば、さほど遺憾ともおぼえざるなり。

三世因果の理は、萬物遁るゝことなし。現在の果報は、過去の因緣なり。未來の果報は、現在の果を因とし、緣に應じて、轉變輪廻す。譬へば水上の波の、漸々に推及して、一波數千里を經過し。過去は滅し、未來は生じ。その過去未來の間に於て、波の所在を、現在といふがごとし。されば、因果は以て始終を審かにし、禍福を前知すべしといへども。諸法の眞理は、必ず其の實相を究盡するにあらざれば、發明すべからざること。なほ波の始終を推及觀察するも、水性を知ること能はざるにひとし。

第八段

思議分際不思議分際禪定觀察

觀察の誤謬

三世因果の理は、思議分際を以て、これを究明することを得べし。謂はゆる諸法實相に至りては、不思議分際なるがゆゑに。禪定觀察の工夫を積むものにあらざれば、悟得することあたはざるなり。古今の學士、往々觀察の正路を誤り。諸法眞實の體性は、我が見聞覺知の外にあるものとなし。種々の臆說を造爲し、戲論空論に陷いり。遂に後來の學士をして、あひ率ゐて學道の岐に迷惑せしむるに至る。いま吾が佛敎の正宗によるに。諸法の眞理を究明するには、先づ三量

三量

體相用

體相用の比喩

を立つ。一には體、二には相、三には用、是れなり。しかして此の體相用は、三即一にして。決して體を離れたる相もなく、相を離れたる用もなし。たとへば水の體相用は、彼れ水の體、すなはち水の自體にして。もし自體なしといはゞ、畢竟して水なきなり。故に水といふものあるうへは、直に其の自性を指して體といふ。既に體あれば、必ず相あり、用あり。相は形相なり。用は功用なり。これを人身にたとへて云はゞ、體は直に人の全體をさす。しかして四肢五體、眼耳鼻口、毛髮爪齒、乃至五臟六腑までも、悉く相なり。其の相に應じて、運動作用して、功德をなす。これを用といふ。眼に色を見、耳に聲を聞き、口に味を嘗め、鼻に香を嗅ぐ等より。毛髮を長じ、爪齒を保ち、大小便利の作用に至るまで。功用ならざるはなし。正に知るべし、體をはなれて相なく、相を離れて用なく。諸法の體相用は、全く三即一なれば。現然たる萬物より、蕞爾たる塵芥にいたるまで。苟も自己を

萬物眞理を失するもの無し

欺き、眞理を失したるものは、あることなきことを。是れ即ち、諸法の眞理を究明せんと欲する者の、決定の正思量とす。

第九段

是れによりてこれを見れば、眞理を發明せんと欲するの學士は、其の眞理を他に

迷妄を除けは眞實現前

求むることなかれ。みづから迷惑を除き、妄念を去れば。眞理はすなはち現前たるべし。然りといへども、謂はゆる迷惑を除き、妄念を去り。眞理に契當すること、難きがゆゑに。黄面老子は、種々の方便を以て、教化開導せり。要するに斷惑證理は、吾が佛教の所詮なり。そも〳〵自他の眞性、其の何物たるを知らず。

斷惑證理

徒に見聞の境に、心念を勞働するは。凡夫の境界なり。其の心は境に攀緣し、念々相續して、其の始を知らず。其の終をしらず。これを始の無明と名づく。

無始の無名

無明は、暗き義なり。己が心念の光影は、還て己が心性を障へ昧まして。恰も暗中に狂奔するがごとく、諸法の眞理はさておき。自己一分の安心も、落著することあたはず。是故に、禪定觀察の工夫を假りて、先づ自己の眞面目を看破し。然るのち、諸法眞實の事理を究明するは、眞正學士の急務といふべし。

第十段　二種の惑障　思惑　見惑

禪觀の正路を求め、彼の無明を斷ぜんと欲せば。まづ二種の惑障を知るべし。一には思惑。二には見惑、これなり。見惑は、見聞覺知のために、吾が心性の理を障へられて、眞實に通達すること能はず。故に所知障とも名づく。または分別

所知障　分別起の惑

起の惑ともいふ。思惑は、貪欲瞋恚愚癡のために、吾が心性の理を障へられて、眞

煩惱障　俱生の惑

實に通達すること能はず。故に煩惱障とも名づく。または俱生の惑ともいふ。身心と俱生するが故なり。いま見惑は、しばらくこれを置き。思惑に就て、これを論ずるに。此の貪瞋癡は、自己本來の面目を知らずして。いたづらに肉身を認めて、我相を執り、我愛を生じ。生死輪廻の上に、禍福を計し。順境に遇へば、貪欲を生じ。逆境に遇へば、瞋恚を生じ。其の禍福の現境は、過去因緣の果報なることを知らざるによりて、愚癡を生ず。

貪瞋癡の起因

第十一段

斯くの如きの貪瞋癡は、實に吾が心境を錯亂するものなりといへども。全く吾が心を離れて、妄生するものにあらず。蓋し吾が心の功用、彼れ無明に障礙せられて。發達することあたはず。終に顚倒の働きを起すによるなり。若しそれ、人々自己の心性に、通達するときは。謂はゆる貪欲は、慈悲となり。瞋恚は、勇猛となり。愚癡は、智慧となり。智仁勇は、人の達德にして。是れ全く、觀音勢至、文殊の法身なり。譬へば、眼を病むものゝ。種々の空華を見て、種々の疑惑を生じ。心念を勞するがごとし。若し其の病愈れば、空華を見るの眼識を以て。諸法の正色を、見ることを得べし。當に知るべし、眼を病むは、眼識により。心を惑はす

顚倒の働　三毒は三德に變す

心を惑はすは

此心の功用による

は、此心の功用によることを。さればいかなる人も、指頭を以て、眼を病み。掌を以て、種々の空華を見ざるべし。此の理を知らずして、煩惱を斷ぜんと欲し。貪欲、瞋恚、愚癡を去ると同時に、枯木死灰の如く成り果つるは。全く修行の道、其のよろしきを得ざるものにして。恰も眼を病む者の、空華を見るを懼れ。終に眼識を潰して、眞の盲目となるに同し。甚だ謂れなきことなり。

枯木死灰

第十二段

思惑の根本は、貪瞋痴なるが故に。人々みづから眞理を遮障するのみならず、自他の境界を、錯亂するものなることを知らば。各々方便を用ひて、程よく取除くべし。然らざれば、毒なることを知て、飽食するがごとく。これを他より制限することは、たとひ佛菩薩たりとも、能はざることなり。口に食ふの食物ならば。父母たるものは、其の子のために、誡むるのみならず。奪て與へざるべしといへども。心に食ふの食物は、みづから食はざるやうになすに非ざれば。父母の慈悲なるも、これを奪ふことあたはず。況や貪瞋痴の惑たることは、凡常の人といへども、これを知るの智識を具せり。是また佛性の味まざる證據なり。故に余は、思惑の上に就ては、深く論ぜず。其の教化は、其の人に放任せんのみ。要する

佛性味まず

思惑は自發の病氣

見惑は劇烈なる流行病

に、思惑は、不養生より生ずる、自發の病氣のごとし。彼れ見惑の如きは、尤も世間の錯亂を生ずるのみならず。世人の其の邪見に雷同すること。恰も流行病の劇烈なると一般なり。さりながら、思惑如藕絲とて。地藏の菩薩も、微細の思惑を斷ずること能はずといへり。是れ謂はゞ、世に十全健康の人なく。既に身あれば、幾分の病を帶ぶるがごとし。孔子の謂はゆる、四十而不惑とは、見惑を斷ずるに就て言ふ。七十而從心所欲不踰矩とは、全く思惑を斷じて、神通無碍なるをいふべし。經曰。理則頓悟。乗悟併消。事非頓除。因次第盡。（楞嚴經）と能く注意すれば、たとひ聖人ならざるも。七十に至る頃には、微細の思惑も、除くことを得べし。

第十三段

謂はゆる見惑は、學者の見識、全く邪路に陷いり。諸法の眞理に、契當せざるのみならず。大に世間を錯亂するにいたるものなり。故に學士たるもの、一たび謬りて見惑に陷いり。決定して、眞理なりと臆度するときは。たゞにみづから大惡人となるのみならず。或は言論に發し、或は行事に顯れて。世間幾億萬の人を倡導し。悉く邪見の深坑に墮落せしむ。誠に畏るべき迷惑なり。且つ方今は、殊に見惑の盛なる時なれば。いやしくも眞正の學士にして、救世の宿願ある

大惡人

見惑の盛なる時

第十四段　見惑の根源

我我所

凡夫

者は。まづ自己の見惑を除き。然る後ち方便を求めて、邪說を排し。世人の醉夢を覺醒し。悉く正知見に、安住せしめんことを勉むべし。是れ流行病の盛なる時は。苟も衞生の術に任ずる者は。萬般の豫防法に注意して、身命をも顧みざるに同じ。

此の見惑の根源を尋るに、思惑中に攝する愚癡より起るものにして。この愚癡に、漸く見解を生じ。終に增長して、種々の邪見と成れるものなり。その邪見に應じて、瞋恚も生じ、貪欲も生じ。譬へば、野狐の年を經るに隨て、種々の奇怪をなすにおなじ。蓋し無始無明の一念、我相を執り、我所を認め。我と我所とのために、心性の理を隔てられて。惑亂止むときなく。終に大病人となり。七顚八倒しても、解脫することあたはず。悲むべきことなり。十善法語、不邪見戒の段に曰く。此の邪見の罪、輕からぬ理は、能々憶念すべし。そも〳〵凡夫といふは。凡は、凡庸の義にして。尋常といふことなり。夫は、士夫にて、男子の通目なり。故に凡夫は、なみ〳〵の者と云ふに同じ。此の凡夫、この人間界に在るや。その生れし朝より、その死する夕まで。他事なし。この身ありて、眼耳鼻口あり。世界ありて、色聲香味あり。男子あり、女人あり。貴賤尊卑あり、苦樂憂喜あり。みな心に適ふと、適はぬとを差別す。心にかなふ境に、貪欲を生じ。心にかなはぬ境に、瞋恚を生ず。また斯く形相別々に、見え分かれてあれば。此と彼と相對して、人に打勝たんことを思ふ。左傳に、有血氣者、必相爭とあり。此れらを、貪欲、瞋恚、愚癡、驕慢等と名づく。是れ誰れ敎ふることを待たず。生れしより、この身心に。附添ひたる煩惱なれば。俱生の惑といふ。此の煩惱が、人間天上等の生死輪廻となる。淺間しきことなれども、一切凡夫の當然なれば。惡道には墮落せぬとなり。さて成長するに隨ひ、追々智慧づきたる時。或は邪敎邪師に從て、その法を受け。或は邪思惟分別して、斷常の二見を起し。甚しきは、殺生偸盜等に、怖れなきやうになる。父母師僧の敎に、違背するやうになる。神祇をも畏れず。聖賢德者をも、蔑にするやうになる。即ち因果をも信ぜず。義理をも、廢するにいたる。是れ生れのまゝの凡夫分際より、一段增長せし煩惱なれば。これを分別起の惑と名づく。此の類の者が、惡趣に墮落すると云ふ。此の俱生の惑、分別起の惑の差別あることを、憶念すれば。實に邪見の怖るべきことを知るべし。

第十五段

斷見
常見

内我見
外我見
惡平等見
惡差別見

箇々眞實

近くは天命人道に順じ、遠くは法性に順じて、この邪見を遠離する。是れ今日說くところの戒相なりと。

見惑の種類は、はなはだ多般なりといへども。要するに、斷常の二見を出てず。斷見と云ふは、無の見なり。常見といふは、有の見なり。此の有無斷常の見が、種々に變化して。終には六十二見と分かれ、九十六種の外道となる。その中、尤も世間に大害を生ずるものは。曰く內我見。曰く外我見。曰く惡平等見。曰く惡差別見。これなり。謂はゆる我見は、物に主たるの見なり。其の主を內に立つるを、內我見と云ひ。その主を外に立つるを、外我見といふ。此の主宰の見を以て、萬事、萬物を支配し。其の意に適すれば、これに福を與へ。その意に反すれば、これに禍を致し。全く主宰の必術を以て、一切の諸法を、隨意に處置し。因果を破し、義理を廢し。諸法の眞理を錯亂して、大に人間の惡果を招くものなり。抑も一切の諸法は、こと〳〵く自己の體相用を具し。箇々眞實にして、正因緣にあるものなるに。却て一己の見惑を以て、輕重左右し。その支配に應ぜしめんと欲するときは。諸法の眞實を害し、因緣を紊ること。これより劇烈なるはなかるべし。就中內我見は、人々みづから主宰となり。自己の意見に、一切を服從せしめんと欲する者なれば。其の結果は、必ず鬪諍を生じ。謂はゆる優勝劣敗の惡道に墮いるべし。其の外我見は、外に主宰を認めて。其の主宰の意に、阿諛從順し。また他人を帥ゐて、これが奴隷たらしめんと欲するものなれば。其の結果は、人の靈性を昧まし。あひ共に、他の妄想の奴隷となり果つべし。是故に內我見は、其の禍劇にして淺し。外我見は、其の禍緩にして深し。これを水火に譬ふ。內我見は火のごとく、外我見は水のごとし。火は毛髮を焦がし、手足を爛らすといへども。爲めに死するもの稀なり。水は裹れ漂ぶべしといへども、溺沒して死にいたるもの多し。蓋し內我見の猛烈なるは、秦の始皇のごときを最勝となす。外我見の猛利なるは、天主敎のごときを最勝となす。其の卑劣淺近なるものに至ては、稻麻竹葦のごとく。世間滔々、みな內外我見の徒にあらざるはなし。故に眞正の學士は、能々詮索して。此の見惑を除き去ることを勉むべし。そも〳〵我見に、內外の分別を生ずるは。全く有無斷常の見の上に、我執を持ち廻るものにして。人々の根機、および形勢に。强弱勇怯の別あるによるな

內我見の結果

外我見の結果

世間滔々內外我見の徒